JOY NOVEL

本格ミステリー長篇

十津川警部の挑戦 下

西村京太郎



20年前に解決した事件を追っていた捜査一課の元刑事が殺された事件は、犯人が自首して、あっさりと解決したかにみえた。が、父親の死に疑問を持ち、父親の足跡を追っていた娘が襲われ、十津川警部の命令で娘を護衛していた日下刑事が刺され、事件は新たな展開を見せ始めた。事件の背後に暴力団がからんでいると睨んだ十津川が、担当の捜査四課を訪れると、暴力団の組長と自殺した秘書が仕えていた代議士が親密だったことがわかる。しかし、ここでも十津川は「20年前のことに首をつっ込むつもりなら気をつけろ」と警告される。すでに三上刑事部長から「妙なことに首をつっ込むのは止めたまえ」と釘をさされていたのだ。窮地に追い込まれながらも、十津川警部は、ねばり強い捜査を続け、ついに犯人を追いつめる決定的な証拠をつかむ。しかし、そのことを知った犯人側も大反撃に出、事件のクライマックスはブルートレイン「はやぶさ」の車中に移る!!



JOY NOVELS

本格ミステリー長篇

十津川警部の挑戦 下

西村京太郎

実業之日本社

政治結社 5
故人の周辺 20
スキャンダル 36
男の表情 51
日記 67
死者の証言 84
友情と恋と 99
アメリカ 115

秘密 131
武器 147
動く 162
おとり 178
ブルートレイン 194
第二撃 210
海の彼方へ 226

カバー写真　南　正時
装画・挿画　辰巳四郎
装丁　サン・プランニング

政治結社

十津川は、一冊の週刊誌を見つけてきた。
三年前の『週刊ニッポン』である。あまり、売れている雑誌ではないが、それに、「日本の政治結社」というシリーズが、連載されていた。
その中に、「N会会長・寺本卓造」が、のっていた。三年前の十月五日号である。
カラーのグラビアで、寺本の顔写真が、のっていた。
寺本は、その中で、次のような談話をのせていた。
〈私は、今まで、無頼の生活を送ってきた。ずいぶん、社会にも、迷惑をかけても来た。これではいけないと思い、今般、政治結社「N会」を作り、少しでも、社会に貢献したいと、決意した次第である。考えてみると、私の父も、郷土で、昔、市会議員をやっていたから、私にも、その血が流れているのだと思う〉
そして、尊敬する政治家として、「故堀江先生」と、書かれてあった。
「これで、少しだが、つながったよ」
と、十津川は、その週刊誌を、亀井に見せた。
「堀江というと、二十年前、連続殺人事件の容疑者になった石崎は、当時、堀江代議士の個人秘書でしたね」
亀井は、眼を光らせた。
「もちろん、二十年前の事件に、寺本が関係していたかどうかわからない。だから、今のところ、小さなつながりでしかないがね」
「寺本と、石崎が、知り合いだったという可能性は、どうですかね？」

と、亀井が、きいた。
「それは、どうかな。寺本が、政治結社N会を作ったのは、この週刊誌にあるように、三年前だよ。二十年前の寺本は、今までに調べたところでは、斬った張ったの世界にいたみたいだからね。堀江代議士の秘書だった石崎と、知り合いだったという可能性は、まず、考えられないね」
「これによると、寺本の父親は、市会議員だったということですが、本当なんですかね？」
亀井が、首をかしげて、きいた。
「わからんね。そこも、調べてみるつもりでいるんだ」
と、十津川は、いった。
十津川は、捜査四課の花井に、もう一度、会って、その週刊誌を見せた。
花井は、笑って、
「やたらに、政治結社が生れるんで、対応に困るよ。昨日まで、暴力団だったのが、突然、政治結社に変って、日本のために、世界のためにと、いい出すんだ」
「ここに、寺本の父親のことがあるんだが、本当なのかね？」
「それは、本当だよ。寺本の父親、寺本半治は、市会議員をやっていた」
と、花井は肯いた。
「堀江代議士と、何か関係があるかね？」
十津川は、きいてみた。
花井は、「さあ、ねえ」と、考えてから、
「考えられるとすれば、堀江さんの郷里だからね。同じ党の人間だから、堀江さんの選挙の時、寺本の父親が、走り廻ったことは、あり得るね」
「寺本の父親は、まだ、生きているのかね？」
「いや、もう亡くなっている筈だよ」
と、花井は、いった。
そのあと、花井は、探るような眼になって、
「いったい、何を調べているんだ？　日下刑事が、

負傷した事件が、どこまで、広がっていくんだ？」
「別に、広がってはいかないよ。日下刑事をやった相手が、どうもN組の人間らしいので、その組長のことも、調べているだけさ」
と、十津川は、いった。だが、花井は、あまり、信じていない様子で、
「気をつけろよ」
と、いった。
「何をだ？」
「二十年前の事件に、君が、首を突っ込もうとしているのなら、気をつけたほうがいいと、思ってね」
と、花井は、いった。
十津川は、ただ、笑っただけで、花井と別れた。
次に、十津川が会ったのは、昔、新宿界隈で、派手に動き廻っていた松沼という男だった。
五十二歳の彼は、今は、四谷近くで、レストランをやっているが、二十年前頃は、M組の幹部で、傷害事件を起こして、警察の厄介になったりしていた男である。
一八〇センチを越す大男だった。
十津川は、店のカウンターに腰を下して、
「二十年前のことを、聞きたいんだがね」
と、切り出すと、松沼は、笑って、
「あの頃は、ずいぶん、無茶をやっていたからねえ」
と、いった。照れているようにも、見えたが、その頃を、隠したがっているようにも、見えた。
「N組の組長の寺本という男を、知っているかね？」
と、十津川は、きいた。
「ああ、知ってるよ。昔、S組があって、そこで、派手に動いていた男さ。小さいが、気の強い男でね。おれも、一度、奴に、ピストルで射たれたことがあったよ。幸い、かすり傷ですんだがね」
「今、寺本は、政治結社N会を作っているんだが、二十年前は、どうだったね？　あの頃から、政治の世界に入りたがっていたかね？」
「そういえば、奴は、なかなかの野心家で、おれは、

単なるヤクザでは、終りたくないと、あの頃から、いっていたみたいだがね。最近になって、政治結社なんか作ったのは、そのせいじゃないのかね」

と、松沼は、いった。

「その頃、寺本が、政治家の誰かと親しいみたいなことを、いってなかったかね？」

十津川は、きいてみた。

松沼は、ちょっと考えてから、

「おれのいたM組と、奴のいたS組が、手打ちをした時に、一緒に、飲んだことがあってね。二十年ほど前さ。あの時、自分のおやじが、市会議員か何かやってるといってたね。おやじは、偉い政治家と、親しいともいってたな。大臣をやってる、名前は――」

「堀江？」

「ああ、堀江だ。奴が、その名前を口にしたんだ」

「寺本自身、堀江代議士と、親しかったのかな？」

「それは、どうかね。ただ、奴が、こんなこともいってたのは、覚えてるよ。ただのヤクザじゃ、いくら派手にやっても、タカが知れてるが、うまく政治の世界に首を突っ込めば、大きな金儲けが、出来るってね」

「それで、君は、どういったんだね？」

「おれは、今でも、政治家ってやつが大嫌いだから、政治家になるくらいなら、ヤクザの方が、ましだと、いってやったよ」

と、いってから、松沼は、ニヤッと笑って、

「今、おれは、ごらんの通り、レストランなんかやってるが、やっぱり、政治家に知り合いがいた方が、何かと、便利だと思うね。まあ、今から、政治家のお偉いさんを見つけるのは、無理だろうがね」

「最近、寺本に、会ったかね？」

「二ケ月ほど前だったかな。店に、ふらりと、顔を出したよ」

「その時、何か話したかね？」

「週刊誌に出ていたから、いい顔になったねといっ

たんだ」
「そしたら？」
「笑ってたね。そして、おれは、政治の世界にもぐり込んで、大きく儲けるって、いっていたよ。それで、ああ、何とか、つながりをつけたんだなと、思ったね」
「しかし、堀江代議士は、もう死んでいるがね」
「息子が、今、代議士になっているんだろう？　そっちと、手をつないだんじゃないのかね？」
「どうやってかな？　堀江ジュニアに、寺本と結びつくようなダーティな部分があるのかな？」
「おれに聞いたって、そんなことは、わからないよ」
と、松沼は、いった。
十津川は、そのあたりを、友人で、中央新聞にいる田口に、新宿の喫茶店で会って、聞いてみた。
「亡くなった堀江さんのことねえ」
と、田口は、コーヒーを、かき廻しながら、考え込んだ。
「大臣を何回かしているから、自然に、ダーティな面も、出ていたんじゃないのかね？」
と、十津川は、きいた。
「つまり、利権のことかい？」
「ああ」
「金集めは、うまい人だったよ」
「そうか」
「ただ、派閥のナンバー・ワンにはならなかった。というより、努めて、ナンバー・ツーになっているみたいなところがあったから、マスコミに、叩かれることも、少なかったね。ずるいといえば、ずるいんだがね」
「疑獄事件に関係したというようなことは、なかったのかね？」
「それはないね。身辺が、きれいということもなかったが、検察にマークされるようなこともなかった筈だよ」
「現在の堀江ジュニアは、どうだ？　どんな男なの

かね？」
「何か、彼に、問題があるのか？」
　田口が、逆にきいた。
「いや、そんなものはないよ。ある男を、今、調べているんだが、その男が、亡くなった堀江代議士を尊敬しているんだ。今の堀江ジュニアの方は、どうなのかなと、思ってね」
「二度ばかり、会ったことがあるよ。背も高いし、アメリカに、長くいたので、英語もうまい。スマートな感じだね」
　と、田口は、いった。
「大物になりそうかね」
「まだ、新人の代議士だからね。わからないが、親爺の七光りだってあるし、スマートで、女性の人気もある。頭も切れそうだから、親爺ぐらいには、なるんじゃないかね」
「先物買いで、今の堀江に、くっついていれば、得をするかね？」
「さあ、どうかな」
「ダーティな部分は、全くないのかね？」
　と、十津川は、きいた。
「僕の知る限り、まだないね。それに、今から、ダーティだったら、どうしようもないよ」
　と、田口は、笑った。
「金はどうだ？　父親は、金集めがうまかったんだろう？　ジュニアの方は、どうなんだね？」
「今は、いいところ、三分の一くらいじゃないかね。将来性を買うスポンサーも多いらしいが」
「それでも、億単位なんじゃないか？」
「ああ。それに、父親の莫大な遺産もある」
「なるほどね。金には、不自由はしてないし、将来有望だとすれば、その甘さに、寄ってくる蟻もいるだろうね」
「まあね」
「N会という政治結社があるんだが、ここと、堀江ジュニアとは、関係は、ないんだろうか？」

「N会？」
「そうだ。N組の組長の寺本が、作った政治団体だよ」
と、十津川は、いった。
田口は、思い出したように、「ああ、あの寺本か」と、いった。
「確か、父親が、政治に関係していたので、自分も、政治をやりたいといっている男だろう？」
「父親は、市会議員で、すでに亡くなっている。この父親は、堀江代議士を、応援していたということだ。郷里が同じだからね」
「それで、息子の寺本も、堀江ジュニアと関係があるんじゃないかと、思うわけか？」
「あるかないかを、知りたいんだよ」
と、十津川は、いった。
「おれの知っている限りでは、今の堀江代議士は、アメリカ仕込みのスマートさが売り物だからね。暴力団の組長とは、いくら、政治団体を、標榜していても、会ったりはしないんじゃないかね」
「それなら、それで、いいんだがね」
と、十津川が、いうと、田口は、難しい顔になって、
「堀江代議士が、寺本と関係しているなんて、信じられないがねえ」
「そうか」
「彼の身辺を、もう一度、調べてみるがね」
と、田口は、いった。
十津川は、田口と別れて、捜査本部に、戻った。
「佐々木季見子が、どうしているか、わかるかね？」
と、十津川は、部下の刑事たちに、聞いた。
寺本のことを調べていて、彼女が、その後、どうしているか、摑んでいなかったからである。
「彼女は、今のところ、大人しくしているようです」
と、いったのは西本刑事だった。
「自分の家にいるのかね？」
「時々、図書館へ出かけて、古い新聞の縮刷版や、

古い週刊誌を、見ているそうです」
「われわれと同じように、寺本のことを調べているのかも知れないな」
と、十津川は、苦笑した。
「他には、何もしていません。北原の女が、あんな死に方をしてしまって、佐々木季見子も、今は、どうしていいか、わからないのではないかと思います」
と、西本は、いった。
「肝心の寺本の動きがよくわからないんだが、彼をマークしているのは、誰だったかね？」
十津川がきくと、清水が、手をあげて、
「寺本は、昨日から、箱根のホテルに行っています」
「箱根か」
「表向きは、静養となっていますが、火の粉が、自分に降りかかって来そうになったので、東京を、逃げ出したんだと思いますね。それ以外、考えられません」
と、清水は、いった。
「なぜ、箱根なのかな？」
十津川が、呟いた。
清水が、したり顔で、
「箱根が好きなんじゃありませんか」
「好きか。しかし、こんな時は、普通なら、外国へ、逃げ出すんじゃないかねえ」
と、十津川は、いった。
アメリカか、近いところでは、フイリッピンあたりに逃げて、ほとぼりのさめるのを待つのが、常識に思えるのだが、箱根というのは、何か理由があるのだろうか。
「警部」
と、亀井が、小声で、十津川を、呼んだ。
「何だい？　カメさん」
「堀江代議士の別荘が、箱根にあったような気がするんですが」
「堀江代議士の？」
「そうです。何かで、読んだような気がするんです」

「すぐ、調べてくれ」
と、十津川は、いった。
亀井は、席を立って、しばらく、どこかへ行っていたが、しばらくして、新聞の縮刷版を、持って、戻って来た。
「やはり出ていました。この前の総選挙で、堀江ジュニアが当選した時の新聞です。新人紹介に、出ているんです」
と、亀井は、その記事のところを開いて、十津川に見せた。
初当選した堀江に対するインタビューの記事である。その中に、次のような言葉が、あった。
「――こんなに選挙が疲れるものとは、思いませんでした。父の残してくれた別荘が、箱根にあるので、そこで、しばらく身体を休め、鋭気を養いたいと思っています」
堀江の言葉である。
「あったね」
と、十津川も、緊張した表情になって、いった。
「偶然かも知れませんが、気になります」
と、亀井が、いう。
「国会は、今、休みだったね？」
「そうです。堀江代議士も、箱根の別荘に行っている可能性があります」
「別荘の正確な場所を、調べてくれ」
と、十津川は、いった。
寺本が泊っている「ホテル日の出」の場所は、わかっている。
もちろん、そこに近いから、二人の間に関係があるというわけではないが、十津川は、場所が、わかれば、自分で出かけて行って、調べるつもりになっていた。
調べていた亀井が、メモを、十津川に見せて、
「少し離れていますが、行ってみますか？」

と、十津川に、きいた。
十津川は、まず、西本と清水の二人の刑事を、箱根にやった。
「ホテル日の出」に泊っている寺本の動きを見張らせるためである。
箱根で、寺本が、堀江ジュニアと接触することがあれば、現在も、二人の間に、何らかの関係があると見ていいと、思ったからである。
しかし、二人の刑事をやったものの、十津川は、あまり、自信がなかった。
堀江は、父親の後を継いだといっても、新進の代議士である。それに、アメリカ帰りで、スマートさが売り物だという。
父親の方なら、党の実力者でもあったから、利権を求めて、政治団体の人間が近づくことも考えられるが、まだ、政治家一年生で、政務次官でもない男に、寺本が近づくだろうか？
寺本が、尊敬する政治家として書いたのは、堀江の父親の方である。
西本から報告が来た。
間違いなく、寺本は、「ホテル日の出」に宿泊しているという。
「ひとりで来ています」
と、西本は、電話で、いった。
「何をしているんだ？」
「来て三日目になるようですが、ホテルの人の話では、散歩をしたり、ホテルの自転車で、サイクリングしたりしているそうです。釣りに行くこともあったといいます」
「妙に、まじめにしているんだね」
「寺本は、自分は、静養に来ているんだといっているそうです」
「人が訪ねて来たことは、ないのかね？」
「ホテルの従業員の知る限りでは、ないようですね」
と、いう。
当てが外れたかなと、十津川は、思ったが、翌日

の夕方になって、西本が、興奮した口調で、電話をかけてきた。
「寺本が、堀江代議士に、会いに行きましたよ」
「本当か？」
「午後二時頃、寺本が、ホテルの自転車で出かけたので、また、サイクリングかと思い、私と清水刑事も、自転車を借りて、後をつけました。その結果、彼が、堀江代議士の別荘に入って行くのを、確認しました。
「かなり、遠いだろう？」
「自転車で、一時間くらいです」
「寺本は、どのくらい、堀江代議士の別荘にいたんだ？」
「約二時間です。今、ホテルに、戻って来たところです」
と、西本は、いった。
「引き続き、寺本を、見張っていてくれ」
と、十津川は、西本に、いってから、受話器を置くと、亀井に、
「堀江ジュニアに、会いに行こうじゃないか」
と、いった。
十津川と、亀井は、翌日、小田急線の特急を利用して、箱根に向った。
箱根湯本からは、タクシーを拾って、堀江の別荘に行った。
雑木林の中の道をしばらく走ると、「堀江」という表札が、道の脇に、立ててあった。
二人は、タクシーをおり、更に、百メートルほど歩いた。
さして大きくはないが、落ち着いた感じの別荘が、現われた。
父親の代から使われていたところだけに、昔風の和風の建物である。玄関の横に、堀江の車らしい外車が、とめてあった。
シボレーコルベット・クーペである。
ベンツではなく、アメリカの車であることが、ア

メリカ帰りの堀江らしかったし、また、アメリカを代表するスポーツ・カーであることは、いかにも、四十代の若い政治家の感じだった。

十津川が、インターホンを押して、来意を告げると、二十五、六歳の若い青年が、玄関を開けて、中に入れてくれた。多分、堀江の秘書だろう。

中庭の見える応接間で、待っていると、セーター姿の堀江が、現われた。

長身で、ハンサムで、新しい政治家の感じだった。

堀江は微笑しながら、「堀江です」と、いい、

「警視庁の方が、どんなご用ですか」

と、十津川に、きいた。

「われわれは、今、東京で起きた殺人事件を捜査しています」

十津川は、相手の顔を見ながら、いった。

「それで？」

「N組という暴力団の幹部で、三村という男が、女と殺された事件です。一見、心中のように見えましたが、間違いなく、殺人でした。われわれとしては、N組の組長の寺本をマークしていたのですが、彼が、今、箱根のホテルに泊っていまして、昨日、堀江さんのこの別荘に、来たということを知って、お伺いしたわけです。寺本は、どんな用で、堀江さんに、会いに、来たんでしょうか？」

と、十津川が、きくと、堀江は、

「ああ」と、肯いて、

「昨日、訪ねて来た男のことですか？」

「そうです」

「名刺には、政治団体の名前が、書いてありましたがねえ。暴力団というのは、知りませんでしたよ」

「N会という政治結社も、やっています」

「なるほど」

「どんな用があって、彼が来たのか、教えて頂けませんか？」

「いいですよ。なんでも、サイクリングしていたら、堀江という表札を見た。自分の父は、前に、堀江代

議士に、いろいろと、お世話になったので、一度、お礼にと思ったので、突然ですが、お邪魔しましたといっていましたね。僕の父親の知り合いですよ」

堀江は、冷静な口調で、いった。

もちろん、十津川も、亀井も、相手の話を、うのみにするほど、お人好しではないが、といって、それは、嘘でしょうともいえない。

「堀江さんは、寺本の父親のことを、ご存知でしたか？」

と、十津川は、きいた。

「いや、これは、寺本さんにもいったんですが、申しわけないが、知らないんですよ。何しろ、私は、若い時には、政治には、関心がありませんでしたのでね」

堀江は、おだやかに、微笑した。

「あなたが、そういわれたら、寺本は、どういいました？」

と、亀井が、きいた。

「ちょっと、がっかりされていたようですね。私が、お父さんのことを、よく知っていると、思われていたんじゃありませんか。まあ、納得して、お帰りになりましたよ」

「寺本は、政治団体を作っているわけですが、何か、持ちかけてきませんでしたか？」

と、十津川は、きいた。

「どんなことをですか？　ご質問の意味が、よくわかりませんが」

「あなたの秘書にしろとか、或いは、寺本のN会へ、寄附しろとかいったことですが」

と、十津川が、いうと、堀江は、首を横に振って、

「そういうことは、ありませんでしたね。ひょっとして、寄附でもして欲しいというのが、目的で、会いに来たのではないかと、思ったんですがね」

「すると、寺本は、何もいわずですか？」

「いや、これからの日本のことを、いろいろと話し合いましたよ。政治のこと、経済のこと。或いは、

教育のことなんかをね。寺本さんは、ずいぶん、熱心に話していましたね。感銘することもありましたよ」

と、堀江は、いった。

（本当かな？）

と、十津川は、思いながら、

「彼は、今、箱根湯本のホテルに泊っていますが、そのことも、いっていましたか？」

「ホテルの名前はいいませんでしたが、静養に、箱根に来ているとは、いっていましたね。羨ましいと、いったのを覚えています」

「若い頃は、政治には、関心がなかったといわれましたが、それが、選挙に出られるようになったのは、なぜですか？」

「父が亡くなったあと、地元の人たちから、ぜひ、父のあとを継いでくれという要望が、ありましてね。私自身も、四十代になってから、政治の世界に入ってみたいと思ったこともあります」

「お父さんの秘書に、石崎という人がいたのを、ご存知ですか？」

「石崎？　ああ、二十年前に、自殺した人じゃありませんか？　その人のことなら、父に聞いたことがありますよ。優秀な男だったが、濡れ衣を着せられて、自殺してしまい、残念なことをしたとです」

「石崎さんが、自殺した時、どこにおられたんですか？」

と、十津川は、きいた。

「アメリカです」

堀江は、短かく、いった。

「アメリカには、結局、何年、おられたんですか？」

「全部で、五年です」

「その間に、向うの大学を出られた？」

「ええ。こっちの大学を出てから、行きまして、ワシントンの大学に入りました」

「すると、石崎さんとは、一度も、お会いになっていないわけですか？」

「夏休みには、日本に帰ったりしていましたからね。その時、石崎さんに、会っているかも知れないんですが、記憶がないんです」

と、堀江は、肩をすくませる感じで、いった。

「堀江さんは、石崎さんが、連続婦女殺人事件の犯人と、思いますか？」

亀井が、きくと、堀江は、手を横に振って、

「いや。濡れ衣だったことは、はっきりしているわけですからね」

と、いった。

「寺本のことに、話が戻りますが、彼が、また訪ねて来たら、会われるお積りですか？」

十津川が、きくと、堀江は、少し、考えてから、

「多分、会うでしょうね。私には、日本のことを真剣に考えている男というように、見えましたからね。それとも、あの男に会ってはいけないんですか？」

と、逆に、切りかえしてきた。

「そんなことは、ありません。ただ、われわれは、彼を殺人事件の重要参考人と、見ているんですよ。それで、また訪ねて来たら、どんな用件で来たか、教えて頂きたいと思うのですが」

「寺本という人は、犯人と、決ったわけじゃないんでしょう？」

「まだ、決っていません」

「それなら、彼が、私に、何を話そうと、それを、警察に報告する気はありませんよ」

と、堀江は、きっぱりと、いった。

「そうですか」

と、十津川は、肯いた。堀江が、そうしたいというのを、駄目だということは出来ない。

「もう一つ、お聞きしますが、堀江さんは、まだ結婚しておられないんですか？」

「一度、アメリカで結婚しました。向うの人です。しかし、二年して、別れましたよ。どうも私のわがままのせいだと思いますね」

故人の周辺

二日後、堀江は、東京に戻ったが、寺本の方は、その後も、箱根のホテルに、とどまっていた。

十津川と、亀井は、西本たちを、箱根に残して、いったん、東京の捜査本部に、帰った。

「もう一度、今度の事件を、考えてみよう」

と、十津川は、戻ってすぐ、亀井に、いった。

それだけ、十津川は、不安だったのである。

箱根で、寺本が、堀江と会ったとわかっても、二人の間に、関係がある証明には、ならない。いぜんとして、N組と、堀江の結びつきは、不明だし、今のままでは、二十年前の事件は、解明されそうになかった。

「問題は、N組の寺本が、今度の事件に、どう関(かかわ)っているかということになりますね」

と、亀井が、いった。

「関係はあると、確信しているよ」

と、十津川は、いった。

「北原というチンピラが、佐々木さんを殺したのも、うちの日下刑事が、襲われたのも、N組の幹部の三村が、ミユキと心中に見せかけて殺されたのも、全て、寺本の命令ということですか？」

「確証はないがね」

「寺本が、そんなことをしたのは、二十年前の事件のためだと、思われるわけですか？」

「そうだよ。カメさんだって、そう思っているんだろ？」

十津川は、微笑しながら、きき返した。

「そうですが、そのあとが、わからないんです。寺本のことを、いろいろと調べてみましたが、彼が、二十年前の連続殺人事件に、関係していたという証拠は、出て来ません。堀江ジュニアの方は、アメリ

カにいた。とすると、二人とも、二十年前の事件とは、関係がなくなってしまうんです」

亀井は、当惑した顔でいった。

「大胆な想像をしてみようか」

「どんなことですか？」

「これは、完全な想像でしかないんだが、二十年前の事件に、亡くなった堀江代議士が関係していたんじゃないかとね」

と、十津川が、いうと、亀井は、眼をむいて、

「大臣を歴任した人がですか？」

「人間は、どんな人だって、二面性があるからね」

「しかし、大臣までやった人が、連続殺人事件に関係していたとは、思えませんねえ。それも、若い女ばかりを狙った殺人事件ですよ。それに、第一、堀江代議士が、犯人だったとしても、すでに、亡くなっています。亡くなっている人のために、殺人が、行われるでしょうか？」

「故人の名誉を守るための殺人ということだって、あり得るよ。寺本は、故人を尊敬していると、書いている」

と、十津川は、いった。

「そういえば――」

と、亀井が、急に、考える眼になった。

「どうしたんだ？　カメさん」

「二十年前の事件の調査を、思い出したんです。確かあれに、車のことが書いてありました。赤いポルシェと、黒い高級車のことです。当時は、赤いポルシェのことばかり、注目されていましたが、今となってみると、黒い高級車の方にも、注目すべきだったかも知れません」

「私も、思い出したよ」

十津川も、肯いた。

日比谷公園で起きた第一の事件の時には、黒い高級車のことは、調査には、出ていない。

黒い高級車がはっきり出ているのは、多摩川で、アベックの女が、襲われて、殺された事件の時であ

る。

調書によれば、現場近くには、白いポルシェと、黒い高級車が、とまっていたと、書いてあった。

赤いポルシェが、共通して、出てくるので、当時の警察は、こちらをマークして、黒い高級車の方は、無視してしまった。

当時の事情としては、止むを得ないかも知れない。が、赤いポルシェの石崎が、犯人でないとすると、当然、黒い高級車の方が、怪しくなってくるのだ。

「それは、亡くなった堀江代議士が、乗っていたんじゃないかと、ふと、思ったんです」

と、亀井が、いった。

十津川の顔が、暗く、厳しいものになった。

今、自分や、亀井が下そうとしている結論の重大さを、知っていたからである。

すでに、亡くなっているとはいえ、堀江代議士は、保守党の重鎮だった人で、三回も、大臣をやっている。

その人間に対して、婦女を暴行しようとして、殺してしまった、それも、一人でなく、二人も、三人も殺したという容疑を、かけようとしているのである。

亀井は、さすがに、青ざめた顔になっていたが、

「もし、堀江代議士が、犯人だったとすれば、二十年前、捜査に、いろいろと、圧力がかかって来たわけも、わかって来ます」

と、いった。

「そうだな。堀江代議士が、国務大臣の時に、起きてもいたからね。もし、閣内から、連続殺人事件の犯人が出たら、それこそ、内閣の命取りであるばかりでなく、保守党にとっても、大きな傷になるからね」

「石崎が、赤いポルシェで、事件の現場にいた理由も、わかってくるんじゃありませんか？」

と、亀井が、いう。

「彼が、堀江代議士の秘書だったからか？」

「そうです。彼は、尊敬する堀江が、犯人ではないかと疑って、尾行していたんですよ」
「石崎は、当然、堀江の車を知っていたろうから、カメさんの推理は、当っているかも知れないね」
十津川は、考えながら、いった。
石崎は、殺人の疑いをかけられ、それに抗議して、自殺したが、本当の彼は、ひたすら、尊敬する堀江代議士に仕える忠実な秘書だったのではないのか。
石崎にとって、堀江は、神に近い存在だったのかも知れない。
ある時、その堀江が、若い女を殺したのではないか、という疑いを持った。
それが、第一の日比谷公園の事件ではなかったろうか。
あの夜、石崎は、たまたま、自分の赤いポルシェで、日比谷公園の傍を通りかかり、尿意を催したので、車を停めて、トイレに行った。
そこで、堀江代議士と思われる男が、若い女を殺して、立ち去るのを、目撃した。
愕然としたが、もちろん、警察に話すわけには、いかなかった。尊敬している堀江である。
石崎は、それから、堀江が、ひとりで、車で出て行くと、そっと、ポルシェで、尾行することにした。
石崎が、殺人現場に、しばしば、出没するようになったのは、そのためではなかったのか？
「こう考えれば、今までのことが、説明がつくんじゃないだろうか？」
と、十津川は、亀井を、見て、いった。
「そうですね。途方もない推理ですが、今までの疑問が、解消されることも、事実です」
と、亀井も、いう。
「今もいったように、圧力がかかった説明もつくし、石崎が、自殺した理由も、わかる。彼は、自分が死ぬことで、尊敬する堀江代議士の名誉を、守るつもりだったんだろう。それに、二十年たった現在、事件を再調査しようとした佐々木さんを殺した犯人の

意図もね。犯人は、恐らく、寺本で、彼は、尊敬している故人の名誉を守るために、まず、佐々木さんを、組員を使って、殺したんだと思うね。いや、殺して、息子の堀江ジュニアに、恩を売ったのかも知れない。寺本は、政治結社を作って、ひそかに、政界へ首を突っ込もうと考えていたらしいから、二十年前の事件が、ぶり返されたことは、いいチャンスだと思ったんじゃないかね」

「私も、そう思います。寺本が、佐々木さん殺しを、指示したとすれば、警部の推理が正しい筈です。寺本が、堀江ジュニアに、箱根で会ったのも、その件だったと思いますよ。ギブ・アンド・テイクで、堀江ジュニアは、寺本のために、何かすると、約束したんじゃありませんかね」

と、亀井が、いった。

「しかし、これを説明するのは、難しいと思うね。何しろ、堀江代議士は、もう故人だし、寺本や、堀江ジュニアが、本当のことを喋る筈がないからね」

「うちの部長だって、われわれが、堀江代議士のことを、調べ廻っていると知れば、あわてて、止めますよ」

亀井が、肩をすくめるようにして、いった。

「そうだな」

と、十津川も、肯いた。

三上刑事部長は、今度の事件の捜査本部長でもある。

生真面目な性格だが、周囲の声、特に、政治家の声に弱いところがある人だった。

だから、亀井のいう通り、十津川たちが、亡くなった堀江代議士の過去を調べるとわかれば、青くなって、制止するだろう。

堀江代議士がいた保守党の派閥には、なぜか、警察のOBが多い。

堀江ジュニアも、現在、同じ派閥に属しているから、警察OBからの圧力も、考えておかなければならないだろう。

「しかし、あまり考え過ぎると、動きがとれなくなってしまうね」

十津川は、うんざりした顔で、いった。

「とにかく、動いてみますか？」

と、亀井が、きいた。

「そうだな。動く前に、思案していても仕方がない」

「どこから、始めますか？」

「いきなり、大物にぶつかってみるか、それとも、小さなことから、調べていくかだが」

「大物というと、政治家ですか？」

「ああ、警察のOBで、故人と親しかった政治家が、何人か、まだ、健在だ。その人たちに会って、故人のことを聞いてみるかね？」

「うちの部長に、たちまち、筒抜けになりますよ。それに、故人の古傷を話してくれるとは、思えませんね。そんな調査を止めろといわれるのが、関の山です」

亀井は、そういった。

「正直にいえば、私も、同感なんだ」

と、十津川は、笑った。

いきなり、敵のふところに飛び込むようなやり方は、こちらが、相当しっかりした証拠をつかんでいないと、成功はおぼつかない。

「では、小さいことから調べていきますか？」

「ああ、そうする積りだ」

「どこからですか？」

「堀江代議士の故郷である松江に行ってみようと思っている。まだ、彼のことを、よく知っている人間が、健在だと思うからね。それから、寺本の父親のことも、聞けるかも知れないからね」

「しかし、私と二人で動けば、必ず、マークされて、苦情が、来ますよ。何のために、松江まで行く必要があるのかと」

亀井が、心配して、いった。

十津川は、肯いて、

「当然だよ。だから、松江には、私一人で行く。カ

メさんは、東京で、捜査を続けてくれ」
「一人で、大丈夫ですか？」
と、亀井が、きいた。
「行けば、何とかなるだろう」
と、十津川は、いった。
むしろ、十津川が、心配なのは、彼が、松江に行っている間のことだった。
「日下刑事は、回復に向っているから安心だが、佐々木季見子が、無茶なことをしなければいいと、思っているんだよ」
と、十津川は、いった。
「大丈夫と思いますよ。西本君たちが、マークしていますし、彼女も、われわれ同様、壁にぶつかって、動きがとれずにいる筈です」
亀井は、楽観的にいった。
「常識的に見れば、そうなんだがね。女というのは、われわれと違って、感覚で動くからね。予測できないから、心配なんだ」
と、十津川は、いい、亀井に、注意してくれと、念を押してから、松江に、出発した。
すでに、夜の八時を過ぎていて、飛行機の便はなくなっている。
十津川は、寝台特急の「出雲3号」を、利用することにした。
東京駅まで、亀井が、送ってきた。
「向うでは、十分に、気をつけて、行動して下さい」
と、亀井が、いった。
十津川は、笑って、
「大丈夫だよ。まさか、私を殺そうというようなバカな人間がいるとは、思えないからね」
「いや、わかりませんよ。われわれの推理が正しければ、事件の真相に近づいているわけですからね。相手は、佐々木さんも、殺しているんです」
と、亀井は、心配そうに、いった。
「わかった。用心しよう」
と、十津川は、肯いた。

十津川の乗った寝台特急「出雲3号」は、二一時二〇分に、東京を、発車した。

松江着は、明日の午前一〇時一六分である。

車内は、すいていた。

十津川は、二段ベッドの上段にもぐり込むと、手帳を開き、そこにメモした文字を読みながら、これまでの復習をしてみた。

二十年前、都内で、若い女の連続殺人事件が発生した。

それが、発端である。

事件を担当した小坂井警部が、佐々木刑事と、堀江代議士の秘書、石崎を、マークした。

事件の現場に、石崎の赤いポルシェが、いつも、とまっていたからである。

だが、小坂井警部と、佐々木刑事の捜査には、圧力が、かかった。

相手が、元国務大臣の堀江正志の秘書だったからだろう。

小坂井と、佐々木は、それでも、石崎を追いかけ、逮捕した。

だが、石崎は、釈放されたあと、無実だという遺言を残して、自殺してしまった。

当時の新聞を見ると、「抗議の自殺」と、書かれ、警察に対する非難の言葉で、埋っている。

石崎が、犯人だったのか、それとも、無実だったのか、彼が死んでしまった今となっては、確認のしようがない。

だが、彼を逮捕した小坂井警部自身、あとになって、石崎は、シロだったと、考えていたようなのだ。

佐々木刑事も、同じである。

だからこそ、二十年たってから、佐々木は、ひとりで、亡くなった小坂井の遺志も継いで、事件を、もう一度、調べ直そうとしたのだろう。

それを、許さない人間がいて、佐々木は、殺されてしまった。

十津川の考えるように、二十年前の事件の真犯人

は、堀江正志で、その名誉を守ろうとする人間が、北原というチンピラを使って、佐々木を、殺したのだろうか。

（そういえば、正志会という組織は、今、どうなっているのだろうか？）

と、十津川は、思った。

亡くなった堀江代議士の後援会である。石崎は、正志会に入り、そのあと、堀江の秘書になった。

父親の地盤を引きついで立候補して、当選した堀江ジュニアは、当然、正志会も、フルに、利用したことだろう。とすれば、今でも、正志会は、存続している筈である。名前を、変えたにしろである。

（正志会も、今度の犯罪に、関係しているのだろうか？）

そんなことを、考えている中に、十津川は、いつの間にか、眠ってしまった。

眼を覚ました時、列車は、城崎の近くを、走っていた。

十津川は、ベッドから出て、洗面所で、顔を洗った。

そのまま、自分の寝台に、戻ろうとして、十津川は、ふと、誰かに、見張られているような気がした。

振り向いたが、通路には、誰もいなかった。

（気のせいか？）

と、思った。が、気になった。それに、長年、刑事をやっていて、勘は働く方である。

十津川は、着がえをすませ、通路に出て、窓の外の景色に、眼をやった。

六時三九分、城崎に着いた。

温泉に来たのか、五、六人の団体が、おりて行く。

この列車には、食堂車が、連結されていないので、車内販売の駅弁を買った。

座席に直したベッドに腰をかけ、十津川は、駅弁を、食べ始めた。

気をつけて下さいといった亀井の言葉を、思い出した。

早くも、十津川の動きを監視している人間が、いるのだろうか？

定刻の一〇時一六分に、十津川の乗った「出雲3号」は、松江に着いた。

駅で、亡くなった堀江代議士の話を聞きたいというと、湖畔公園の近くにある会館を、教えてくれた。堀江正志記念会館という名前だという。

タクシーで、行くことにした。駅前の商店街を抜け、宍道湖にかかる橋を渡る。

松江城が見えてくる。それを右に見て、湖岸の道路を走り、ホテル群が立ち並ぶ辺りに、その記念会館があった。

真新しい二階建ての建物である。

十津川は、刑事と名乗らずに、六十歳くらいの館長に会った。

「東京で、堀江さんのことを調べているんですが」

と、十津川が、いうと、大野という館長は、ニコニコしながら、椅子を、すすめた。

「堀江先生は、郷土の誇りです。あんな立派な方は、いません」

大野は、堀江の寄附で、この松江に、市民のための体育館や、プールが作られたことを、熱心に、話した。そのパンフレットも見せてくれた。

「この記念会館には、何が、置いてあるんですか？」

と、きくと、大野は、「ご案内しましょう」と、立ち上った。

一階が、展示室になっていて、国務大臣の時の堀江の大きなパネル写真や、彼が愛用していたという万年筆や、パイプ、鞄、腕時計なども、ガラスケースに、並べてある。

堀江が書いた『政界の風雲を求めて』という本もあった。

「あれは、自伝ですか？」

と、十津川は、きいた。

「そうです。もう絶版ですが、お読みになるのなら、私が、余分に持っているので、差しあげますよ」

と、大野はいい、豪華な作りの、その本を、渡した。

堀江正志著とあるが、彼の喋るのを、ゴーストライターが、文章にしたものだろう。

ぱらぱらと、めくってみると、堀江の幼ない時のことから、書いてあるようだった。

「英雄色を好むといいますが、堀江さんの女性関係は、どうだったんですか？　さぞ、もてたと思いますが」

と、十津川が、持ちあげるように、いうと、大野は、ニヤッとして、

「先生は、艶聞も豊かな方でしたよ。私も、いくつか、聞いています」

「どういう女性とですか？」

「主に、玄人の女性でしたね。私が知っているのは、この松江で、ナンバー・ワンの芸者との艶聞です」

「それは、いつ頃のことですか？」

「先生が、二度目の大臣就任の時ですよ。郷里に、帰って来られて、盛大な歓迎会がありましてね。その時です」

「若い芸者さんですか？」

「あの時、二十七、八だから、今、四十歳ぐらいですかね。今でも、なかなか、色っぽいですよ」

「まだ、芸者をやっているんですか？」

「いや、今は、クラブのママですよ。可奈子という名前で、出ていたんで、そのまま、今の店の名前にしています」

「会って、話を聞きたいと思いますが」

と、十津川が、いうと、大野は、ちょっと考えてから、

「会員制のクラブですが、あなたが、行くことを、電話しておきますよ」

と、いってくれた。

十津川は、いったん、湖岸沿いのホテルに入り、夜になってから、橋を渡って、駅近くにある問題のクラブへ、出かけて行った。

雑居ビルの地下にあるクラブだった。
大野が、電話しておいてくれたので、すんなりと入り、ママの可奈子に、会うことが、出来た。
和服のよく似合う、当りの柔らかな女だった。
「堀江先生のことを、研究なさっていらっしゃるんですってね」
と、可奈子は、上機嫌で、十津川に、いった。
「そうなんです。それで、あなたに、先生のプライベイトな面をお聞きしたいと思いましてね」
と、十津川は、いった。
「先生は、素敵な方でしたわ。優しくて、男らしくて」
「あなたを前にして、いい辛いんですが、女性関係は、かなり派手だったんじゃありませんか？」
と、十津川は、きいてみた。
可奈子は、笑って、
「つまり、私の他にも、何人か、女がいたんじゃないかということ？」
「まあ、そうですが」
「正直にいえば、いましたよ。その中の二人ぐらいは、私も知っていましたわ」
「どんな女性ですか？」
「私より若い人」
と、わざとみたいに、短かくいってから、急に、クスクス笑い出して、
「今更、やきもちを焼いても仕方がないわね。肝心の先生が、亡くなってしまってるんだから」
「先生は、女性にもてる方でしたかね？」
と、十津川は、きいた。
「そりゃあ、もてる人でしたよ。何よりも優しかったし、お金にも、きれいでしたものね」
「先生に、妙な癖みたいなものは、ありませんでしたか？」
「妙な癖って？」
「突然、乱暴な行動に出たり、或いは、酒乱の癖があったりということですがね。突然、人が変ったみ

たいになることありませんでしたか？」
　可奈子は、眉をひそめて、
「なぜ、そんな変なことを、お聞きになるの？」
　と、十津川を見た。
「それらしいことを、聞いたものですからね」
「そんなこと、全くのでたらめだわ。おおかた、先生と同じ選挙区で、いつも負けてる人たちが流したデマだと思う。女性に甘いところはあったけど、立派な人よ。私は、他にも、何人か、政治家を知っているけど、その中じゃあ、一番、まともで、優しい人だった。政治家って、たいてい、傲慢で、信用がおけないでしょう。あの先生だけは、別だったわ」
　と、可奈子は、いった。
　熱っぽいいい方だった。
（この女は、本気で、堀江正志に惚れていたらしい）
　と、十津川は、思いながら、堀江が、犯人ではないかという疑いは、捨て切れなかった。
　前に一度、著名な弁護士が、事件を起こしたことがある。
　相つぐ幼女に対するいたずら事件である。それが、ある時、幼女の死亡となって、十津川たちが、捜査することになった。
　その時の犯人が、六十歳の弁護士である。
　正義の士として、高名な弁護士で、誰に聞いても、悪い噂は、耳に出来なかった。検察からさえ、彼が犯人の筈がないといわれたものである。
　しかし、七人目の幼女を、彼が、自分の車に連れ込んで、いたずらしようとしたところを、十津川たちが、逮捕した。
　いわば、あれは、病気なのだと、十津川は思う。
　他に、解釈のしようがないことだった。
　犯人の弁護士自身、逮捕された時、かえって、ほっとした表情になって、病気だと、呟いたのである。
　それと似ていることも、十分に、考えられるのではないか。
　堀江正志は、立派な政治家かも知れない。

大臣を、三度もやったのだから、人望も、政治力もあったであろう。
女性にも優しく、もてたらしい。故人になった今でも、堀江を尊敬する人間がいたとしても、おかしくはない。
だが、だからといって、完全無欠な人間だったという保証にはならないのだ。
そんな人間でも、かくされた部分に、暗いものが、息づいていたかも知れないのである。
しかし、それを、証明するのは、困難だと、十津川は、思った。
第一に、堀江が、亡くなってしまっていることがある。
第二に、堀江の周辺にいた人間が、知っていたとしても、彼の名誉のため、或いは、自分たちの利益のために、絶対に、隠そうとするだろう。
他にも、理由は、ある。
事件が、二十年前に起きたという時間的なこともある。
だが、何とか、突破口を開かなければならない。
十津川は、可奈子の言葉にヒントを得て、島根県で、堀江と、常に議席を争って来た岡本富雄に会ってみることにした。
岡本も、すでに、政界から身を引いて、松江市内で、悠々自適の生活を送っていた。
七十二歳の筈だが、まだ、かくしゃくとしている。
十津川を、広い応接室に通してから、
「堀江クンのことなら、話したいことは、いくらでもあるよ」
と、岡本は、いった。
「やたらに、立派な人間だという声ばかり聞こえるのですが、本当の人物像というのは、別にあるような気がするんです。それを、知りたいと、思いましてね」
と、十津川は、いった。
「うーん」

と、岡本は、唸り、和服姿で、腕を組んで、十津川を見つめていたが、
「わたしから見れば、そんな人格者じゃないわな」
「欠点の多い人間だったということですか？」
「と、いうより、きれいなだけじゃあ、日本の政治家は、つとまらん。ある政治家の周囲に、人が集るのは、そうすることが、自分の利益になるからだよ。人格に引かれてなんていうのは、稀れだからね」
「つまり、悪いことも、やったということですか？」
十津川は、ずばりと、きいた。
岡本は、笑って、
「そんないい方をすると、身も蓋もないがね。第一、金集めがうまくなければ、派閥のリーダーにはなれんし、金集めには、利益誘導だって、やらなければならないんだ。また、それが、日本の政治の実態だからね」
「堀江さんの活動に、わからないところは、ありませんでしたか？　彼は、秘密の部分があったというような噂を聞いたことは、ありませんでしたか？」
「何だか、よくわからないが」
「警察の厄介になるようなことを、堀江さんがしたことは、ないですか？　若い時の堀江さんでもいいんですが」
と、十津川が、きくと、岡本は、首を横に振って、
「それはないよ。別に、敵を賞めるわけじゃないが、堀江は、その点、立派でね。警察沙汰を起こしたことはない筈だよ」
と、いった。
十津川は、失望した。
（堀江正志は、事件に関係なかったのだろうか？）
それなら、二十年後の今、事件が、亡霊のようによみがえったのは、なぜなのだろうか？　十津川は、東京に戻って、もう一度、調べ直すことにした。

スキャンダル

東京に戻った十津川は、二十年前の三つの事件の時の堀江正志のアリバイを、調べてみることにした。

堀江に、若い女性を襲うような性癖があったかどうか、結局、わからなかったとなると、あとは、アリバイ調査しか、方法が、ないのである。

だが、これが、難しかった。

とにかく、二十年前のことだし、その上、故人のアリバイを調べているとわかったら、圧力がかかるに決っていたからである。

ひそかに、二十年も昔のアリバイを、調べなければならないのである。

堀江が、国務大臣の時なら、大臣の毎日の行動が、記録として残っているのだが、二十年前の殺人事件は、彼が、大臣をやめてから、起きている。

しかも日曜日ごとに起きている。ということは、国会が休みだから、代議士の堀江には、夜、殺人を犯すチャンスは、あったことになってくる。

だが、深夜では、アリバイの証明も難しいが、アリバイが無いことを証明することも、難しいのだ。

二十年前、京王多摩川の河原で起きた第二の殺人事件の時、黒い高級車が、目撃されている。

この高級車を、堀江正志が、運転していたのではないかという疑いがあるので、十津川が、この目撃者に、もう一度、当ってみようと思ったが、すでに、死亡してしまっていた。

この目撃者から事情を聴取した刑事の調書も、白いポルシェの方を、本命と考えていたので、あっさりとしか書かれていなかった。

目撃者は、もっと、くわしく、この車を見ていたかも知れないのだが、それは、調書に、のっていないのである。

堀江正志の友人も、死亡してしまった者が多かった。

「参ったね」

と、十津川は、亀井に、思わず、弱音を吐いた。

捜査が、壁にぶつかってしまったのだ。

最近の事件なら、妨害があっても、何とか、捜査を進めるのだが、二十年前の事件では、そうも、いかなかった。

聞き込みに当る相手が、いないのである。

そんな袋小路に入っている時、亀井が、一つの情報を、もたらした。

「本当か、嘘かわかりませんが、写真週刊誌の『スクープ』が、堀江の写真をのせようとして、クレームがつき、やめたという噂を聞いたんですが」

と、亀井は、いった。

「堀江って、今の堀江ジュニアの方かね？」

「そうです」

「どんな写真なんだ？」

「それが、わかりませんが、堀江にとって、スキャンダルになりかねない写真だという噂です」

十津川は考え込んだ。

それが、どんな写真なのかわからない。問題は、内容自体よりも、今度の事件に、関係があるかどうかである。

もし、全く関係がないのなら、それが、たとえ、堀江ジュニアのヌード写真でも、十津川には、何の関心もないのだ。

「一応、調べてみるか」

と、十津川は、腰を上げた。

捜査が、壁にぶつかって、動きが取れなくなっていたからである。

『スクープ』は、大手の出版社ではなく、その週刊誌だけを出している小さな出版社だった。

十津川と、亀井は、神田にあるその出版社を、訪ねた。

会田という社長に会った。

亀井が、問題の写真のことをいうと、会田は、手を振って、
「そんなのは、完全なデマですよ。堀江代議士の写真なんか、のせようとしたことはありませんよ」
と、いった。
「しかし、今週号は、遅れていますね。いつもは、月曜日に出るのに、今週は、まだ出ていませんが」
と、亀井が、いった。
「それは、印刷所の都合ですよ」
「堀江さんの方から、圧力が、かかったという噂を聞いたんですが、それは、どうなんですか？」
と、十津川は、きいてみた。
会田は、とんでもないという顔で、
「そんなことはありませんよ。第一、堀江代議士の写真なんか、のせる気はなかったんですから」
「嘘をつかれると、困るんですがね」
「嘘なんか、つきませんよ。こんなことで、警察に、文句をいわれるとは、思っていませんでしたねえ」
会田は、首をすくめた。
十津川と、亀井は、いったん、出版社を出たが、近くの喫茶店で、待機して、出てくる編集部員の一人を、つかまえることにした。
若い編集部員を、二人は、つかまえた。
十津川は、その青年を、喫茶店に連れ込むと、警察手帳を見せて、まず、圧力をかけた。
「今週号に、のることになっていた堀江代議士の写真のことを、聞きたいんだよ」
と、十津川は、彼には珍しく、押さえつけるような、喋り方をした。
相手は、十津川の狙い通り、青い顔になって、
「何のことですか？」
「堀江代議士のスキャンダルを、のせることになっていたんだろう？　なぜ、それを、急にやめたのか、その間の詳しい事情を、話して貰いたいんだよ」
と、十津川は、いった。
「そんなものは、ありませんよ」

相手は、怯えた調子で、いった。
「脅かされてるのか？」
と、亀井が、相手の顔を、のぞき込むように見た。
若い編集部員は、眼をそらせるようにしながら、
「政治家のスキャンダル写真なんか、初めから、ありませんでしたよ」
「いや、あった筈だ。それも、堀江代議士のものと、個人名まで、わかっているんだよ。それを、押さえてしまったのは、堀江代議士からの圧力かね？　それとも、新宿歌舞伎町の暴力団N組の線かね？　いや、政治結社N会の線かね？」
十津川が、きいていくと、若い編集部員が、だんだん、落ち着きを失っていった。
「やはり、寺本の線か」
と、十津川は、肯いた。
相手は、押し黙っている。
何かを怖がっているのは、明らかだった。
そんな相手を、十津川は、励ますように、
「君から聞いたとはいわないから、どんな写真で、誰が持ち込んだのか、教えてくれないかね？　どうしても、われわれは、知りたいんだよ。協力してくれないかね？」
「駄目ですよ」
と、相手は、小さい声で、いった。
「駄目ということは、そんな写真が、あったことだけは、事実なんだね？」
「――――」
「君には、迷惑は、かけたくないから、どこの誰に会えば、その写真が見られるのか、教えてくれないかね？」
と、十津川は、柔らかく、いった。
相手は、それでも、まだ、ためらっているようだったが、しばらくして、
「今週号は、全部、処分してしまったけど、試し刷りしたのを、うちの編集長が、何部か持っている筈ですよ」

と、いった。
「編集長の名前と、住所を教えてくれないかね？」
「名前は、前島です。住所は、練馬の――」
と、相手は、ぼそぼそとした声で、いった。
「行ってみよう」
と、十津川は、亀井にいい、若い編集部員を残して、店を出た。
二人は、パトカーを飛ばして、練馬に向った。
前島という編集長の家は、練馬の駅から、車で十二、三分のところにある建売住宅の一軒だった。
「前島」という表札を見つけて、玄関の前に立つと、扉が開いていた。
何となく、家の中の空気が、おかしい。
二階から、人の呻き声が、聞こえてきた。
「前島さん！」
と、亀井が、怒鳴り、応答がないのを見て十津川と二人、中に入って、二階を見上げた。
すでに、七時を廻っていて、階下にも、二階にも、電灯が点いている。
その電灯に照らされた一階の応接室が、ひと眼で、荒らされているのが、わかった。
十津川は、躊躇せずに、二階に、あがって行った。
六畳の和室に、男が倒れて、呻き声をあげていた。
殴りつけられたらしく、顔が、腫れあがっている。
腹を押さえているところをみると、腹も殴られたのだろう。
顔の方は、殴られて、眼がふさがったみたいになっている。血も、流れていた。
「大丈夫ですか？」
と、十津川が、声をかけ、亀井は、階下へ行って、タオルを水で冷やして、持って来た。
それを、男の顔に当ててやりながら、十津川は、
「手ひどく痛めつけられたものですね。警察に連絡した方が、いいんじゃないかな」
「やめてくれ」
と、男が、かすれた声で、いった。

「なぜです？」
「犯人は、わかってるんだ。それに、警察沙汰にしたくない」
と、いってから、脹れた眼を、精一杯、開いて、十津川を見、亀井を見た。
「君たちは、誰なんだ？」
「今は、あなたの味方ですよ。『スクープ』編集長の前島さんですね？」
「そうだが、君たちは？」
と、前島は、また、きいた。
「今週号の試し刷りは、渡してしまったんですか？」
「持って行ったよ」
前島は、ぼそっとした声で、いった。
十津川と、亀井は、顔を見合せてしまった。
前島は、のろのろと、起き上ると、脹れた顔で、ニヤッとした。
「だが、一部だけ、まだ、あるんだ。こんなことになると思って、一部だけ、別に隠しておいたのさ」
「それを、見せてくれませんか？」
「駄目だよ。君たちが、何者かもわからないのに、見せられるか」
「私たちは、警視庁の人間ですよ」
十津川は、警察手帳を取り出して、前島に見せた。
前島は、眉をひそめて、
「警察が、なぜ、欲しがるんだ？　別に、取締りに引っかかるような写真は、のせてないがね」
「とにかく見せて下さい」
と、十津川は、いった。
「嫌だといったら？」
「仕方がありません。家探しをしますよ。あなたは、何者かに、殺されかけた。その事件に関しての家探しです」
「わかった」
と、前島はいい、立ち上って、次の間に入って行った。
見ていると、その部屋の床の間の掛軸に貼りつけ

てあった週刊誌を、剝がして、持って来た。
表紙は、白紙になっている見本だった。
前島は、それを、十津川に渡してから、
「これを見せたことは、公にはしないで下さい。あくまで、内緒にしておいて欲しい。さもないと、私は、殺されるかも知れませんからね」
と、いった。
「わかりました。捜査の参考にするだけで、誰にも、見せませんよ」
と、十津川は、いい、それを預って、外へ出た。
パトカーに戻ると、しばらく走らせてから、車をとめ、問題の週刊誌のページをめくっていった。
堀江ジュニアの写真は三ページ目にのっていた。
亀井も、ハンドルから手を放して、のぞき込んだ。
夜の景色の中に、二人の男が、浮び上っている写真だった。
一人は、堀江である。
もう一人は、長身の青年だった。
〈若手代議士は、ホモだった?〉
そんなキャプションが、躍っている。
長身の美青年の名前は、吉岡雅史、二十八歳と、書かれている。
〈その世界では、有名な美青年で、渋い二枚目タレントのKとの関係でも知られている〉
と、説明されている。
Kというタレントは、四十歳を過ぎても結婚せず、よく、週刊誌にホモではないかと書かれている。
次のページも、その続きで、ポルシェに乗り込んだ、二人が、写っていた。
運転しているのは、堀江で、助手席にいるのは、吉岡雅史である。
吉岡の美しい顔は、堀江の方に向けられている。

「こんな写真だったとはね」
十津川は、小さな溜息をついた。
違った写真を、十津川は、想像していたのだ。
「これは、若手の政治家にとって、致命傷でしょうかね？」
亀井が、首をかしげて、十津川に、きいた。
「人気には、差し障るだろうね。最近は、同性愛に、エイズが多いといわれたりしているしね」
「そういえば、堀江代議士は、まだ、独身でしたね」
と、亀井が、いった。
最近は、四十代で独身の男がいても、さほど、おかしくはない。女もである。
しかし、同性愛の噂が立てば、独身であることが、その証拠のように、受け取られてしまう可能性がある。
「問題は、このことと、二十年前の殺人事件が、関係があるかどうかということだな」
と、十津川が、いった。
亀井が、じっと、写真を見ながら、
「それは、むしろ、逆じゃありませんか？　同性に興味があるのなら、異性に対して、関心がなくなるでしょうから」
と、いう。
「それは、そうかも知れないな」
と、十津川も肯いた。
十津川は少しばかり、落胆していた。
ひょっとして、堀江が酔って、女に絡んでいるような写真ではないかと、思っていたのである。
それなら、二十年前の殺人事件に、何とか関係が、考えられるかも知れない。もちろん、少し、こじつけ気味だが、壁にぶつかってしまった捜査に、明りが見えるのではないかと、期待していたのだ。
堀江が、ホモだったというのでは、政治家として、マイナスでも、二十年前の女性連続殺人に、つながって、きそうにない。
「無視しますか？」

と、亀井が、きいた。
「そうだねえ」
「もし、事件に関係がないとすると、ホモだろうが、レズだろうが、それは、個人の趣味の問題で、警察とは、関係ありませんから」
亀井は、変に、理屈っぽく、いった。
「堀江ジュニア本人や、彼の事務所に当っても、この写真のことは、否定するだろうしね」
と、十津川は、いった。
「では、吉岡雅史という青年に、会ってみますか？」
と、亀井が、きいた。
「そうだな。この男に会えば、堀江のことがよくわかるかも知れない」
と、十津川は、いった。
二人は、六本木の、吉岡が働いているという店に行ってみた。
雑居ビルの三階にあって、どっしりした装飾の、落ち着いた店だった。
十津川は、異様な雰囲気を想像していたのだが、そんなことはなかった。
客は、中年の男が多かったが、女性客もいる。
ただ、酒の相手をしている青年たちは、一様に、背が高く、整った顔立ちだった。
十津川と、亀井は、カウンターに腰を下し、ビールを頼んでから、
「吉岡さんは？」
と、きいた。
「彼、休んでいます」
と、カウンターの向うの青年が、いった。
「いつから、休んでいるんだね？」
「昨日からです」
と、ちょっとハーフに見える色白な青年は眼を伏せた感じで、いった。
（ずいぶんまつげの長い青年だな）
と、十津川は、感心しながら、
「彼の住所を知らないかね？」

「知りません」
「どうしても、至急、会いたいんだがね」
と、十津川は、警察手帳を見せて、いった。
マネージャーが、あわてて、飛んで来た。
がっしりした身体つきの中年の男だった。
「吉岡君が、何か、事件を起こしたんですか？」
と、マネージャーは、きいた。
十津川は、笑って、
「そんなことはなくて、参考人として、話を聞きたいだけなんだよ」
「そうですか」
と、マネージャーは、ほっとした顔になって、渋谷のマンションを、教えてくれた。
「もし、そこにいなかったら、旅行に出かけているかも知れません」
「行先は、わからないかな？」
と、亀井がきくと、マネージャーは、奥へ行って、調べていたが、戻って来て、
「ひょっとすると、下田へ行っているかも知れないということです」
「下田に、何かあるのかね？」
「深町さんの別荘があるんです。そこへ呼ばれて、行っているかも知れないと、吉岡君の友だちが、いっているんですが」
「深町というのは、誰なの？」
と、亀井がきくと、マネージャーは、一瞬、呆れたような顔になって、
「青年実業家で有名な人ですよ。六本木や、原宿に、いくつも、ビルを持っています」
「ふーん」
と、亀井は、鼻を鳴らした。
そういわれても、亀井には、無縁な人間に変りはない。
十津川と、亀井は、下田の別荘の場所を聞いてから、店を出た。
パトカーを、渋谷に、走らせた。

マンションは、すぐわかったが、吉岡は、留守だった。
「下田へ行っているようですね」
と、亀井が、いった。
「まず、電話してみよう」
十津川は、近くにあった公衆電話で、メモして来た下田の別荘のダイヤルを回してみた。
呼んでいるベルの音が聞こえてくるが、相手は、いっこうに、出て来ない。
十津川は、嫌な予感に襲われた。
「とにかく、行ってみよう」
と、十津川は、亀井にいい、捜査本部の西本たちに、連絡をしておいてから、パトカーで、伊豆下田に向った。
不安が濃くなっていった。
伊豆半島に入った頃には、深夜になっていた。
下田の町には、午前四時半に着いた。
まだ、暗く、町は、眠っている。
二人は、地図で確かめながら、海辺にある深町吾郎の別荘に向った。
海に突き出したように建てられた、鉄筋の家だった。
「明りがついていませんね」
と、車の中から、亀井が、いった。
「夜が明けてから、訪ねてみよう」
と、十津川は、いった。
少しずつ、周囲が、明るくなってくる。
海辺で迎える朝は、十津川には、久しぶりだった。
犬を連れて、海辺をジョギングしてくる若い娘の姿が、見えた。
「いいねえ」
と、十津川は、思わず、見とれた。
二人は、車を出ると、別荘の玄関まで、歩いて行った。
「FUKAMACHI」と、ローマ字で書かれた表札が、見えた。

玄関横の車庫に、ポルシェと、ベンツが、並んで駐まっている。
亀井が、インターホンを押した。
だが、応答はない。
十津川は、また、嫌な予感がしてきた。が、だからといって、令状もなしに、家の中に踏み込むわけにはいかなかった。
二人は、別荘の裏に廻ってみた。
純白のクルーザーが、繋留されているのが、眼に入った。
「大きな船ですね」
亀井が、感心したように、いった。
「これなら、小笠原ぐらいは、楽に行けるね」
と、十津川は、いった。
低い鉄柵を乗り越えて、二人は、クルーザーが、繋留されている桟橋に、歩いて行った。
キャビンの窓には、カーテンが、かかっているので、桟橋から、中は、見えない。
ただ、船室内に、明りがついているのは、わかった。
二人は、タラップを渡って、クルーザーに、乗り込んだ。
甲板からドアを開けて、キャビンに入ってみた。
テーブルが置かれた部屋が見えた。レミーのびんが置かれ、床には、グラスが、転がっていた。
その奥には、ベッドが、並んでいたが、そこをのぞいた十津川の顔が、ゆがんだ。
ダブルベッドに、ガウン姿の男が二人、折り重なって、倒れているのを、見つけたからだった。
血が、飛び散っている。
(やはりか)
と、十津川は、思いながら、二人の脈を診た。すでに、脈は、打っていなかった。
「拳銃ですか？」
と、亀井が、十津川に、声をかけた。
「らしいね。二人とも、背中から射たれているよ」

と、十津川は、重い口調で、いった。
キャビンの中が、荒らされた気配はない。せいぜい、グラスが、床に転がっていたくらいである。
従って、犯人は、この二人を殺すために、まっすぐに、キャビンに入り、逃げようとする二人を、背後から射ったのだろう。
キャビンの壁や、窓を見ても、流れ弾が当った形跡がないから、犯人は落ち着き払って、射ったものと思われる。
銃を持ちなれた人間が、射ったのだろうと、十津川は、思った。
十津川が、指示して、亀井が、キャビン内の電話を使って、一一〇番した。
七、八分して、静岡県警のパトカーや、鑑識の車が、到着した。
刑事たちの間から、皆川という警部が、十津川に、あいさつした。
「東京の事件に関係があるのではないかと思って、来てみたら、死体に、ぶつかってしまったというわけです」
と、十津川は、いった。が、堀江代議士の名前は、出さなかった。
「では、この二人を、ご存知なんですね？」
皆川警部が、きいた。
「一人は、この別荘と、クルーザーの所有者の深町さんでしょう。正直にいって、この人物については、われわれは、よく知らないのです。もう一人の被害者に、話を聞きたくて、この別荘を訪ねて来たからです。もう一人の若者は、名前は、吉岡雅史。二十八歳、水商売の人間です。住所は、東京の渋谷にあるマンションです」
「二人は、ガウン姿で、殺されていますが、その気のある人間なんですか？」
「少くとも、吉岡雅史の方は、ホモだといわれていますね」
と、十津川は、いった。

「すると、ホモの仲間に、嫉妬から、殺されたということになりますかね」
皆川は、じっと、二つの死体を、見下している。
「かも知れませんね」
と、十津川は、逆わずに、いった。
彼は、犯人が、吉岡雅史の口を封じるために、一緒にいた深町まで殺したと考えていたが、今の段階では、そこまで、話す気にはなれなかったのである。
それは、吉岡と、堀江の関係が、はっきりしてからでいいだろう。
推測で、話すわけにはいかなかったし、堀江の名前を出すことで、捜査に、待ったがかかるのが、何よりも、怖かったからだった。
「われわれは、東京に戻って、この吉岡のマンションを調べてみます。何かわかったら、すぐ、お知らせしますよ」
と、十津川は、皆川に、いった。
十津川と、亀井は、急遽、東京に引き返した。
二人とも、難しい顔になっていた。下田で、吉岡を殺した犯人は、当然、彼のマンションも、調べているに違いないと、思ったからである。
都合の悪いものがあれば、すでに持ち去られてしまっているだろう。
東京に戻り、渋谷の吉岡のマンションに廻ってみると、案の定、部屋の中は、荒らされていた。
それでも、十津川と亀井は、部屋の中を、丁寧に、調べてみた。
最初に、亀井が、アドレスブックを見つけた。
男の名前ばかり、三十人近く書き込んである手帳である。電話番号も、のっている。
その中には、有名なタレントの名前もあった。
「芸能レポーターが、欲しがりそうな手帳ですね」
と、亀井が、いった。
「堀江代議士の名前は、ないね」
「ないから、持って行かなかったんじゃありませんか」

「カメさんは、どう思うね？」
と、十津川が、きいた。
「何がですか？」
「堀江代議士と、殺された吉岡雅史の関係さ。本当に、ホモだったんだろうか？」
「事実だから、あの週刊誌を、押さえたんでしょうし、吉岡を、射殺してしまったんじゃないかと、思うんですが」
「確かに、そう見えるんだがねえ」
十津川は、考え込んでいた。
「何かおかしいですか？」
「堀江は、新進の代議士として、これからの活躍が期待されている人間だよ。そんな大事な時に、たとえ、その気があったとしても、写真週刊誌に狙われるような真似をするだろうか？　それに、吉岡のアドレスブックにも、堀江の名前は、のっていない」
「その説明は、可能ですよ。堀江は、ずっと、自分の感情を抑えていたが、代議士に当選し、安心したので、つい、性癖が出てしまったんじゃないでしょうか。アドレスブックの方は、堀江が、あの日が初めての吉岡の客なので、まだ、のっていなかったということだと思いますね」
と、亀井は、いった。
そうかも知れない。
だが、十津川は、なぜか、堀江が、吉岡に会ったのは、ホモのせいではないのではないかと、思っていた。
それなら、何のためだったのかといわれると、困るのだが。
なおも、部屋の中を探していた亀井が、急に、十津川を見て、
「妙ですねえ。吉岡雅史本人の写真が、見つかりませんよ」

男の表情

十津川と、亀井は、捜査本部の新宿署に戻った。

戻ってからも、吉岡のマンションに、一枚も、彼の写真がなかったことが、気になった。

本来、自分の美貌が売りものの人間の筈である。むしろ、彼のパネル写真が、部屋中に飾られている方が、自然なのだ。

ところが、パネル写真どころか、アルバムも、見つからなかった。

明らかに、何者かが、吉岡の写真を、全部、持ち去ってしまったのである。

十津川が、わからないのは、その理由だった。

吉岡が、犯人と一緒に写っている写真があったので、それを、犯人が、持ち去ったというのなら、よくわかる。

しかし、吉岡が写っている写真全部に、犯人が、写っていたとは、考えられないのだ。

「まだ、理由を、お考えですか？」

と、亀井が、きいた。

十津川は、椅子に腰を下して、煙草に火をつけてから、

「どうにも、不可解だからね」

「犯人が、吉岡を死ぬほど好きなので、殺したあと、彼のマンションに行き、写真を、全部、持ち去ったんじゃありませんか。今頃、犯人は、吉岡の写真に囲まれているのかも知れませんよ」

と、亀井が、いった。

「まさかねえ」

と、十津川は、苦笑した。

彼は、煙草の煙を吐き出しながら、

「犯人が、ある男の写真を、全部、持ち去るというのは、どんな場合だろう？」

と、亀井以外の刑事たちにも、聞いてみた。
「その男のことを、知られたくないからというのが、まず、考えられますが」
と、西本刑事が、いった。
「しかし、吉岡雅史は、ホモの人間の間では、有名な男だそうだよ。われわれは、知らなかったがね」
「写真が、ほとんどないということは、考えられませんか？　写真を撮られるのが嫌いな人間というのもいますから」
「そういう種類の人間じゃないようだね」
と、亀井が、いった。
むしろ、自己顕示欲の強い男といった方がいいだろう。
十津川は、黙って、しばらく考えていたが、
「犯人が、吉岡の写真を、持ち去ったのなら、われわれは、彼の写真を、集めてやろうじゃないか。彼の働いていた六本木の店や、彼と関係のあった人間に当って、出来得る限り、彼の写真を、貰ってくるんだ」
と、部下の刑事たちに、指示した。
刑事たちが、すぐ、捜査本部を、飛び出して行った。
（何がわかるだろうか？）
吉岡雅史の写真が、十津川の手元に、集まって来た。
簡単に集まるところをみると、吉岡が、写真嫌いだったわけではないのだ。むしろ、十津川の想像した通り、吉岡は、自己顕示欲が強く、写真を撮られるのが、好きだったらしい。
十津川は、集まった三十枚を越す吉岡の写真を、壁に貼りつけた。
「これを見て、何か感想があったら、いってくれ」
と、十津川は、亀井たちに、いった。
全員が、写真を見つめた。
「人間というのは、いろいろな表情をするものですねえ」

と、いう者もいるし、
「美男子というのは、どの角度から撮っても、いい男に、映りますね」
と、感心する者もいた。が、これはという感想は、いっこうに、生れて来なかった。
（どうも、わからないな）
と、十津川は、首をかしげた。
十津川も、同じような感想しか、浮んで来ないからである。
犯人が、吉岡のマンションから、彼の写真を、一枚残らず持ち去ったのには、それなりの理由が、ある筈なのだ。
それがわかれば、今度の事件の解決に、役立つかも知れない。
「もっと集めてくれ」
と、十津川は、部下の刑事たちに、いった。
十津川自身も、亀井と一緒に、六本木に出かけた。
殺された吉岡の話を聞くためである。
吉岡が働いていた店では、箝口令が敷かれたのか、ほとんど、彼についての話を聞くことが出来なかった。
しかし、吉岡が、よく行っていたフランス料理の店で、彼の話を聞くことが出来た。
話してくれたのは、この店の主人の内藤という男である。
若い時は、映画に出ていたこともあるという長身の内藤は、その身体を、折り曲げるようにして、
「彼が、写真週刊誌に狙われて、困っているんだという話はしていましたよ」
と、十津川に、いった。
「スクープという雑誌だと、いっていませんでしたか？」
十津川が、きいた。
「ああ、その名前ですよ」
「どんな風に、話していたんですか？　ただ困っているといったんですか？」

「いや、相手が、タレントか何かなら、そんなに困らないんだが、今度は、政治家の先生だと、いっていましたよ。面倒なことになるんじゃないかって、困るというより、怖がっているみたいでしたね」
「その政治家の名前を、彼は、いいましたか？」
と、亀井が、きいた。
「いや、いいませんでしたね。何だか、いうなと、口止めされているようでしたよ。その相手を、怖がっていたんじゃないかな」
と、内藤は、いう。
「では、全然話さずですか？」
十津川が、きくと、内藤は、笑って、
「名前は、いいませんでしたが、その政治家のことは、いろいろと、話してくれましたよ。やはり、誰かに、知って貰いたかったんじゃありませんかねえ」
「吉岡さんが、話したことを、全部、教えてくれませんか」
と、十津川は、頼んだ。
「その政治家は、突然、店へやって来たといってましたねえ。もちろん、初めての客だったそうですよ」
と、内藤が、いう。
「すると、吉岡さんの客というわけでは、なかったのかな？」
「いや、その客は、店に入って来ると、店内を見廻してから、吉岡君を、呼んだそうですよ」
「なるほど」
「相手は、吉岡君が、気に入ったらしくて、その日に、食事に誘われたそうです。そのあとのつき合いもね」
「自分が、政治家だということは、向うから話したのかな？」
「どこかで見たような顔だったので、吉岡君が、いろいろ、聞いたらしいんですよ。そうしたら、名前を、教えてくれたそうです。それで、ああ、この間の選挙の時に、見た顔だったのだなと、わかったと、いっていましたね」

「相手は、完全なホモだったのかね？」
「吉岡君は、そうだと、いっていました。一緒に、ホテルにも行ったようですしね。ただ、相手が妙な要求をして来たと、いっていましたね」
「どんな要求ですか？」
「私は、ひょっとして、SMみたいなことかと思ったんですが、相手は、いろいろな表情をして見せてくれと、吉岡君に、頼んだというんです。妙な要求だと思いませんか？」
と、内藤が、いった。
「なぜ、そんなことを、吉岡さんに、頼んだんですかね？」
亀井が、興味を持って、きいた。
「わかりませんねえ。吉岡君も、困ったと、いっていましたよ。笑ってくれとか、悲しそうな顔をしてくれとか、いわれても、そう簡単には、出来ませんからねえ。その代り、五十万円も、ぽんと、くれたそうです」
と、内藤は、いった。
堀江は、なぜ、吉岡に、そんな要求をしたのだろうか？　それと、写真が盗まれたことと関係があるのだろうか？
ホモの男というのは、相手に、そんな要求をするものなのだろうか？
自分を、ノーマルだと思っている十津川には、ホモの心情は、わからないが、普通の恋愛感情と同じなら、相手のいろいろな表情を楽しむ気持が、全く、わからないでもない。
しかし、君の笑顔が素敵だというようなことはいっても、五十万円払って、笑ってくれとか、怒ってくれというのは、ホモの感情としても、おかしいのではないか。
十津川は、捜査本部に戻ると、『スクープ』に、のる筈だった二枚の写真を、改めて、見てみた。
堀江が、金で、吉岡を買ったという感じはない。写真の中の堀江の微笑は、本物に見えるのだ。

吉岡に会えて、本当に、嬉しげに見える。内藤は、二人が、ホテルにも行ったようだといっていたが、その言葉が肯けるような表情である。

「どうもわからないなあ」

と、十津川が、思わず溜息をついた時、西本刑事が、

「また、吉岡の写真が、集まりました」

と、いった。

今度は、吉岡の友人が、隠し撮りしたというもので、彼が、欠伸をしていたり、眠っていたりといったポーズが多かった。

自然なポーズといえるだろう。

「これは、面白いね」

と、十津川は、そこに並んだ十四枚の写真を、見つめた。

内藤の話によると、堀江が、吉岡に向って、様々な表情をしてくれと頼んだという。

この十四枚の思い思いの表情こそ、堀江が求めていたものではないのかと、十津川は、考えたからだった。

「しかし、警部。これが、事件の解決に役立つとは、思えませんが」

と、亀井が、いった。

「そうかも知れないが――」

と、十津川は、呟いたが、急に、表情を厳しくして、

「カメさん。吉岡の顔が、誰かに、似てないかね？」

「誰にですか？」

「真面目な表情の時は、そう思わないが、この笑っている顔が、ある男に、よく似ているような気がするんだよ」

「これが、誰にですか？」

「二十年前に死んだ石崎にだよ」

「石崎？　自殺した石崎ですか？」

「そうだよ。二十年前、小坂井警部たちが、追い詰めて、そのせいで、自殺してしまったといわれる石

崎さ。前の堀江代議士の秘書だった男だ」
と、十津川は、強い声で、いった。
「ちょっと、待って下さい」
亀井は、あわてて、二十年前の事件の調書の写しを取りに行った。
部厚いそれを、亀井は、机の上に置いて、ページを繰っていった。
石崎に関する調書も、その中に、入っている。
彼の写真も、貼りつけてあった。
亀井が、その写真を、十津川の前に置いた。
十津川が、吉岡の笑っている写真を、はがしてきて、横に置いた。
亀井が、顔を紅潮させて、
「似てますよ！　警部」
と、叫んだ。
十津川は、ニッコリした。
「やっぱりね。似てるね」
「どういうことですか？　これは――」
「いろいろと考えられて、面白いじゃないか」
と、十津川は、その可能性を噛みしめるように、いった。
「堀江ジュニアは、吉岡自身が、好きなんじゃなくて、彼の中に、死んだ石崎の面影を求めたということですか？」
「それも考えられるね」
「もし、そうだとすると、堀江は、ホモじゃないことになるんですかね？」
「必ずしも、そうとは限らないさ。むしろ、二十年前、若かった堀江と、同じように若かった石崎との間に、特別の感情があったということが、考えられるんじゃないかね」
と、十津川は、いった。
「この石崎と、若かった頃の堀江がですか？」
「石崎も、こう見ると、美男子だからね。それに、見合いをしたが、これといった理由もなく、その見合いが、こわれているんだ。もし、当時の石崎に、

ホモの感情があったとしたら、こわれたのも、当然だったといえるんじゃないかね」

十津川は、死んだ小坂井や、佐々木の話を思い出していた。

あの二人が、事件に体当りしながら、とうとう、事件を解決できなかったのは、石崎のホモの性癖に、気付かなかったためではなかったのか。

「しかし、警部」

と、亀井が、首をかしげて、

「二十年前、石崎と、堀江ジュニアが、ホモの関係だったとすると、堀江の方は、当時、アメリカにいたんじゃありませんか？」

「そうだ。アメリカにいたんだ」

「石崎は、日本ですよ。遠く離れていて、特別な感情が、生れますか？」

「だが、堀江は、ホモで有名な吉岡に会いに行き、彼の表情の中に、二十年前に自殺した石崎の面影を見つけたんだ。これも、事実だよ」

と、十津川は、いった。

「二十年前というと、堀江も、二十代だったわけですね」

と、亀井が、いう。

「そうだ。石崎と、堀江、二人とも、二十代だったんだ」

「もし、警部のいわれる通りだったとしてですが、事件との関係は、どうなるんでしょうか？」

亀井は、当惑した顔になっていた。

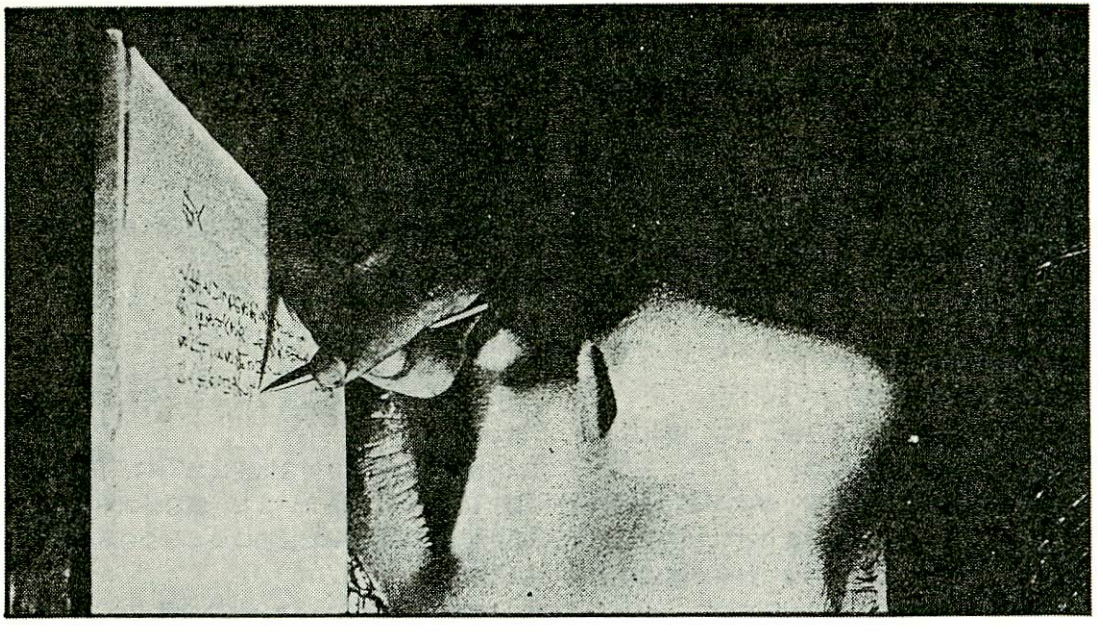
十津川にとっても、もちろん、それが、問題だった。

二十年前に自殺した石崎と、堀江が、たとえ、ホモであったとしても、殺人事件と無関係ならば、十津川たちにとって、何の意味もないことになる。

「二人のことを調べてみる必要があるね」

と、十津川は、いった。

「難しいですよ。堀江のことを調べているとわかれば、必ず、上からの圧力がかかるでしょうし、石崎



の方は、二十年前に、死んでしまっていますからね」
亀井が、いった。
「確かに難しいが、二人の間に、特別な関係があったとすれば、片方を調べれば、自然に、もう一人の方も、浮び上ってくる筈だよ」
「なるほど。それは、あり得ますね」
と、亀井が、やっと、微笑した。
「カメさんも、少しは、元気が出たようだね」
「それで、どちらを先に、調べますか？」
「石崎の方にしよう」
と、十津川は、いった。
「なぜですか？」
「現在から過去を照らすのは難しいが、過去から現在を照らすのは易しいからね」
と、十津川は、いった。が、もちろん、この作業が、易しいとは、思っていなかった。
何よりも、亀井のいうように、二十年前に死んでしまった男のことだということがある。
石崎のことを、追っかけた小坂井警部と、佐々木刑事が、まだ生きていれば、彼のことを、いろいろと聞くことが出来るのだが、その二人も、すでに、この世にいない。
（だが――）
と、十津川は、考えた。
佐々木刑事は、石崎を調べた時のメモを、残しているかも知れない。
「佐々木さんの娘さんに、会いに行ってみよう。彼女が、どうしているかも、気になるからね」
と、十津川は、いった。
二人は、中央線の沿線にある佐々木季見子の家を訪ねた。
二階造りの小さな家の玄関には、まだ、「佐々木完治」の表札が、かかっていた。娘の季見子には、父の突然の死が、いまだに信じられないのかも知れなかった。
十津川が、玄関のインターホンを押そうとすると、

戸が開いて、背の高い青年が出て来た。
その青年は、「まじめに考えておいてくれないか」と、中に向っていい、十津川や、亀井に気付かない様子で、駅の方に向って、歩いて行った。
十津川は、改めて、インターホンを押した。
季見子が、顔を出したが、その眼が、腫れぼったく見えた。
「あがっていいですか？」
と、十津川が、きくと、季見子は、あわてて、
「どうぞ」
と、いった。
居間に通されてから、十津川は、
「今の青年が、原田君ですか？」
と、季見子に、きいた。
「え？」
「確か、あなたには、原田という恋人がいると聞いているんです。彼が、その原田君じゃないんですか？」
「結婚なんて、しばらく考えられません」
と、季見子は、かたい表情で、いった。
「それは、よくないね」
亀井が、生真面目な顔で、季見子に、いった。
季見子が、黙って、亀井を見つめている。十津川には、何もいわないでくれと、いっているように見えたが、何事にもまじめな亀井は、
「結婚しなさい。亡くなったお父さんだって、きっと、あなたが、結婚することを、望んでいると思いますからね」
と、すすめた。
「今は、考えられませんわ。殺した本当の犯人が見つかるまでは」
「だから、それは、われわれに委せて、あなたは、さっきの青年と結婚しなさい」
と、亀井は、なおも、いった。
十津川は、取りなすように、
「結婚のことは、まじめに考えて欲しいと思います

が、今日は、あなたのお父さんの日記か何かあったら、見せて貰いたくて、来たんです。何か、お父さんの書いたものが、ありませんか？　特に、二十年前の事件のことを書いたものがですがね」

と、季見子に、いった。

「二階に、何かあると思いますけど」

と、季見子は、いった。

十津川と、亀井は、季見子に案内されて、二階に、あがって行った。

二階の六畳の間を、佐々木は、書斎代りに使っていたという。

古びた机や、本棚が置かれた部屋は、使う人を失って、空気まで澱んでいるように思えた。

十津川と、亀井は、窓を開け放ってから、部屋の中を、探してみた。

机の引出し、押入れ、本棚の裏まで、二人は調べてみた。

だが、二人が、望むようなメモや、日記といったものは、見つからなかった。

前に、季見子が、侵入した賊に襲われたことがある。その時、十津川の指示で、警戒していた日下が、彼女を助けたのだが、あの時、逃げた男が、肝心の書類やメモを、盗み出してしまったのだろうか？

だが、十津川は、そうは、思わなかった。

佐々木が、殺されているからである。彼が、殺されたということは、相手が、彼の行動を脅威に感じていたということだろうし、そうであれば、佐々木は、自分の調べたことを、日記なり、メモにして、残している筈なのだ。

「お父さんは、誰かに、書いたものを預けていませんでしたか？」

と、十津川は、季見子に、きいてみた。

「父は、あまり、お友だちが、いませんでしたから」

と、季見子は、いったが、すぐ、つけ加えて、

「亡くなる少し前に、近くの銀行に、貸金庫を、作って貰っていたようなんです」

「すると、貸金庫のキーがある筈ですね」
十津川は、亀井と、もう一度、部屋の中を探した。が、キーは、見つからなかった。
それでも、十津川たちは、近くのS銀行の支店に行き、貸金庫のことを、聞いてみた。
「佐々木さんは、確かに、うちと、貸金庫の契約をして頂いております。お亡くなりになったと聞いて、今後の契約を、どうするか、考えていたんですがね」
と、支店長は、いった。
「その貸金庫を、見せて下さい」
と、十津川は、頼んだ。
二人は、地下の金庫室に案内された。いくつも並んだ貸金庫の一つが、佐々木の契約しているものだった。
支店長に、開けて貰って、中身を、取り出した。
中に入っていたのは、二冊の手帳だった。
二十年前の事件の時のものと、二十年後に、もう一度、同じ事件を、ひとりで、再調査しはじめた時の二冊である。
どちらも、毎日、記しているわけではなく、何かあった時だけ、記入していた。
十津川と、亀井は、手帳を借りて、銀行を出ると、捜査本部に帰って、一冊ずつ、丁寧に、眼を通した。
十津川が、特に、注目したのは、二十年前の日記の方である。
最初は、精神異常者の線を追っていたのが、途中から、堀江正志の秘書、石崎に、眼をつけるようになった。その過程に、十津川は注目して、手帳のページを、繰っていった。
事件の現場で、目撃された赤いポルシェの持主を、追いかけることから、石崎の名前が、浮んで来たのだが、その石崎について、何ページも、書いてある。
こんな具合だった。

〈背も高く、なかなかの美男子である。だが、女の噂が聞かれない〉

〈見合いをしたが、上手くいかなかった理由を調べる。
相手の女性に会って話を聞く。女性曰く、石崎が、時々、デイトの約束をすっぽかすことに、不信の念を持ったという。他に女がいるのではないかという疑い。だが、その日、石崎は、事件現場にいた〉

〈二人を見合いさせた仲人に、会った。最初は、意気投合したように見えたが、女性の方から、断って来た。石崎に、自分以外の女がいて、両天秤にかけられているような気がするといったという。仲人が、驚いて、石崎の身辺を調べてみたが、女性の姿は、浮んで来なかった。わからないと、いう〉

〈われわれの調査でも、不思議に、女性の姿は、浮んで来ない。
結論――石崎は、心の奥に、女性に対する憎しみを持ち、愛せずに、殺してしまうのではないのか？それなら、石崎は、まぎれもなく、犯人である〉

〈石崎を逮捕し、訊問する。否認。だが、アリバイなし〉

〈石崎のマンションを調べる。女性からの手紙や、写真が、ほとんど皆無に近い。不思議である。女性たちが、石崎の殺意を敏感に感じとって、近づかないのだとすれば、これは、彼の犯人である証拠なのだ。しかし、もし、間違っていたら、どう説明すればいいのか？　ホモ？〉

ここに、初めて、「ホモ」という言葉が出てくる。
小坂井も、佐々木も、十津川に対して、石崎が、ホモではないかと、いったことはない。

だが、佐々木のこの日記を読むと、疑いを持っていたことは、確かである。

それを、十津川に、いわなかったのは、石崎が、すでに、死んでしまっていたのと、彼は、犯人ではなかったという気持が、あったからだろう。

十津川は、更に、二十年前の手帳を、読んでいった。

〈再び、石崎のマンションの捜査。女性に対する憎悪の言葉でも書きつけたものが見つかればと思ったが、皆無だった。

その代り、堀江代議士の息子の写真が、何枚か見つかる。

明らかに、アメリカとわかる背景（バック）で、二人が、写っている写真もある。石崎は、アメリカへ行って、堀江の息子と、会っていたのか、しかし、これは、今度の事件と、関係のないことだが〉

（本当に、関係がないのだろうか？）

〈石崎を釈放。上の命令では、仕方がない。小坂井警部と残念会でもやるか。それにしても、ある方面からの圧力の強さは、大変なものだ〉

そんな言葉も、見つかった。

「残念」という字が、殊更、強く書かれていて、この時の佐々木の口惜しさが、見えるようだった。

この頃は、まだ、佐々木も、小坂井も、石崎が、犯人だと、確信していたのだろうから、無理がなかった。

そのあと、しばらく、空白のページがあって、突然、

〈石崎が自殺した――〉

と、書かれている。それだけ、ショックだったに

違いない。

五日ほどたって、次の言葉になっている。

〈石崎は、シロか？　小坂井警部も同じ気持になっているとのこと〉

〈石崎が、シロなら、犯人は、いったい誰なのだろうか？　それに、石崎は、なぜ、自殺したのか？　全く、わからない〉

〈捜査本部長は、変質者の一人を逮捕し、起訴することにしたというが、本気で、犯人と、思っているのだろうか？〉

そんな疑問の言葉も見える。明らかに、捜査方針に、疑問を、感じていたのだ。

そのあと、ページを繰っていったが、誰が犯人らしいという記述も、石崎に関する記述も無かった。

捜査本部も、解散してしまったからだろう。空白のページが続いたあと、ぽつりと、次の言葉にぶつかった。

〈石崎の日記があると聞いた。彼は、シロだと思うが、ぜひ、読んでみたい〉

（石崎の日記か――）

十津川も、読んでみたかった。

それに、どんなことが書かれているのか？

二十年前の連続殺人の時、石崎が、ポルシェに乗って、常に、事件の現場近くにいたことは、間違いないのである。

神宮外苑で起きた事件の時は、石崎は、セリカから降りて、殺された女の傍に駆け寄ってさえいるのだ。

石崎が、犯人でないとしても、事件について、何か知っていることは、間違いないと、佐々木も、考

えていたのだろうし、十津川も、そう思う。
だから、日記を読みたい。が、いったい、どこにあるのだろうか？

日記

佐々木は、その日記が、どこにあるか、知っていたのだろうか？
十津川は、その部分の文章を、もう一度、読み返してみた。
短かい文章である。それに、石崎の日記を見たとも、書いてない。ただ、「日記があると聞いた」とあるだけである。
（これだけでは、わからない）
と、思った。
しかし、日記のあることは、確信しているみたいな書き方でもある。
石崎は、結婚していなかった。もし、その日記が、彼の手元にあったとすると、彼が死んだあと、誰の

ところに、行ったかということである。
石崎の家は、松江だった。
堀江代議士と、同じ郷里である。石崎が死んだとき、まだ、両親が健在だったら、日記も、両親が、松江に、持ち帰ったと考えるのが、妥当なところだろう。
十津川は、もう一度、松江に、行ってみることにした。
亀井と二人、飛行機と、山陰本線を乗りついで、再び、松江を訪れた。
堀江家に比べると、小さいが、それでも、石崎の父が、県議をしていたというだけに、石崎邸も、かなりの邸宅だった。
石崎の両親は、すでに死亡していたが、その邸には、彼の叔父に当る人が、住んでいた。
年齢は、六十七歳で、やはり、県議をしているという。
十津川と亀井は、石崎の日記が、この家にありませんかと、きいた。
「甥の日記ですか」
と、相手は、呟いたが、
「多分、この家には、ないと思いますよ」
「しかし、二十年前に東京で亡くなった時、まだ健在だったご両親が、遺品は、全部、こちらに、持って来たんじゃありませんか？」
と、十津川は、きいた。
「確かに、そうですがね。兄は、亡くなった息子の机まで、持って来ましたが、日記は、見たことがないんですよ。義姉は、写真や、手紙を並べて、よく見ていましたが、日記はありませんでしたからね」
「しかし、日記はあったという証言があるんですよ」
と、亀井が、いった。
「じゃあ、他の人が、持っているんじゃありませんかね」
と、相手はいう。
「例えば、誰ですか？」

「それはわかりませんが、兄が、こんなことをいっていましたよ。亡くなった息子のことを、ずっと、愛してくれていた娘さんがいたとわかったので、その娘さんに、形見分けをしたことです。それが、何かいいませんでしたが、ひょっとすると、日記かも知れません」

「その娘さんの名前を教えて下さい」

十津川は、勢い込んで、いった。

しかし、相手は、当惑した顔になって、

「それが、わからんのですよ。兄が生きている時に、聞いておけばよかったんですが――」

「全く、わからないんですか？」

「そうなんです」

「東京の人間か、この松江の人間かも、わかりませんか？」

と、亀井が、じっと、相手を見た。

相手は、ますます、困惑した顔になっていった。

「申しわけありませんが、本当に、知らんのですよ」

「お兄さんは、その人に、会ったことがあるようでしたか？」

と、十津川が、きいた。

「一度か、二度、会ったんじゃありませんかね。素直で、いい娘さんだみたいに、いっていましたからね」

と、相手は、いう。

これでは、その女を、特定のしようがなかった。

「他に、その娘さんのことで、何か聞いていませんか？　どんなことでもいいんですが」

十津川は、必死で、いった。

「そうですねえ」

と、相手は、しばらく、考えていたが、

「兄は、こんなこともいっていましたね。甥が殺人容疑で、逮捕された時です。まだ、シロ、クロが、決ったわけでもないのに、あの時は、いろいろと、いわれましてね。ずいぶん、口惜しい思いをしましたが、その時、その娘さんだけが、息子の無実を信

じて、励ましてくれたといっていましたね」
と、いった。
「励ましてですか――」
と、十津川が、呟くと、亀井が、小声で、
「二十年前、石崎を逮捕した時、抗議して来た女性が、いたんじゃなかったですか？」
と、いった。
（そういえば――）
と、十津川は、思い、あわただしく、礼をいって、その家を辞した。
外へ出たところで、十津川は、亀井に、
「あれは、確か、小坂井さんに聞いたんだったが、名前は、覚えていないんだ」
と、いった。
二十年前、石崎を逮捕した時、一人で、抗議して来た娘がいたと、小坂井が、話してくれたことがある。
その娘は、必死な顔で、石崎さんは、人を殺すような人じゃないと、小坂井に、抗議したという。
「カメさんは、覚えているかね？」
「いえ、覚えていませんが、佐々木さんの日記に、書いてあるんじゃありませんか」
「そうだ。東京に戻って、もう一度、読み直してみよう」
二人は、その日の中に、東京へ帰った。
すぐ、佐々木刑事の二冊の手帳を、取り出して、もう一度、一ページから、慎重に、見ていった。
覚えていないところをみると、何気なく見過ごしてしまったのだろう。
特に、二十年前、石崎を逮捕した直後のページを、念入りに、眼を通していった。
見つかった。
〈松本はるか、二十一歳。
突然やって来て、小坂井警部に、石崎の無実を主張した由。

彼女の父が、石崎に面倒を見て貰ったという〉

それだけの文面だった。

他には、彼女について書かれたページは、見つからなかった。

（松本はるか――か）

これで、名前が、わかった。が、何しろ、二十年前である。この時、二十一歳なら、今は、四十一歳になっている筈である。

恐らく、結婚もしているだろうし、或いは、すでに、亡くなっているかも知れない。

結婚していれば、姓も変ってしまっている。それを、どうやって、探したらいいのか？

彼女の顔写真もないのである。

唯一の手掛りは、彼女が、石崎を愛していたらしいことと、彼女の父親が、石崎に面倒を見て貰っていたということの二つだけである。

この二つだけで、彼女を見つけ出すことが、出来るだろうか？

「まず、石崎の友人を探すことにしよう」

と、十津川は、いった。

これは、案外、簡単かも知れなかった。二十年前に、石崎は死んでいるが、彼の卒業した大学は、わかっていたからである。

二人は、翌日、石崎の出たK大に行き、事務局で、石崎と同期の卒業生の名簿を、見せて貰った。

ありがたいことに、住所や、電話番号が、新しくなった時は、書き改められていた。

「かなりの有名人も、出ていますよ」

と、事務局長は、誇らしげに、十津川に、いった。

石崎は、死んだ時、二十代だったが、彼の同期生は、全員、四十代になっているわけだから、会社でも、中堅だろうし、有名人が、出ていても、おかしくはない。

十津川と、亀井は、卒業生名簿を、コピーして貰って、捜査本部に戻ると、片っ端から、電話をかけ

てみた。
相手が出ると、二十年前に死んだ石崎のことを知っているかと聞き、知っているという相手には、会って、話を聞きたいと、伝えた。
中には、同期生の石崎と聞いても、覚えていない人もいた。それだけ、二十年の歳月は、長かったということになるだろう。
結局、七人がリストアップされた。
十津川と、亀井は、まず、その一人の矢部浩に、会ってみることにした。
現在、商事会社の秘書課長をやっている男だった。
矢部とは、会社に出かけて行って、会った。
十津川は、石崎も生きていれば、この男ぐらいの年齢になっているのかと、思いながら、
「石崎さんのことを、話して欲しいのですよ」
と、いった。
「電話でも、いったんですが、とにかく、なつかしいですねえ」
矢部は、本当に、なつかしそうな顔をした。
「大学を出たあとも、つき合いをされていたそうですね？」
「ええ。時々、彼のポルシェに、乗せて貰いましたよ。あの頃、同期で、ポルシェを持っているのは、彼だけでしたから、羨ましくて仕方がありませんでしたね」
「矢部さんも、二十代だったわけですね？」
「そうです」
「酒も一緒に、飲まれましたか？」
「ええ。酒も、彼の奢りのことが、多かったですがね。やっと、こっちも、ご馳走できるようになったら、もう、あいつは、いないんですから、ままなりませんよ」
と、矢部は、笑った。
「酒を飲んだ時、女性の話をしたと思うんですが、どうですか？」
「もちろん、しましたよ。お互いに、若かったです

からね」
「石崎さんの好みの女性というのは、どんな感じの女性だったんですか？」
「それが不思議なんですよ」
と、矢部は、急に、戸惑いの表情になって、
「女の話をしながら、彼の好みが、はっきりしませんでしたねえ。あれは、ひょっとすると、もう、決った人が、いたのかも知れませんね」
と、いった。
石崎は、ホモの性癖があったとは、気付いていない感じだった。
「その女性を、知りませんか？」
と、十津川が、きいた。
「僕は、見たことがなかったんですが――」
と、いって、矢部は、ちょっと考えていたが、
「石崎の葬儀のあとなんですが、友人の一人が、若い女性を見たと、いっていましたね。それが、石崎の彼女だったのかも知れませんよ」
「その友人というのは、どこの誰ですか？」
と、亀井が、きいた。
「建設省に勤めている梶山です」
と、いう。その名前も、七人の中に入っていた。
十津川と、亀井は、次に、その梶山という男に、会ってみることにした。
梶山には、庁舎内にある喫茶室で会った。頭髪がうすいので、同じ四十代なのに、矢部より、何歳か、年長に見えた。
梶山自身も、それを気にしている様子で、十津川への第一声が、
「どうも、最近、頭がうすくなりましてね」
と、笑った。
「そんなことは、ありませんよ」
と、十津川は、いってから、
「お電話した石崎さんのことで、伺いたいことがありましてね」
「あのあと、写真を探してみたんですよ」

梶山は、ポケットから、二枚の写真を取り出して、十津川と、亀井の前に置いた。
「二枚とも、大学時代のものです」
一枚は、山に登っている写真だった。五人の若者が、写っていた。
どの顔も、若々しかった。
「これが、私で、こちらが、石崎です」
と、梶山が、指さした。
石崎も、若いが、梶山も、頭髪がふさふさしていて、なかなかの美青年である。
もう一枚は、学生服姿だった。
こちらの石崎も、梶山も、若い。
「二十歳くらいの時ですよ」
と、梶山が、いった。
「石崎さんの葬儀の時なんですが、女の人が、顔を見せていたと、聞いたんですが」
と、亀井が、いうと、
「ああ、見ましたよ。石崎は、死んだ時、独身だったし、艶っぽい話を聞いたことがなかったんで、あれって、思ったのを、覚えていますよ」
「どんな女性でしたか？」
と、十津川が、きいた。
「何しろ、二十年も前のことですからねえ」
と、梶山は、頼りなげに、いってから、
「小柄な女性だったのは、覚えていますねえ」
と、いった。
これでは、果して、誰なのかも、わからない。
「何とか、その女性の名前や、住所を、知りたいと、思うんですが」
と、十津川が、いうと、
「あの葬儀の時、駒田が、受付を、やりましたよ。あの頃から、世話好きの男でね。彼が、何か知っているかも知れません」
と、梶山は、いい、登山の写真の中の一人を、指さした。
「この男です」

「その駒田さんに、会ってみたいですね」
と、十津川は、いった。
現在、新宿で、小さな喫茶店をやっているという駒田に、電話をして貰った。
十津川と、亀井は、今度は、新宿西口に廻ることにした。
雑居ビルの五階にある喫茶店だった。
駒田は、明るいセーター姿で、二人の前に現われた。
「あの時、受付をやらして貰いましたよ」
と、駒田は、ニコニコ笑いながら、十津川に、いった。
昔話をするのが、楽しそうだった。
「その時、若い女性が、顔を見せたということなんですが」
「ええ。覚えていますよ」
「名前もですか？」
「そこまではね。ただ、あの時、ボクは、写真も、撮ったんです。それを、お見せしますよ」
と、駒田はいい、二十年前のアルバムを、見せてくれた。
「よく、とってありましたねえ」
と、十津川は、感心しながら、亀井と二人、そのアルバムを、見せて、貰った。
シロクロの写真である。
五十枚近い数だった。
参列者の一人一人を、撮ったものもあれば、葬儀場の全体の写真もある。
受付に現われた人たちの写真もある。
「ああ、それですよ」
と、駒田は、一枚の写真を、指さした。
一人の若い女が、写っていた。
平凡な顔立ちだが、その顔は、悲しみで一杯に、見える。
（これが、松本はるかだろうか？）
多分、そうだろう。

石崎は、女性の噂のなかった男だといわれているからである。
「この写真を、貸して貰えませんか」
と、十津川は、頼んでから、ふと、他の写真に、眼をやって、
「参列者の方が、ここで、記帳をしていますね？」
と、駒田に、きいた。
「ええ、ボクの考えで、記帳して貰ったんです」
「この女性も、記帳しましたかね？」
「したと思いますよ」
「記帳したものは、今、誰が持っているんですか？」
「もちろん、遺族の方に差し上げましたよ」
と駒田は、いった。
すると、松江の石崎の叔父のところにあるのか。
十津川と、亀井は、捜査本部に戻ると、すぐ、松江に、電話をかけ、葬儀の時の記帳がないかどうか、聞いてみた。
いったん、電話を切り、相手は、探してくれたらしい。
「ありましたよ」
と、いってくれた。
十津川は、それを、送ってくれるように、頼んだ。
古びた、参列者名簿が、送られて来たのは、翌日の午後である。
十津川と、亀井は、それを、一ページずつ、繰って、いった。
三ページ目に「松本はるか」という名前が、のっていた。
しかし、住所は、書いてなかった。
松本はるかという女性が、石崎を愛していて、彼が逮捕された時、小坂井警部に、抗議に来たことだけは、確認できた。
「彼女は、今、どこで、何をしているんでしょうか？生きていて、石崎の日記を、持っていてくれれば、それが、事件解決のキーになってくれると、思うんですが」

と、亀井が、いう。

十津川は、じっと、松本はるかの署名と、彼女の写真を見ていたが、

「彼女は、もう、死んでいるかも知れないね」

「なぜですか？　私は生きていて欲しいと思いますが」

「小樽の死体だよ」

と、十津川は、いった。

「小樽？」

「ああ、佐々木さんが、二十年ぶりに小樽に行き、娘さんも、小樽に行った。佐々木さんが、小樽へ行って調べたのは、二十年前、運河で、溺死していたＯＬのことだった」

「そのＯＬが、松本はるかだと、お考えですか？」

と、亀井が、暗い眼になってきいた。

「私は、その可能性が強いと、思っているんだ。もし、松本はるかが、今でも健在だったら、佐々木さんが、二十年ぶりに、あの事件を、調べ始めた時、連絡して来たんじゃないか。そう思うんだがね」

「どうやって、確かめますか？」

「われわれも、小樽へ行ってみるより仕方がないが、その前に、佐々木季見子に会ってみよう。彼女も、小樽へ行っているから、何か知っているかも知れない」

と、十津川は、いった。

二人は、松本はるかの写真と、署名簿を持って、季見子に、会いに出かけた。

十津川が、小樽のことを聞くと、季見子は、眼を輝かせて、

「警部さんも、いよいよ小樽のことを、調べて、下さることになったんですね」

「行くことになると思っていますが、佐々木さんは、小樽の運河で、何を調べたんですか？　二十年前に、溺死していたＯＬのことだと思うんですが」

「ええ。彼女の死体が、見つかった時の状況を、調べたんですわ」

「それで、彼女の名前は、わかったんですか？」
「いいえ。身元不明で、処理されていましたわ。少くとも、向うでは、そうでした」
と、季見子は、いった。
「それは、向うの警察に聞いたんですか？」
「図書館で、二十年前の新聞を調べたんですわ。父も、そうしたみたいです。溺死体が見つかった日の記事のあと、身元がわかったという記事が、ありませんでしたから」
「お父さんは、それだけで、誰か、わかったのかな？」
「それは、わかりませんけど――」
と、季見子は、いった。
「溺死体が発見された時の記事には、死体の特徴が、書いてあったでしょうね？」
と、十津川は、きいた。
「ええ。もちろん。小柄な、ＯＬ風と、ありました。確か、身長は、一五七センチで、体重は、五十キロじゃなかったかしら」
「顔の特徴も？」
と、亀井が、きいた。
「ええ」
「多分、お父さんは、それで、死んだのが、誰か、わかったんだと思うな」
と、亀井は、いった。
「誰なんですか？　その人、やはり、事件と関係があるんですか？」
季見子は、大きな眼で、亀井を見つめた。
亀井は、いっていいかという眼で、十津川を見た。
十津川は、それには、直接、答えず、
「われわれも、小樽へ行こうと考えています」
と、季見子に、いった。
「それなら、私も、一緒に行きますわ。私は一度、行っているし、父の足跡を、訪ねていますから、役に立つと、思いますわ」
季見子は、必死に、いった。
十津川は、考え込んだ。確かに、季見子が一緒に

行けば、便利ではあるだろう。だが、同時に、それは、彼女を、また、危険にさらすことでもある。
「あなたは、東京に、残っていらっしゃい。ひとりで不安なら、刑事を一人、護衛に、置いていきますよ」
と、十津川は、いった。
「なぜ、一緒に行っては、いけませんの？　足手まといには、ならない積りですわ」
季見子は、心外だという顔で、いった。
「あなたを、危険な目にあわせたくないからですよ。相手は、刑事でも、狙ってくる人間ですからね。とにかく、今回は、われわれに、委せなさい」
と、十津川は、いった。
翌日、十津川と、亀井は、午前八時一〇分羽田発の全日空機で、札幌に向った。
「彼女は、諦めたようですね」
と、亀井が、飛行機が、飛び立ってから、十津川に、いった。
「これ以上、危い目にあわせたくないからね。これで、いいんだ」
と、十津川は、いった。
九時三五分に、千歳空港に着いた。
すぐ、千歳空港駅から、九時四六分発の特急「おおぞら2号」に乗って、札幌に向う。
札幌から、函館本線に、乗りかえである。
「おおぞら2号」が、札幌に着いたのが、一〇時一六分。
一〇時三四分発の普通列車に、乗って、小樽着が一一時二七分。
「彼女がいますよ。参ったな」
亀井のいった通り、改札口の向うで、季見子が微笑していた。
十津川も、苦笑したが、改札口を抜けてから、
「困りますね」
と、いった。
「どうしても、東京に落ち着いていられなかったん

です。何か、お役に立ちたくて」
季見子は、小さく頭を下げて、いった。
そういわれてしまうと、十津川は、これ以上、何もいえなくなった。もともと、彼女の気持は、よくわかっているのだ。父親を殺させた真犯人を見つけ出すまで、彼女が、落ち着かないのは、当然だろう。
「それでは、カメさんと、君が、前に行った図書館へ行ってくれないか。二十年前の新聞を、もう一度、カメさんと一緒に、見て貰いたいんだよ」
と、十津川は、季見子に、いった。
二人が、タクシーに乗って、図書館へ向ったあと、十津川自身は、小樽署に廻ってみることにした。
署長にあいさつしてから、二十年前の事件を、聞いてみた。
署長も、五年前に来たというし、運河の溺死体を調べた刑事も、すでに、退職していたが、当時の調書は、幸い、保管されていて、見ることが、出来た。
最初、殺人の可能性もあると考えて、捜査が、行われたということがあったためらしい。溺死体の女性の写真も、添付されていた。
十津川は、その写真の顔と、持って来た松本はるかの写真を比べてみた。
片方は、死体の写真なので、生前とは、ずいぶん違っていると思わざるを得ない。
特に、溺死体の場合は、顔全体がむくんだようになっているので、余計に、生前の顔とは、違って見える。
二つの写真は、さっと見た限りは、別人である。
だが、十津川は、慎重に、似た部分を探した。
眼は、死体はつむっているので、比較が出来ない。
鼻の形は似ていた。
どちらかといえば、細い鼻である。眉と、耳の形も、似ていた。
身長、体重も、同じだった。
二十年前に、運河で発見された溺死体は、松本はるかなのだろうか？

調査によれば、後頭部に、裂傷があったという。
そのために、殺人の可能性もあると思われたのだが、結局、運河に落ちた時に、どこかに、ぶつけたのだろうということになったらしい。
しかし、これが殺人事件なら、何者かが、背後から、彼女を強打し、運河に、突き落としたことになる。
十津川は、この調書を書いた人が今どうしているかを聞いた。
馬場という刑事で、現在、退職して、小樽駅の近くで、喫茶店を、奥さんとやっているということなので、十津川は、会いに行くことにした。
小さな喫茶店だった。
小柄な馬場は、六十二歳の筈だが、顔色もよく、五、六歳は、若く見える。
他に、お客がいなかったので、十津川は、遠慮なく、馬場に、話しかけることが、出来た。
名刺を渡して、二十年前の運河の水死事件の件でというと、馬場は、
「先日も、東京の人が、同じ話を聞きに来ましたよ」
と、いった。
「佐々木という人じゃありませんか？」
「そうです。確か、佐々木さんでした」
「佐々木さんは、どんなことを、聞いたんですか？」
「どんな女だったとか、発見された時の状況とか、二十年前の捜査の様子とかですよ。どうも、佐々木さんは、自分の知っている女と、同じ人かどうか、それを確かめたかったみたいですね」
「それで、佐々木さんは、どんな結論を持って帰ったようですか？」
「わかりませんね。ただ、私の話を、肯きながら、聞いていましたね」
「私も、同じことを、お聞きしたいと思うんですが、身元を証明するものは、結局、何も見つからなかったんですか？」
と、十津川は、きいた。

「全く見つかりませんでしたね。驚くほどですよ。それで、かえって、これは、殺人ではないかと、考えたわけです」
「つまり、犯人が、持ち去ったのではないかというわけですか？」
「そうです。普通なら、一つか二つは、身元のわかるものを、身につけているものですからね。それに、身につけているものは、ありふれた市販品で、高級品ではなかったので、それから、身元を調べることが、出来ませんでした」
「ＯＬ風というのは、平凡な服装だったということですか？」
「そうです。腕時計や、指輪も、高いものではありませんでしたし、年齢的に見ても、ＯＬではないかと、考えたんですよ」
「小樽市内のホテル、旅館の宿泊者の一人でもなかったわけですか？」
「そうです。全部のホテル、旅館に当ってみたんですが、該当者は、ありませんでしたね」
「なるほど」
「殺人とすると、或いは、離れた場所で殴っておいて、小樽の運河まで運んで来て、投げ込んだのかも知れませんね」
と、馬場は、いった。
「この写真を見て下さい」
十津川は、松本はるかの写真を渡した。

死者の証言

「この女性は？」
「松本はるかという女性で、二十年前の写真です」
「なるほど、小樽の運河の溺死体が、この女性ではないかということですか？」
馬場は、写真を見ながら、きいた。
「そうです。佐々木さんも、恐らく、同じことを考えて、あなたに、会われたんだと思いますね」
「この女性とですか」
馬場は、考え込んでいる。無理もなかった。溺死体の顔は、ずいぶん違って見えるし、それに、何しろ、二十年前の事件である。
「正直にいって、わかりませんねえ。似ているような気もしますがね」
と、馬場は、いった。
「二十年前ですが、自分の娘ではないかという問い合せみたいなものは、なかったんですか？」
十津川は、そんな質問もしてみた。
「それはありませんでした。妙な電話があったのは、覚えていますよ」
「どんな電話ですか？」
と、十津川は、きいた。
「男の声で、担当者に用があるというので、私が出ました。そしたら、いきなり、あれは、自殺だ。理由があって、死んだんだから、あれこれ、せんさくするのは可哀そうだから、やめろと、いいましたよ」
「それで、馬場さんは、どう答えられたんですか？」
「女の身元を知っているんなら、いってくれといったら、電話を切ってしまいましたがね」
と、いって、馬場は、笑った。
「単なるいたずらと、思われましたか？」
「いや、そうは思いませんでしたね。全体に命令調

でしたし、あんなことで、いたずらはないと思いましたからね」
「若い声でしたか？」
「そうですね。私は三十歳前後だろうと思いましたが」
「殺人としての捜査は、どのくらいやったんですか？」
「一ケ月間です。それ以上は、無理でしたね。何しろ、身元がわからないし、自殺、事故死の声も、ありましたから」
と、馬場は、いった。
「その一ケ月間で、何かわかったことはないんですか？」
「解剖の結果、わかったことがありましたね。面白かったのは、死亡推定時刻よりも、胃の内容物でしてね。幕内弁当と、同じものだったんです。それが、あまり消化されずに、残っていました」
「幕の内弁当というと、駅弁が、連想されますが——？」
「私も、そう思いましたね。ですから、列車の中で、駅弁を食べて、小樽駅に着き、すぐ殺されたのではないかと、考えました」
と、馬場は、いった。
それならば、小樽市内のホテルや旅館に、彼女が、泊った形跡がなかったとしても、おかしくはない。
「捜査の過程で、行商の女の人が、浮んで来ませんでしたか？」
と、十津川が、きくと、馬場は、
「ああ」と、肯いて、
「佐々木さんが会ったという行商人のことでしょう？」
「彼女が、犯行を目撃した可能性というのは、どうなんですか？」
「実は、捜査本部が、他殺の線は見つからないということで、解散したあとに、見つかった証人だったんですよ。ただし、犯行を目撃したというわけでは

なく、死んだ女性を、見たということなんです。大勢には影響がないということで、われわれは、無視してしまったんですがね」
「彼女は、佐々木さんが会ったあと、死んでいますね？」
「ええ。かもいから首を吊って死んでいたんです。名前は、伊藤定子、七十歳。私は、もう現職じゃないから、タッチしませんでしたが、自殺ということで、処理された筈ですよ」
「しかし、佐々木さんが、彼女から話を聞いたあとで、突然、死んでいるわけですから、何かあると考える方が、自然じゃありませんかね？」
「つまり、二十年前の事件とですか？」
「そうです」
「私も、同じことを考えましたがね。何しろ、証拠がありません。彼女が、いったい何を佐々木さんに話したのか、それがわかれば、対処の方法もあったでしょうがね。それに、何度もいいますが、私は、もう、現職の刑事じゃないんですよ」
と、馬場は、笑った。
十津川は、井ノ頭公園で殺された佐々木のことを、思い浮べた。
彼は、十津川に、電話しようとしていて、殺されたのである。
しかも、小樽から帰った直後だった。当然、伊藤定子という行商人から、これはという証言を手に入れて、それを、十津川に知らせようとしたことが、考えられる。
「彼女は、二十年前に、何かを目撃していたんですよ」
と、十津川は、いった。
「二十年も前のことを、はっきり覚えているものでしょうか？」
馬場が、首をかしげて、きいた。
「普通は、覚えている筈がないと考えますがね。毎日、彼女は、行商に出かけていたわけでしょう。五

十歳で、まだ、足腰がしっかりしていた頃です。多分、一日も休まずに、決った時刻に、決った電車に乗って、出かけていたんだと思いますよ。全く同じことの繰り返しだったと思う。その中で、一日だけ、特別な光景を見たとしたら、他の日のことは忘れても、その日だけは、はっきり覚えていると思いますね」

十津川が、いえばいう程、馬場の顔に困惑の色が、広がっていくようだった。

自分が、責められているような気がしているのだろう。

それが、わかるだけに、十津川は、途中で、質問をやめ、礼をいって、店を出た。

十津川は、その足で、小樽の運河を見に行った。

昔は、商業用に使われていたのだが、今は、美しい景色だけを見せて、ひっそりと、静かである。

運河に沿って設けられた遊歩道を、若いカップルが、のんびりと歩いていた。

二十年前、この運河で、一人の女が、死体で浮んでいた。

その女が、果して、松本はるかだったのかどうか？

もし、松本はるかだったとして、彼女は、なぜ、小樽へ来たのだろうか？

そんなことを考えて、歩いている中に、背後から、大声で、呼ばれた。

亀井が、佐々木季見子と一緒に、こっちへ近づいて来るのが見えた。

「お茶でも飲もう」

と、十津川は、二人を、近くの洒落た喫茶店に誘ってから、

「どうだった？」

と、二人に、きいた。

「運河で死んだ女が、松本はるかかどうかは、結局、わかりませんでした。しかし、彼女の可能性が強いと思いますね。私は、彼女だったと思います」

と、亀井は、いった。

「同感だね」
十津川も肯いた。
「もし、松本はるかという人だったとすると、どうなるんでしょうか？」
季見子が、運ばれて来たコーヒーを、前に置いたまま、十津川に、きいた。
「なぜ、二十年前、松本はるかが、この小樽に来たのかという疑問が、生れて来ますね」
「彼女の郷里が、小樽だったということは、ないのかしら？」
と、季見子が、いう。
「それは、ありませんね。もし、彼女の郷里が小樽なら、誰かが、名乗り出て、死体を見ている筈ですよ。それがなかったというのは、彼女の郷里ではなかったということだと思いますね。それに、もし、彼女が、郷里に帰って来たのだったら、殺されることもなかったんじゃないかな」
十津川は、考えながら、いった。
「松本はるかは、石崎のために、何かしてやりたくて、この小樽に来たということですか？」
と、亀井が、きいた。
「かも知れないね」
と、十津川は、いった。が、それを明らかにするのは、難しいであろうことも、覚悟していた。
松本はるかは、何をしに、この小樽に来たのだろうか？
いくつかのことが、考えられた。
第一に考えられるのは、小樽に、誰かを、訪ねて来たことである。
小樽に住む誰かという場合もあるし、小樽が、その人間との待ち合せの場所だったという可能性もある。
第二は、小樽に、何かを調べに来たことである。
石崎の無実を証明しようとして、小樽へ来たのだとすれば、それは、無実の証明になるものだったに違いない。

「どちらにしろ、二十年たった今、見つけるのは、難しいね」

と、十津川は、いった。

相手が人間なら、二十歳も、年齢をとってしまっているだろうし、相手が、ものだったら、二十年たった今は、もう、失くなっているかも知れない。

「でも、私の父は、ここで、何かを見つけて、帰京した筈ですわ」

と、季見子が、いった。

「わかっています。しかし、今となっては、それが、何だったのか、わからないんです。佐々木さんは、行商人の伊藤定子に会って、話を聞いたんですが、彼女も、自殺に見せかけて、殺されてしまいましたからね。彼女は、松本はるかが、運河に突き落とされるのを見たのかも知れませんが、もう、それを、証言できません」

と、十津川は、いった。

結局、二十年前、松本はるかが、何をしに、小樽へ来たかを、調べるより仕方がないのだ。

「人間と、ものの両面で、考えてみようじゃありませんか？」

と、亀井が、いった。

「どうやってだ？　カメさん」

「人間とすると、石崎に関係がある人間が、二十年前、ここにいたことが、考えられます」

「関係があるといっても、漠然としすぎているねえ」

「石崎の無実を証明できる人間だったと思いますが」

「どんな人間かな？」

「石崎は、殺人事件の現場にいたわけですから、アリバイは、なかったわけです。従って、石崎のアリバイを証明できる人間ということは、あり得ませんね」

「そう考えると、ますます、わからなくなってくるよ。石崎の友人で、石崎は、いい人間だから、人殺しなんか出来ないといったような証言では、無実の

証明には、ならないからね」
と、十津川は、いった。
「確かに、難しいですね」
亀井も、考え込んでしまった。
沈黙が、また、支配した。
「松本はるかが、二十年前、どこに住んでいたのか、わかればねえ」
と、十津川が、溜息まじりに、いった。
彼女の家族、或いは、友人に会って、何か、つかめるかも知れないのだ。
だが、今、十津川たちが、彼女について知っていることは、ごく僅かである。
確かに、写真は、ある。二十代の小柄な女性で、父親が、石崎の世話になっていたことはわかっている。
が、それだけなのだ。
その父親だって、二十年たった今は、亡くなっている可能性が強い。
「二十年前の電話帳を見て、松本という姓の電話に、片っ端から、かけてみますか？」
と、亀井が、いった。
「相手に、はるかという娘はいませんでしたかと、聞くのかい？」
「そうです」
「あまり、期待できないね。二十年で、住所は、変ってしまっているかも知れないし、第一、東京の人間かどうかもわからないんだ。東京の電話帳だけ調べても、見つからないかも知れん」
「じゃあ、どうしますか？」
「東京に戻って、もう一度、石崎の友人たちに、会って来るよ。彼は、松本はるかの父親の面倒を見ていたとすると、それを、誰かに、話していたかも知れないからね」
「では、一緒に、帰りますか？」
「いや、カメさんは、季見子さんと、ここに残ってくれないか。東京で調べて、小樽に松本はるかが来

た理由が、わかるかも知れないからね。その際には、小樽のどこかへ行って貰わなければ、ならないかも知れない」

と、十津川は、いった。

翌朝、十津川は、ひとりで、千歳発の飛行機に乗り、東京に戻った。

羽田空港の中で、早目の昼食をとってから、十津川は、石崎の友人の誰に会ったらいいかを考えた。

石崎が、松本はるかの父親の面倒を見ていたとすると、それは、堀江代議士の秘書という肩書きを、使ったのだろう。

と、すると、二十年前、石崎と一緒に、堀江の秘書をやっていた人間に、会った方がいいと、思った。

問題は、十津川の動きが、その人間を通して、堀江ジュニアに、伝わってしまわないかということだった。

堀江の後援者に知れても、圧力が、かかってくるに違いないのである。

亡くなった堀江代議士の崇拝者には、聞くことは、出来ない。

と、なると、元秘書で、何かまずいことがあって、馘になった人間が、一番いいことになる。

十津川は、そんな人間を、探すことにした。

(見つかれば、いいのだが)

捜査本部に帰ると、十津川は、ちょっとばかり、卑怯な手を使うことにした。

亡くなった堀江代議士には、強力な後援会があって、今も、その組織が、堀江ジュニアの応援に当っている。

十津川は、その後援会に、電話をかけた。

「私は、ルポライターの田中といいます。今、亡くなられた堀江先生のことを調べているんですが、先生の秘書をやっておられた方に、お話を伺いたいと思っています。それで、その方たちの名前と、住所を、教えて頂けませんか」

と、十津川は、いった。

相手は、素直に、七人の名前と住所を教えてくれた。
「他にも、秘書の方は、おられたんじゃありませんか？　七人では、少いような気がするんですが」
と、十津川は、いった。
「あと二人いましたがね。彼等は、先生にお世話になっておきながら、先生を裏切った男です。そんな男は、何をいうかわかりませんから、取材は、なさらない方が、いいですね」
と、相手は、いう。
十津川としては、その二人の名前を聞きたいのだが、まともに質問したのでは、拒否されてしまうだろう。
「けしからんですね」
と、十津川は、まず、いっておいて、
「私は、かねがね、堀江先生が、総理にならずに亡くなられたのが、残念で、仕方がないのですよ。不思議な気もしますしね」
「ありがとうございます。幸い、今度、政界に出た息子さんが、お父さんに負けない立派な方でしてね。われわれは、将来、総理になる人と、期待しているのです」
「そのようですね」
「聡明ですし、アメリカに、ずっと行っておられたので、やはり、国際感覚に秀れているし、何よりも、英語が、ペラペラです。これからの政治家は、他の国の政治家と、英語で、自由に話せなければなりませんからね」
と、相手は、誇らしげに、いった。
「すると、あなたのいわれた二人の元秘書は、堀江さんだけでなく、息子さんも、裏切ったみたいなものですね。現在は、碌な生活はしてないんじゃありませんか」
「当然です。一人は、経堂の近くで税理士をやっていますが、信用がなくて、客がつかんそうです」
「なるほど、わかりました」

と、いって、十津川は、電話を切った。が、しばらくは、自己嫌悪に落ち込んで、じっとしていた。どんな場合でも、嘘をつくと、身体がおかしくなってしまうのである。

それでも、十津川は、気を取り直し、小田急線の経堂駅に行き、問題の男を、探してみることにした。駅の近くには、二つ税理事務所があった。

十津川は、二つの事務所に、寄ってみた。

最初の事務所は、相手が、三十七歳の若い男だったので、すぐ、違うとわかった。二十年前十七歳では、堀江代議士の秘書は、務まらないだろう。

もう片方は、平沼という五十六歳の男が、やっている事務所だった。

十津川が、警察手帳を見せて、亡くなった堀江代議士の名前をいうと、平沼は、苦笑して、

「堀江さんのことは、あまり喋りたくないのですよ」

「私が聞きたいのは、堀江さんの周辺にいた秘書の人たちのことなんですよ」

「秘書連中ですか」

と、呟いてから、平沼は、また、小さく笑って、

「あれは、ひどいもんでした」

「ひどいというと、秘書の人たちが、ひどかったというわけですか？」

「いや、みんな優秀な人たちでしたが、競争が、激しかったんですよ。つまり、王様の寵を争うというやつです。その争いが、ひどくて、私は、やめました。脱落したわけですよ」

「あなたが、おられた頃、石崎さんも、秘書として働いていたと思うんですが」

「ああ、石崎君のことなら、よく覚えていますよ」

「彼が、松本という人の世話をしていたと聞いたんですが、覚えていらっしゃいませんか？」

と、十津川は、きいた。

平沼は、「松本？」と、呟いてから、

「松本というと、娘さんのいた人かな？」

「そうです。松本はるかという、当時二十代の娘さ

んのいた人ですが」
「それなら、松本晋吉さんだと思いますよ」
と、平沼は、いった。
「どんな人ですか？」
「上板橋で、小さなパン屋をやっていた人です」
「それが、なぜ、石崎さんの世話になっていたんですか？」
「その松本さんは、島根県から出て来たんですよ。そして、上板橋で、小さなパン屋を始めた。自分のところで、パンを作って売る店です。夫婦でやっていて、娘さんは、ＯＬになっていたと思いますね。最初の中、店は、うまくいっていたんですが、近くに、大きな製パン会社が進出して来て、お客をとられてしまったんです。それで、困って、同県人である堀江さんに、相談に見えたんですよ」
「なるほど」
「堀江さんは、丁度、アメリカへ行っていましてね。松本さんに会ったのが、秘書の石崎君だったわけです。普通は、ただ、話を聞くだけにしておくんですが、彼は、真剣に、相談にのりましてね」
「どんな風に、相談にのったんですか？」
と、十津川は、きいた。
「これは、彼から聞いたわけですが、堀江先生の名前を、フルに使ったそうですよ。上板橋の信用金庫に圧力をかけて、松本パンに、融資をさせたり、自分が一緒に、車で廻って、得意先を、開拓してやったりしたそうですよ」
「なぜ、石崎さんは、そんなに熱心に、松本という人を、助けたんですかね？」
「わかりませんね。個人的な理由だったかも知れませんし、堀江先生を頼って来たのだからという気があったのかも知れません」
「石崎さんは、堀江代議士を、尊敬していたわけですね？」
「われわれは、みんな堀江先生を、尊敬していましたよ」

と、平沼は、いった。
「石崎さんが、特別ということは、なかったわけですか？」
「堀江先生に対してはね」
「と、いうと？」
「私は、当時、三十代だったし、他の秘書連中も、三十代か四十代でしたが、石崎君だけは、二十代だったんですよ。それに、堀江先生の息子さんが、彼と同じ年齢だったんじゃないかな。それで、先生は、石崎君に、自分のことの他に、息子さんの相手もさせていましたよ」
と、平沼は、いった。
（やはり）
と、十津川は、思いながら、
「しかし、今の堀江ジュニアは、かなりの期間、アメリカへ留学していたんじゃありませんか？」
「ええ、だから、石崎君も、時々、アメリカに、行っていたんです」
「あれは、アメリカの社会、政治事情を勉強に、行っていたんじゃないんですか？」
「それもあったでしょうが、堀江先生が、息子さんのことが心配で、石崎君に、見に行かせていたんだと思いますよ」
「しかし、あの頃、ジュニアは、もう、二十歳を過ぎていたんでしょう？」
と、十津川がいうと、平沼は、笑って、
「二十歳を過ぎていても、子供は子供でしょう」
「なるほど。平沼さんは、堀江ジュニアを、よくご存知ですか？」
「いや、私は、年齢が違っていましたのでね。子供の頃から、頭のいい、神経の細かい方だったとは、聞いていましたがね」
とだけ、平沼は、いった。
「松本さんに、話を戻しますが、現在も、上板橋で、パン屋をやっているんでしょうか？」
「それは、わかりませんね」

「松本さんの娘さんに、会われたことが、ありますか？」
「ええ、一度、石崎君を訪ねて来た時、会いましたよ」
「この人でしたか？」
と、十津川は、写真を見せた。
「と、思いますが、何しろ、二十年も前のことですからねえ」
平沼は、肩をすくめるようにした。
十津川は、上板橋に行ってみることにした。
池袋から、赤羽に行く電車で、板橋で降りた。
駅前の派出所で、「松本パン」のことを、調べて貰った。
「現在、松本パンという店はありませんね」
と、いってから、派出所の警官は、商店街の幹事に電話してくれたり、区役所に問い合せてくれたりした。
その結果、八年前まで松本パンという店があったことが、わかった。
十津川は、警官に案内されて、その場所へ行ってみた。
現在は、七階建のマンションになっていた。
近くに、先代から、質屋をやっているという店があり、十津川は、そこの主人に、松本パンのことを聞くことにした。
北野という六十歳になる質屋の主人は、よく覚えていた。
「ご夫婦で、やっていましたよ。まじめで、いい人たちでしたねえ」
と、北野は、いう。
「娘さんのことは、覚えていますか？」
「ええ。礼儀正しい、いい娘さんでしたが、突然、いなくなってしまったんですよ。あの時、松本さん夫婦は、一時、商売をやめて、故郷に帰るといってたんですが、もし、娘さんが戻って来た時、困るんじゃないかということで、商売を、続けたんですよ」

「八年前に、引越していったんですね？」
「ええ。ご主人が、病気で亡くなったんで、奥さんが、故郷に、帰られたんです。土地を売ってね」
「故郷は、島根県でしたね？」
「ええ。今年も、年賀状を頂きましたよ。律義な方で」
と、北野が、いった。
「その年賀状を、見せて下さい」
と、十津川は、いった。
北野が、奥から、持って来てくれた。

〈新年おめでとうございます。
板橋におりました頃は、いろいろとお世話になり、感謝しております。
北野様も、お身お大切になさって下さいませ。
松本　ふみ〉

住所は、島根県の出雲市になっていた。

十津川は、彼女に会ってみることにして、その年賀状を借り受けた。
翌朝早く、十津川は、羽田から、出雲行の飛行機に乗った。
十津川は、空港からタクシーで、出雲市内に向った。
十月上旬の温かい日だったので、飛行機も、出雲市の市内も、出雲大社へ参拝する人たちで、混んでいた。
JRの出雲市駅から、歩いて、七、八分のところに、小さな菓子店があり、その店に、「松本」という表札がかかっていた。
間口は、せいぜい五メートルぐらいだろう。
一階が、店で、和菓子が、並べてある。二階が、住居のようだった。
十津川が、店に入って、声をかけると、二階から、小柄な女性が、おりて来た。
六十歳前後で、頭には、白いものが、混っている。

松本ふみだろう。
十津川が、警察手帳を見せると、ふみは、眉を寄せて、
「何のご用でしょうか？」
と、きいた。
「お嬢さんのことで、お伺いしたいことがありましてね」
「娘の？」
と、いったとたんに、ふみの顔色が、変って、
「娘は、今、留守ですけど」
「松本はるかさんでしたね？」
「ええ。でも、留守ですから、お帰りになって下さい」
ふみは、切り口上で、いった。
「いつから、留守なんですか？」
「前からですよ」
「二十年前からじゃないんですか？」
と、十津川は、残酷だと思ったが、きいてみた。
ふみは、黙ってしまった。
「いろいろと、お話したいこともあるので、あげて頂けませんか？　店先で、話せるようなことでもないので」
と、十津川は、いった。
ふみは、しばらく考えていたが、「どうぞ」と、いってくれた。
十津川は、ふみに案内されて、二階に、あがった。
六畳と、三畳の二間の二階である。六畳の部屋の隅に、机が置かれ、その上に、若い女の写真が、飾ってあった。
二十代の松本はるかの写真だった。
母親のふみも、娘のはるかが、死んでしまったことは、知っているに違いない。
問題は、死んでしまった松本はるかが、どんな事実を知らせてくれるかに、かかっていた。

「お嬢さんのはるかさんですね？」
十津川は、写真を見ながら、ふみに、いった。
「娘は、今、留守でございますから」
と、ふみは、同じ言葉を、繰り返している。
「二十年前、お嬢さんが、いなくなった時、なぜ、探さなかったんですか？」
と、十津川は、きいた。
二十年前、小樽の運河で死んだ女が、松本はるかとすれば、母親も、父親も、探さなかったことになる。今でも、あの死体は、身元不明のままだからである。
「堀江先生が――」
「探すなと、いったんですか？」
「二十年前、娘が、いなくなった時、堀江先生に相談に、主人と一緒に行きました」
「それで、堀江さんが、探すなと、いったんですか？」
「先生は、いらっしゃらなくて、秘書の方が、これは、どうも、先生を傷つけるようなことになりかねないから、しばらく、探さずにいなさいと、いわれたんですよ」
「それで、探さなかったんですか？」
「何といっても、堀江先生は、私たちの命の恩人でしたから」
と、ふみは、いう。
「しかし、お嬢さんが、いなくなったんでしょう？」
「ええ。ですから、一ケ月待っても、見つからなかったので、先生には、悪いと思いましたけど、主人と二人で、必死で、探しました」
「一ケ月後ですか」
それでは、見つからなかったとしても、不思議はないと、思った。

小樽署でも、身元不明のまま、処理してしまっていただろうからである。

十津川は、小樽運河の溺死体のことを、話そうかと思った。が、やめることにした。なにも、娘さんは、死にましたよと、念を押すことはないと、思ったからである。

二十年前、行方不明のままなら、ふみだって、娘のはるかが、もう、生きているとは、思っていないだろう。

だが、夫を失った今、ひょっとすると、娘が、どこかで生きているのではないかという願いが、ふみの生甲斐になっているかも知れないのである。

それを、無理に、こわすこともないと、思ったのだ。

「東京から、こちらへ引っ越された時、お嬢さんのものは、持って来られたんですか？」

と、十津川は、きいてみた。

「もちろん、全部、持って来ましたわ。はるかが、帰って来た時、何か失くなっていると、困りますもの」

ふみは、かたい表情で、いった。

「その中に、石崎さんの日記が、入っていませんでしたか？」

と、十津川は、きいた。

「石崎さんの日記ですか？」

ふみは、首をかしげて、きき返した。

十津川は、不安になってきた。ここにも、無いのだろうか？

「石崎さんの日記が、こちらにあると聞いたんですがねえ。ありませんか？」

と、十津川は、重ねて、きいた。

「あの娘のものは、調べも、整理もしないで、そのまま、残してありますけど」

「それを見せてくれませんか」

と、十津川は、頼んだ。

「構いませんけど、石崎さんの日記が、あるかどう

か――」

ふみは、あいまいないい方をしながら、隣りの部屋の襖を開けた。

部屋の半分ほどを、本箱や、三面鏡や、積み重ねた木の箱が、占領している。その全てが、娘のもののようだった。

どの調度品も、古めかしく見えるのは、二十年という年月のためだろう。

本箱などは、塗料が、ところどころ、剝げ落ちているのだが、母親にしたら、捨てる気には、ならないに違いない。

「石崎さんが死んだ時、何か、いって来ませんでしたか？」

「何かといいますと？」

「石崎さんのものがあれば、返して欲しいということは、ありませんでしたか？　彼の周辺の人間からですがね」

と、十津川が、いうと、ふみは、しばらく考えていたが、

「そういえば、娘が、誰が何かいって来ても、石崎さんのものは、何も預かっていないといってくれと、いっていたことが、ありますわ」

「それで、いって来たんですか？」

「ええ、石崎さんのお友だちという方から電話があって、何か預かっていないか、もしあれば、返して欲しいと、いわれたことがありました」

「相手は、名前を、いいましたか？」

「いったかも知れませんけど、二十年も前のことですから、覚えておりません」

「それで、お嬢さんのいったように、何も預かってないと、返事をされたわけですね？」

「はい」

「相手は、納得しましたか？」

「そのあとも、二、三度、同じような電話がありましたけど」

「電話だけですか？」

と、十津川は、きいた。
ふみは、また、考え込んでいたが、
「電話がなくなってから、上板橋の店が、放火されたことがございましたけど、あれは、関係ないと、思いますわ」
「放火があったんですか？」
「二度です。どちらも、ボヤですみまして、警察も調べてくれました。でも、犯人は、見つかりませんでした」
と、ふみは、いった。
ふみは、関係がないと、信じているようだが、十津川は、関係ありと、思った。
石崎は、遺書を残して、自殺した。
その遺書にあったのは、無実の自分を、追い込んだ警察への怒りだけだった。
しかし、彼が無実なら、他に、いいたいことがあったのではないか？
石崎は、疑われるような行動を、再三にわたって、とっている。
東京で起きた連続殺人の現場に、石崎は、ポルシェで、出かけているからである。
石崎が、何のために、そんな真似をしていたのか、それに、なぜ、彼は、遺書に書かなかったのか？
いや、ひょっとすると、他に、遺書があったのではないか。
石崎が死んだあと、必死になって、それを探していた人間がいるに違いない。二十年前、松本家に、電話をかけて来た男は、その一人だったろうと、十津川は、思った。
ふみが、何もないと答えたが、相手が、それで、納得したとは、思えない。
万一、石崎の本当の遺書なり、日記なりがあったら、大変と考えたろう。そこで、家ごと焼き払ってしまおうと計画し、二度にわたって、放火したに違いない。
二十年たってからも、事件を再調査しようとした

佐々木を殺した相手なのだ。放火するぐらい、平気だったに違いないのである。

十津川は、そんなことを考えながら、まず、本箱から、調べていった。

松本はるかは、文学少女だったのか、日本文学や世界文学の本が、並んでいた。ただ並べてあるだけではなく、一冊を手にとってみると、それが、好きな言葉だったのか、ところどころに、赤く、線が入っていたりした。

しかし、本箱には、石崎の日記も、彼の名前の入った本も、見つからなかった。

三面鏡の引出しや、洋服ダンスも、同じだった。

次に、十津川は、積み重ねてある本箱を、調べることにした。

前には、茶箱だったものらしい。ふたを取ると、かすかに、お茶の香りがした。最初の箱には、彼女の靴や、傘といったものが、入っていた。

十津川は、二つ目の箱を開けた。

これには、彼女の着物や、服が、きちんとたたまれて、納めてあった。洋服ダンスには、入り切らなかったのだろう。

それを、一着ずつ、丁寧に、外へ出してみると、箱の底に、茶色の封筒が、見つかった。

本が、二、三冊入っていそうな大きさに、十津川の胸が、躍った。

中身を取り出してみた。

(あった!)

と、思った。

部厚い日記帳が、二冊入っていて、そこに、石崎の名前が、書き込んであった。

「ありましたよ」

と、十津川は、興奮した口調で、ふみに、いった。

彼女も、のぞいてみて、びっくりした顔になっている。

「そこは、調べませんでしたので、申しわけありません」

と、いう。
「これを、お借りして構いませんか？」
「あの娘に断ってと思いますけど、おりませんから、どうぞ、お持ちになって下さい」
ふみは、あくまでも、丁寧に、いった。
十津川は、二冊の日記を、大事に抱えて、旅館に入ると、一冊目のページを開けた。
二年間にわたる日記の最初は、昭和四十年の一月一日である。
すでに、この時、石崎は、堀江正志の秘書になっていたと思われる。一月一日のところに、いきなり「先生」と、書かれているからである。

一月一日
昼まで寝て過ごす。起きてからも、電気こたつに入り、今日着いた年賀状を見ていた。
全部で、三十二通。去年より少いが、こちらも、忙しさにかまけて、あまり出していないから仕方がないが。
先生からは、いつものように、筆で書かれた年賀状が届いていた。相変らず、几帳面な先生である。だから、尊敬も出来るし、信頼も出来るのだ。

一月二日
例年の通り、先生宅に、年賀のあいさつに行った。盛況である。人望のある方だから、当然だが、将来、政治家を志しても、これだけの人間を、集められるだろうか？
先生に、初めてご子息の正彦さんを紹介された。アメリカに留学中で、去年の暮れに、帰国したということだった。
私と同じ二十五歳ということだが、さすがに、アメリカに留学中ということで、洗練されていると感心した。恐らく、将来は、先生のあとを継がれるのだろう。
夕食のあとで、先生が、特別に、私だけを二階の

書斎に呼ばれた。何事だろうと、緊張したが、先生のいわれたのは、正彦さんのことで、君と同じ年齢だから、友人になってくれという。先生の眼は真剣だった。それだけ、一人息子の正彦さんのことを、心配されているのだろう。秘書は沢山いるが、本当に、息子の友人になってくれそうなのは、君だけだから頼むのだといわれて、感激した。

ここでは、まだ、堀江ジュニアに対して、特別の感情は、持っていないようだった。

十津川は、ページを繰っていった。

一月七日頃まで、堀江正彦は、日本にいて、また、アメリカに戻ったらしく、しばらくは、彼の名前は、日記に出て来なかった。

十津川は、堀江正彦が出てくるまで、早読みしていった。

その間、日記に書いてあるのは、殆ど、堀江代議士のことで、石崎が、いかに、尊敬していたかがわかる感じである。

次に、堀江正彦の名前が出てくるのは、七月二十五日である。

この日、正彦が、アメリカから、帰って来たのだ。

七月二十五日

先生の命令で、成田空港に、正彦さんを迎えに行く、買ったばかりのポルシェ911に乗って行った。頭金を出して下さった先生に感謝。

正彦さんは、意外に、陽焼けしていなかった。むしろ、青白い顔で、正月に初めて会った時よりも、痩せて見えた。

それをいうと、正彦さんは、アメリカの若者は、夏だからといって、海に行って、泳ぐわけではなく、好きなことをしている。自分は、将来のことを考えて、アメリカの政治家たちの伝記を、読んでいたという。そういえば、日本の若者は、夏といえば、海や山へ行き、冬はスキーと、パターンが、決ってい

るような気がする。

正彦さんは、やはり、将来は、お父さんのあとを継いで、政界に出る気なのだろう。お邸に着くと、先生から、息子は日本の夏を、箱根の別荘で過ごすことになるので、時々、一緒に過ごしてやってくれといわれた。信用されていると思うと、悪い気はしない。

七月二十六日

早朝、正彦さんと、車で、箱根の別荘に向った。

正彦さんは、先生の資質を受けついでいると思うが、顔立ちは、亡くなった奥さんによく似ている。細面で、眼が大きく、どこか女性的だ。

別荘は、今日に備えて、きれいに掃除されていて、食事を作ってくれるおばさんが、通いで来ることになった。名前は、文江さん。年齢は六十歳ぐらいに見えた。

私は、現在、国会が休みなので、一週間は、別荘で、正彦さんと一緒に過ごすことが出来る。楽しみだ。

従って、これは、箱根の別荘で、書いている。

七月二十七日

年前中、近くのテニスコートで、正彦さんと、テニス。

アメリカで、時々、テニスをやっていたということで、なかなかお上手で、こちらは、一セットも、とれなかった。

テニスのあと、一緒に、シャワーを浴びながら、正彦さんは、ちょっと得意げで、それが、妙に、子供っぽく見えた。

ふと、弟のような、可愛らしさに思えた。

七月二十八日

今日も午前中、テニス。

正彦さんに、また負けた。が、別に、口惜しい気

はしない。ただ、彼が、得意そうな顔を見るのが楽しくて、精一杯、口惜しがって見せる。

七月二十九日

近くに、第一商会の副社長、塚本さんの別荘があり、そこから、招待された。

夕方、正彦さんと二人、精一杯、正装して出かけた。毎年、高額所得者といわれるだけに、大きな別荘だった。

主人の塚本氏夫婦の他に、大学にいっている娘さんやその友人たちが、集まっていた。男はいい合せたように、国立大の学生や、エリート社員、女たちは、美人だった。まるで、見合いの席の感じで、お互いに、相手を物色していた。

最近は、恋愛がほとんどだというが、ああした上流階級では、反対に、見合いが多く、結婚によって、新しい閨閥を作ろうとしているのだろう。

そんなパーティだから、堀江先生の一人息子で、アメリカ留学中の正彦さんは、女たちから、よくもてた。家柄がいい上に、ハンサムだから、当然だと思う。

私は、あまり、もてなかった。が、これも当然かも知れない。地方の大学出身だし、おやじは、地方の県会議員でしかない。それでも、結構楽しかったのは、酒も、食事もうまかったからだ。

帰る時、私が、今夜は楽しかったですねというと、正彦さんは、ああいう賑やかなのは、あまり好きじゃないと、いった。意外な気がしたが、ひょっとすると、私に、気を遣って、ああいってくれたのかも知れない。

七月三十日

一日中雨。

七月三十一日

今日は、めちゃめちゃだった。

昼過ぎに、バイクに乗った連中がやって来て、何が面白くないのか、石を投げて、窓ガラスを割った。

腹が立ったので、出て行き、怒ったら、連中と、ケンカになった。私も、ボクシングをやっていたことがあるが、向うは、五人だから、やられてしまった。

乱闘中に、気がついたら、正彦さんも、飛び出して来て、奴等と、殴り合っていた。その中に、正彦さんが、血だらけになって、倒れてしまった。

連中が、立ち去ったあと、私は、あわてて、救急車を呼び、正彦さんを、病院に運んだ。私が、心配していると、正彦さんは、血だらけの顔で、笑った。「すかっとしたよ」と、彼が、いったのには、驚いたが、嬉しくもあった。一緒に戦ったのだから。

正彦さんの怪我は、意外に軽傷だったので一安心である。私も、単なる打撲ですんだが、もともと、私の身体は、頑健に出来ているのだ。

今日、病院に行くと、正彦さんの病室に、大きなバラの花束が、飾ってあった。塚本氏の娘の由美さんが、見舞いに来たということだった。

八月二日

今日は、病室に、果物が置かれていた。やはり、塚本由美さんの見舞いである。

八月三日

今日は、彼女の見舞いがなかったという。なぜか、ほっとする。妙な感情だ。

八月四日

今日は、正彦さんの枕元に、彼女の写真が飾られていた。ニッコリと、微笑みかけている写真だ。「堀江様」と書かれた封筒も、写真の前に置いてある。

見ていいよと、正彦さんがいったので、中を読んだ。早く元気になって下さいとだけ書いてあった。ただ、その末尾に、由美とある文字が、大きく自己

主張している感じだ。

このあと、五日間、何も書いてない空白のページが、続いている。

普通に考えれば、石崎は、堀江正彦に、恋人が出来そうなことに、祝福と同時に、戸惑いも覚えていたから、日記に、何も書かない日が、続いたのだと思う。

十津川にも、若い時、そんな感情に支配されたことがある。親友に、恋人が出来た時である。嫉妬に似た感情に捕えられて、戸惑い、自分が嫌になったものだが、十津川自身にも、恋人が出来て、自然に、解決してしまったし、その親友とは、今でもつき合っている。

八月十日

正彦さんは、昨日、元気に退院している。また、男二人の生活が始まる筈だったが、少しばかり、違ってしまった。

テニスを再開することになっていた。いや、テニスは、また始めたのだが、そこに、塚本由美が、入って来てしまったからだ。

美人で、若くて、何よりも、塚本氏の一人娘だ。周囲の人間は、みんな、二人が似合いのカップルだと思っている。私だって、そう思う。堀江先生から、電話があって、聞かれた時も、私は、お似合いだと思いますと、返事をした。

だが、この戸惑いは、何なんだろう？　二人を見て、微笑しようとするのだが、それが、引き攣ってしまっているのが、自分にもわかるのだ。この感情は、何なのだ。（わかっている癖に、自分を誤魔化すな！）

八月十一日

朝から、塚本由美が、車で迎えに来て、正彦さんが、ドライブに出かけて行った。

彼が、ちょっと迷惑げな顔をしていたのが、私には、救いだった。が、そのことが、私を、自己嫌悪に落ち込ませてしまう。なぜ、祝福できないのか？なぜ、自然に振る舞えないのか、それを考えると、情けなくなってくる。

八月十二日

夜、正彦さんが、突然、恋愛について、喋り出した。お互いに、若い男だから、女や、恋愛について話してもおかしくはないし、むしろ、当り前のことなのだが、私は、ぎくりとした。彼が私の気持を知っていて、わざと、恋愛のことを話題にしたのではないかと、思ったからだ。

彼は、しきりに、私が、どんな女が好きなのか、今、恋人がいるのかを、聞いてきた。

それも、私には、当然の質問には、聞こえなかった。何か、私の気持を、変えようとして、いっているような気がして仕方がなかった。

私は、しどろもどろになり、わけのわからない観念的な話をして、彼を、戸惑わせてしまった。

八月十三日

何もなし、自己嫌悪の続き。

八月十四日

正彦さんに、テニスに誘われたが、頭痛がするといって断ってしまった。自分が、どんな眼で、彼を見ているのか、それが、気になって仕方がない。

八月十五日

頭痛がするといい、一日中、寝ていた。

彼は、塚本由美と、どこかへ出かけた。どこかわからない。一緒に帰って来た彼女が、お見舞いといって、バラの花をくれた。バラは嫌いだ。いや、バラが嫌いになった。

八月十六日
堀江先生に呼ばれたので、東京に戻る。

八月十七日
東京。彼のことを考え続けた。

八月十八日
朝刊を見て、びっくりした。
昨夜、塚本由美が、死んだと出ていた。運転していた車が、転落して、死亡したという。
どう受け止めていいのか、わからなかった。
夜、箱根の彼に電話をかけた。努めて、声を落として、悔みを、いった。少しでも、嬉しさが出てしまったらいけないと、思ったからだ。

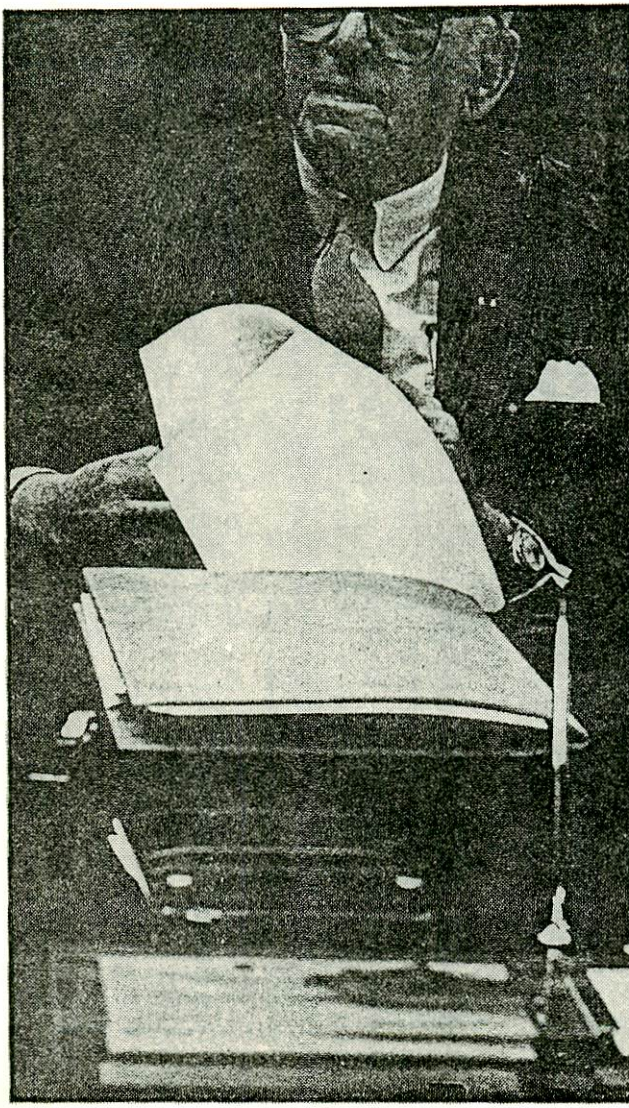
八月十九日
テレビでも、塚本由美のことを、取りあげている。午前中のニュース・ショウだ。どうやら、向うの警察は、殺人の疑いもあると考えているようで、キャスターも、それらしいコメントをしていた。
正彦さんのことにも、言及していた。本名は、出さなかったが、死んだ塚本由美は、保守党の有力議員の一人息子で、アメリカ帰りの青年と、交際しており、近く、結納を取り交すことになっていたという。
それを妬んで、誰かが、事故に見せかけて、殺したのではないかということらしい。
堀江先生も、心配して、明日は、箱根に行って、息子の様子を見て来てくれと、いわれた。

八月二十日
午前中に、箱根に戻る。
塚本氏の別荘で、彼女の葬儀が午後二時から行われた。
彼女の大学の友人たちも、沢山参列した。私も、正彦さんと一緒に、出かけた。政治家や、財界人か

らも、花輪がおくられていて、盛大なものだった。
私は、葬儀の間、ずっと、正彦さんの様子を見ていた。堀江先生から、息子の様子を報告してくれといわれたからというのは、自分に対するいいわけでしかないことは、よく、わかっている。
私は、彼に、あまり悲しんで貰いたくなかった。もし、泣くのなら、空涙であって欲しかった。
死んだ彼女には悪いが、たいした女ではなかった。資産家の娘で、まあ、美人だが、それだけの女なのだ。頭もよくないと、私は、思っている。タレントの話をする時など、完全なミー・ハーだった。大学で、フランス文学をやったというが、フランス語も、たいして喋れなかった。
そんな女が死んだくらいで、彼ほどの男が悲しむことはないのだ。
彼は、葬儀の間、始めから終りまで、俯いて、一言も、喋らなかった。あの時、彼は、悲しんでいたのだろうか？
葬儀には、神奈川県警の刑事も来ていた。と、いっても、最初は、妙に暗い男がいるなと思っていただけで、そいつが、帰り際に、寄って来て、警察手帳を見せ、正彦さんと、塚本由美のことを聞いた。
彼女の父親は、由美と、正彦さんが、結婚を前提として、つき合っていたと、いったらしい。刑事は、本当に、そうだったのかと、私に聞いた。
私は、そんなに深いつき合いだったとは思えないと、いった。私が、そう思いたくなかったのだ。
刑事は、びっくりしたような顔をして、話が違うなと、呟いていた。
彼は、大志を持っていて、今は、恋どころじゃない筈ですよと、私は、いってやった。

八月二十一日

事故のことが気になって、今日、地元の警察へ行き、詳しい話を聞いた。
堀江先生の名前を出すと、署長も、丁寧に応対し



てくれた。さすがに、先生の力はすごいと思った。

署長の話では、塚本由美の死は、事故死の可能性が八割で、殺人が二割ぐらいだという。

警察の調べによると、塚本由美は、八月十六日の夜、十時半頃、家を出たらしい。というのは、この日、塚本氏は、東京にいて、別荘には、彼女と、お手伝いの五十六歳の女性しかいなかったからである。

翌十七日の朝になって、彼女が部屋にいないのを、そのお手伝いが知って、探し始めた。最初は、東京の塚本邸に電話したり、友人の別荘に問い合せたりしていたが、どこにも行っていないので、警察に捜索を頼んだ。

その結果、夕方になってから、谷底に落ちている車と、死んでいる塚本由美が、見つかったという。

私は、殺人の可能性が二割ある理由を聞いてみた。署長の説明では、二つの点だということだった。一つは、彼女が、車で出かけたのは、誰かに会うためだったに違いないということ、もう一つは、死体に、打撲傷が数ケ所あり、それが、落下の時のものか、殴られてついたものか、不明ということである。

警察が、正彦さんに疑いの目を向けたのは、第一の理由によるものらしい。つまり、十六日の夜、彼女は、正彦さんに会いに行ったのではないかというのだ。

私は、そんな筈はないと、署長に、いってやった。考えてもわかることだ。彼女は、正彦さんと一緒になりたがっていた。父親の塚本氏もだ。それなのに、正彦さんが、彼女を殺す必要がどこにあるのか。きっと、彼女に振られた男が、強引に、呼び出して、殺したんだろうと、私がいうと、署長も、肯いていた。

八月二十二日

警察は、塚本由美の死は、事故死と、決めたらしく、新聞にも、そう出ていた。

正彦さんは、また、私と、テニスをやったり、水泳をしたり、話をしたりの生活に戻った。別に、彼女が死んだことで、ショックを受けたり、人間が変ったりした様子は、見えなかった。

私は、ほっとした。やはり、正彦さんは、今度の事件に、無関係だったし、彼女を愛していたわけではなかったと、わかったからだ。

どちらの気持が、強いだろうと、ふと、私は、自問した。彼が、塚本由美を殺した犯人であっても、私は、あまりショックは受けなかったろう。彼が、本当に、彼女を愛していたとなった時のショックに比べればである。

自分の気持が怖い。

アメリカ

十津川は、日記から顔をあげ、疲れた眼を、しばたいた。

ここまでで、一つだけわかったと思った。石崎が、堀江ジュニアの堀江正彦に対して、特別の感情を持っていたことがである。

だが、それが、二十年前の連続殺人事件に、どう関係してくるのかは、まだ、わからない。

十津川は、煙草に火をつけ、日記にあった自動車事故のことを、考えてみた。もちろん、今の段階で、十津川には、この事件が、果して、単なる事故だったのか、それとも、殺人事件だったのか、わからない。

だが、もし、地元の警察が、この日記を読んでい

たら、きっと、石崎を、真っ先に疑ったろうと、思った。

石崎が、堀江正彦を失うまいとして、塚本由美を殺したのではないかと、警察は、考えたろうからである。

警察が、結局、事故死としたのは、殺人事件とすると、犯人と思われる人物が、浮び上らなかったためではなかったのか？

もし、これが殺人事件なら、連続殺人事件の一つだったかも知れないのだ。

十津川は、それを頭の隅に置きながら、また、日記の続きを、読み始めた。

八月二十三日

今日、急に、正彦さんが、アメリカに帰ることになった。

堀江先生から伝えられた。息子は、もう、アメリカに戻った方がいいというのである。正彦さん自身も、寝耳に水という感じで、電話を、先生にかけ、どうしても、戻らなければいけないのかと、聞いていた。

先生にしてみれば、日本で、夏を、楽しむのはいいが、肝心の勉強を忘れては困るという親心なのだろうと、私は思った。

先生は、夕方になって、ご自分で、車で、迎えに来られた。それだけ、先生が、正彦さんのことを愛していて、心配しておられるのだと思う。

八月二十四日

今日、一二時ジャスト発のニューヨーク行のJALで、正彦さんは、アメリカに戻って行った。

堀江先生は、「正彦が、日本にいる間、友人になってくれて、ありがとう」と、礼をいわれた。

私は、当惑する。良い友人だった自信がないからだ。私は、ただ、ひたすら、彼の傍にいたい、彼を独占したいと、思っていたに過ぎない。

私が、こんな気持でいること、こんな性癖であることを、堀江先生が知ったら、驚愕し、私を、息子さんの友人に選んだことを、後悔されるに、決っている。

まだ、先生も、正彦さんも、私の正体に気付いていない。それを考えると、突然、彼が、アメリカに戻るのは、私にとっても、幸いなのかも知れない。

堀江正彦が、アメリカに戻ったという記述のあと、急に、石崎の日記は、事務的になった。

その日にあったことだけを、機械的に、書きつけている感じである。

例えば、こんな具合だった。

八月三十日
午前八時起床
午後一時より三時まで、陳情団の世話
夜、堀江先生と共に、料亭Kで、会食。

九月二日
特記すべきことなし。

それが、ほぼ一ケ月間続いている。その間、石崎が、どんな気持でいたのか、推測より仕方がないのだが、恐らく、自己嫌悪の連続だったのではないか。

それに、堀江正彦の名前が、一度も出て来ないのは、かえって、その間、石崎が、彼のことを考え続けていたことを、示しているように思われた。

九月二十六日になって、突然、正彦の名前がよみ返ってくる。

堀江代議士と一緒に、アメリカへ行くことになったからである。

九月二十六日
明日から、堀江先生が、アメリカへ行かれる。日米間の経済問題の討議のためだが、急に、私も、同

行を命じられた。
アメリカでは、正彦さんに会ってやって欲しいといわれた。
それに、奇妙なことも、先生は、いわれた。アメリカで、息子に会って貰いたいが、その時、知ったことは、絶対に、口外しないでくれというのである。どんなことなのか。全く、見当がつかない。

九月二十七日
二一時〇〇分、日本を出発。

九月二十八日
ワシントン。
明日から、堀江先生たちは、アメリカ政府の高官との会議に出席されるが、私は、ボストンに行き、正彦さんに、会うことになっている。
先生は、今日、また、息子について、こちらでわかったことは、絶対に、秘密にして貰いたいと、念を押され、これは、君だから、頼むのだともいわれた。
いったい、彼に、何があったというのか、私にも、見当がつかない。いくら、考えても、想像がつかないのだ。むしろ、彼のことを考えると、箱根で、私を捕えた感情が、またよみがえって来て、私を苦しめる。あれから一ケ月間、私は、他のことを考えようと努めて来たのだが、アメリカに来てみて、それが、全く空しかったのを悟っている。

九月二十九日
午後、ボストンの大学へ行く。ここに、正彦さんが、留学している筈だったからである。
広いキャンパスには、日本より早く、秋がやって来ていて、紅葉が始まっていた。
日本人らしい顔の学生も多い。その中に、彼を探したが、見つからなかった。
留学生の面倒をみているというA・ムーアという

若い教授に会った。多少、日本語が出来るということだったが、会話は、英語になった。

私は、あまり、英語に自信はない。が、堀江正彦という留学生に会いたいという意志ぐらいは、伝えられる。それなのに、最初、ムーア教授は、ミスター・堀江という留学生はいないと、いった。

私の英語が、うまくないので、相手が、誤解したのだと思い、何度も、マサヒコ・ホリエと、繰り返し、手帳に、その名前を、書いて、教授に見せた。

それでも、なお、ムーア教授は、その名前の学生は、いないというのである。

私は、堀江先生から、この大学と、聞いていた。先生が、息子のいる大学の名前を間違える筈はあるまい。そう思い、私は、マサヒコ・ホリエに、会わせて欲しいと、主張した。

なぜかわからないが、ムーア教授が、正彦さんを、隠しているような気がしたからである。

ムーア教授は、難しい顔で、しばらく考えていた。何を考えているのかわからなかったが、「確かに、ミスター・ホリエという日本からの留学生がいます」と、いった。

私は、無性に腹が立って、それなら、すぐ会わせてくれと、いった。

「しかし、今は、この大学にはいません」

「じゃあ、どこにいるんですか？　日本に帰ってもいませんよ」

「居場所は、家族の方だけに、申しあげたい」

「私は、彼の父親に頼まれて、会いに来たんですよ。父親は、日本の政治家で、今、ワシントンで、アメリカ政府の高官と会っています。それで、ここに来られないので、代りに、秘書の私が、来たんです」

「すると、ミスター・ホリエの父親が、あなたに、会うことを、頼んだわけですか？」

「だから、そういってるじゃありませんか」

こんな会話が、私と、ムーア教授の間に、続いた。まだるっこしいが、相手が、いやに慎重なので、会

話が、堂々めぐりをしてしまうのだ。
話している中に、私は、だんだん、不安になって来た。理由なしに、教授が会わせたがらない筈はない。とすると、正彦さんは、ひょっとして、警察に捕まっているのではないか。そんなことまで、考えてしまったのだ。
「ミスター・ホリエは、今、入院しています」
と、ムーア教授は、いった。
私は、警察が関係しているのではないことに、ほっとしたが、同時に、なんの病気だろうと、それが、心配になってきた。
「どこの病院ですか？　どこが悪いんですか？」
と、私は、きいた。
「病院を、お教えしてもいいが、今は、面会に行けませんよ」
ムーア教授は、そんなことをいった。
「それは、危篤ということですか？」
私は、心配になって、きいたのだが、ムーア教授は、
「危篤ではないが、今は、会いに行かない方がいいと思いますね。多分、ミスター・ホリエも、今は、ひとりで、治療に専念したいと思っているに、違いありませんよ」
と、いう。私は、腹が立ってきた。アメリカ人というのは、どんな問題についても、はっきりと、ものをいう国民だと思っていたのに、この教授は、やたらに、あいまいないい方をするからだ。
「私は、父親に頼まれて、彼の様子を見に来たんです。戻って、報告しなければならない。どうも病気らしいなんて、報告が出来ると思いますか？　病院の名前だけでも、教えて下さいよ」
私は、食いさがってみた。その結果、やっと、ムーア教授は、ハイアット病院だと、教えてくれた。M・ハイアットという資産家が作った病院だということだった。
私が、場所を聞くと、ムーア教授は、簡単な地図

を描いてくれたが、

「面会には、行かれない方がいいと思いますよ」

と、また、いった。

私は、とにかく、ハイアット病院に行ってみたが、行ってみて、その病院の大きさに、驚いてしまった。広大な敷地の中に、病棟が、いくつも並び、中庭は、ちょっとした公園である。受付に行き、ここに入院している日本人のホリエ・マサヒコに、面会したいといった。

ところが、ここでもまた、肉親以外の面会は、認めないというのである。いったい、どうなっているのだろう。

「私は、彼の友人で、彼の父親に頼まれて、会いに来たんです。名前は、石崎です。ホリエ・マサヒコ当人に聞いて下されば、私が、友人であることは、わかりますよ」

と、私は、いってみたが、受付の女性は、

「肉親以外は、駄目です」

と、頑固に、主張する。私は、また、父親の堀江先生が、仕事で、ワシントンにいて、ここには、来られないのだと、説明した。

「それでは、その方の委任状といったものを貰って来て下さい。そうすれば、規則を広く解釈して、面会を許可します」

なかなかの美人なのに、いやに、事務的ないい方をする女だった。

九月三十日

私は、堀江先生に、ハイアット病院でのことを、そのまま伝えた。

先生も、きっと驚くに違いない。いや、病院の態度や、大学での対応に、怒るのではないかと思ったのだが、意外にも、「やはりな」と、低い声で、いわれた。

どうやら、先生は、正彦さんが、入院中だということを、知っておられたらしい。それなのに、なぜ、

私に、それをいわず、大学へ行くように、いわれたのだろうか？　何か、わけがあったのだと思うが、私には、わからない。

「では、明日、もう一度、ハイアット病院へ行って来てくれ。そして、もし、正彦が、沈んでいたら、君が励ましてやって欲しい」

と、先生は、いわれた。

私は、よほど、先生に、正彦さんの病気のことを、知っておられたのではありませんかと、聞こうかと思った。

だが、先生の難しい顔を見ていると、それが、出来なかった。

おかげで、今日は一日中、私は、悩み続けなければならなかった。先生が、私を欺したとは、思わない。だが、先生が、正彦さんの入院のことを知っておられたのも間違いないのだ。

先生は、そのことを、私に、いいにくかったのだろうか？　何もいわずに、私を行かせ、私が、自分の眼で、確かめることを、望まれたのだろうか？

十月一日

私は、今日、先生の委任状を持って、もう一度、ボストンのハイアット病院を訪ねた。自分が、公用で行けないので、私に、息子への面会を許可して欲しいという委任状である。

例の受付の女は、「オーケイ」といい、私を、案内するといった。すぐ、正彦さんの病棟へ連れて行ってくれるのかと思ったら、彼女が、案内したのは、担当の医者のところだった。

やたらに、背の高い、金髪の医者だった。多分、北欧系だろう。四十五、六歳と思う。

彼は、真っ青な眼で、私を見て、

「ミスター・ホリエが、何の病気で入院しているか、知っていますか？」

と、きいた。

私が、知らないというと、医者は、首をかしげて、

「ご両親には、電話をかけて、お知らせしておいたんですがねえ」

と、いった。

やはり、堀江先生は、知っておられたのだ。それなのに、なぜ、教えてくれなかったのかという疑問が、また、私を襲った。同時に、それだけ、難しい、危険な病状なのかという不安も、わきあがってきた。

「とにかく、彼に、会わせて下さい」

と、私が、いうと、医者は、ちょっと考えてから、

「いいでしょう」と、いった。

医者は、私を、離れた病棟へ案内した。妙に静かな病棟だった。ホテルのそれのような広いロビーに、入った。壁には名画がかかり、柔らかな音楽が、かかっていた。

「ここで待っていて下さい。一応、患者の了解も得なければならないので」

と、医者は、いった。私は、腹が立った。正彦さんが、私を拒否する筈がないと思ったからだ。

だが、三十分ほどたって戻って来た医者は、私に向って、首を横に振ったのである。

「なぜ、駄目なんですか？　本当に、彼は、会いたくないと、いったんですか？」

私は、どうしても合点がいかなかった。

「私の名前を、いってくれたんですか？」

とも、医者に、きいた。

医者は、青い眼で、気の毒そうに、私を見た。

「説得したんですが、今は、誰にも会いたくないというのですよ。まあ、彼も、気持が落ち着けば、会う気持になると思うから、気楽に、待って貰えませんか？」

「彼は、いったい、何の病気なんですか？」

と、私は、きいた。

医者と話が出来るのなら、重態というわけでもないだろう。それなのに、なぜ、私と会いたがらないのか、それが、不思議で仕方がなかったのだ。

医者は、眉を寄せて、

「本当に、何も知らないんですか？」
「ええ。知りませんよ。受付でも教えてくれなかったし、あなたも、全く説明してくれませんでしたからね」
「私は、知っているものとばかり思っていたんですよ。ここが、精神病の患者の病棟であることも、もちろん、知っておられると、思ったんですがねえ」
と、医者はいって、私を、驚かせた。
私には、わけがわからなかった。入口に、何か書いてあったのだろうが、私は、見ないで入って来てしまったのだ。
「彼が、なぜ、この病棟にいるんですか？」
と、私は、当然の質問をした。
「ミスター・ホリエは、現在、治療中だからです。主として、私が、彼の治療に当っています」
「彼が、頭がおかしいなんて、信じられません」
私が、いうと、医者は、笑って、
「彼は、精神的に不安定なだけですよ。ここの患者は、皆そうです」
「しかし、入院しているわけでしょう？」
「それは、不安定の度合が強くて、そのままにしておくと、犯罪に走ることも考えられるからです」
「犯罪？　彼の場合は、どんな犯罪なんですか？」
と、私は、きいた。恐しい言葉を予想して、私は、息を殺して、医者を見ていた。
「婦女暴行です」
と、医者は、いった。その言葉が、私を打ちのめした。信じられなかった。正彦さんは、そんな犯罪からは、もっとも遠い人間だったからである。
「信じられません」
と、私は、いった。当然ではないか。誰が信じられるだろうか？
「友人として、信じられないというのは、わかりますが、これは、事実です。ミスター・ホリエの場合は、病気です」
「そんな病気があるんですか？」

「彼は、前にも、婦女暴行で、警察に逮捕されたことがあり、その時、錯乱状態にあったということで、ここに入院し、治療に当っていたのです。完治したと考えて、退院し、大学に、戻っていたのですがねえ」

医者は、小さな溜息をついた。

「家族は、そのことを、知らされていたんですか？」

と、私は、きいた。それが、大事なことだったからである。

「もちろん、大学を通じて、家族の方には、知らせましたよ」

「それは、間違いありませんね？」

と、私は、念を押した。

医者は、変な顔をして、

「あなたは、患者の父親から、全てを知らされた上で、ここに来たんじゃないんですか？」

と、きいた。

私は、あわてて、「もちろん、聞かされていました」と、いった。

「しかし、友人としては、どうしても、信じられなかったんです。それで、相手の女性は、どんな様子なんですか？」

と、私は、きいた。

「今度の女性は、十九歳の女性です。深夜、公園内で襲われ、首を絞められた上、頭を殴られていて、全治一ケ月の傷で、現在も、入院中です」

「訴えると、いっているんですか？」

「私には、そこまでは、わかりませんね」

「前の時は、どんな具合だったんですか？」

「私が聞いた範囲では、ミスター・ホリエの父親が、慰謝料を払って、示談にしたようです」

と、医者は、いう。

「やはり、相手の女性は、怪我をしたんですか？」

「そうです。確か、相手の女性は、殺されかけたと主張し、警察は、殺人未遂で逮捕したんだと思いましたね。だが、今もいったように、心神喪失で、責

任能力がないことになり、ここに、入院したわけです」

と、医者は、いった。ここまでいわれると、私も、相手の言葉を、信じざるを得なくなった。

しかし、なぜなんだ？

私には、わからない。

十月二日

一日中、ホテルで考え込んでいた。二つのことが、私を、打ちのめしている。一つは、もちろん、彼が、精神病棟に入っていて、しかも、婦女暴行事件を起こしたためだということである。もう一つは、堀江先生が、私に、そのことを、打ち明けてくれなかったことである。

暗い気分は、どんどんより暗く、重くなっていくものだ。疑惑が、広がっていくのと似ている。じっとしていると、嫌なことばかり考えてしまう。妄想が浮んでくる。

箱根で、塚本由美が死んだことも、ひょっとして、彼が犯人ではなかったのか。そんなことまで考えてしまった。

少くとも、堀江先生は、あの事件が起きたので、あわてて、彼を、アメリカに戻らせたことだけは、確かだ。以前、彼がアメリカで事件を起こし、入院していたことを、先生は、知っていたのだから、あわてたのだろう。

だが、先生を非難する気にもなれないし、まして、彼を、あれこれ、批判する気も起きない。

むしろ、前より、彼に、親しみを覚えるようになった。不思議だが、事実なのだ。前は、あくまでも、尊敬する堀江先生のご子息だった。今でも、その関係は変らないが、私は、彼の秘密を知った。私が、守ってやらなければならない。彼は、可哀そうに、病気なのだ。そう思うと、前よりも、彼は、私の近くに来た気がする。

十月三日

昨日は、先生と話すチャンスがなかった。先生が、夜おそく、疲れて帰って来られて、すぐ、寝てしまわれたからである。

今日、私は、病院でわかったことを、先生に話した。と、いっても、向うの医者が、全て、話してくれましたと、伝えただけである。それで、先生は、全て、理解してくれる筈だと、思ったからである。

先生は、じっと考えておられたが、むしろ、ほっとしたような顔になって、

「正彦のことは、誰にも相談できなくて、悩んでいた。私は、日本にいて、正彦は、アメリカだから、誰かに、頼まなければならないんだが、適当な人がいなくてね。何しろ、問題が、問題だからね。君なら、正彦と同年配だし、箱根でも、仲良くしてくれていたから、適任と思った。しかし、正彦の病気のことを知れば、二の足を踏むかも知れない。こういうことだけは、命令できることではないので、何も話さずに、君を行かせたんだよ。正彦のことを、どう受け止めて、帰って来るだろうかと思ってね」

と、いった。

「私は、どうしたらいいんですか？」

と、私は、きいた。

「これまで通り、正彦の力になってやって欲しいのだ」

「しかし」と、私は、先生に、いった。

「どうやって、彼の力になれと、いうんですか？　昨日、面会に行きましたが、拒られました」

「それは、正彦が、あんな事件を起こしたことで、君に会うのを、恥かしがっているんだよ。正彦は、箱根の別荘で、君と一緒に何日か生活している間に、君を、本当の親友と思うようになった。それは、私への手紙の中で、はっきりと、書いていた。正彦には、それまで、本当の友人と呼べる相手がいなかったんだな。その君に、不様な姿を見せるのが辛くて、昨日は、面会を拒ったんだと思っている」

と、先生は、いった。
本当の親友と思っているという言葉が、甘美に、私を包み込んだ。私が、彼に対して抱いた感情と、同じかどうかはわからないが、ともかく、彼も、私に対して、親しみを感じてくれていたのだ。
「正彦さんが、私のことを、親友だと思ってくれているのは、本当でしょうか？」
と、私は、重ねて、きいた。くどいとは思ったが、これだけは、確認しておきたかったからである。
「帰国したら、正彦の手紙を見せるよ」
と、先生は、いった。その言葉に、嘘は感じられなかった。
「わかりました」
と、私は、いった。
「私は、帰国しなければならないが、君は、しばらく、アメリカに残ってくれ。表向きは、私の秘書として、アメリカの政治、経済事情を勉強することにしておくし、もちろん、勉強もして欲しいが、残って、正彦を、見守ってやって欲しいのだよ」
先生は、そういった。私に、否応はなかった。彼のあんな状態を知って、放っておけない気持になっていたからである。
「大丈夫です。私に委せて下さい」
と、私は、いった。
私には、もう一つ聞きたいことがあったが、それを口にするのは、はばかられた。
箱根で起きた事件のことだ。あの事件と、正彦さんとの関係は、何だったのだろうか？
無関係だったのだろうか？　私自身、それを知りたいと思う反面、知らない方がいいとも思うのだ。
結局、箱根のことは、聞かなかった。

十月四日
堀江先生が、帰国された。
私は、アメリカに一人残った。いや、この広いアメリカに、彼と二人だけになったという意識の方が、

強く、私にはある。

堀江先生を除いて、日本人で、彼が、入院していることを知っているのは、私だけなのだ。どんなことをしてでも、彼を守ってやりたいと思う。どんなことをしても。

十月五日

彼に会いに行く。相変らず、彼は、面会を拒った。私は、医者に手紙を託した。私が、力になりたいと思っていることを、書いた手紙である。あれが、彼の気持を、なごませてくれればいいと思うのだが。

十月七日

わざと一日置いて、私は、もう一度、彼に会いに行った。それがよかったのかどうかわからないが、今日は、医者が、待っていたように、私を、病室へ案内してくれた。

精神病の病棟といっても、この病院の場合は、別に鉄格子が、はまっているわけではない。

彼は、個室にいた。ホテルの一室のような、それも、スイートルームのような部屋だった。これは、恐らく、堀江先生が、彼のために、大金を出して、いい部屋に入れたのだろう。

彼は、少年みたいに、はにかんだ表情で、私を迎えた。本当に、十六、七の少年に見えた。箱根で会った時は、羨ましいほどの知的な雰囲気と、精悍さを感じたのだが、今日は、そうしたものが、全て、消えてしまって、育ちのいい、美しい顔の少年が、むき出しになった感じがした。

私は、そんな彼を見て、わけもなく感動した。いや、もっと特別な感情に支配されたのだ。胸が、ときめいたのだ。

私は、ひとりで、顔を火照らせていた。忘れていた感情だった。忘れようとしていた感情だった。高校から大学にかけての頃、私は、美しい女性よりも、美しい少年に、心がときめき、そのことに、悩み、

苦しんだものだった。罪悪とは思わなかったが、恥かしかったからだ。

そんな感情から逃がれるために、ひたすら勉強し、ひたすら、運動をした。堀江先生の秘書になってからも、とにかく、男らしく、生きようと念じてきた。

あの感情は、消えたと思っていたのだが、ただ、眠っていただけなのだ。それが、わかった。

「僕は、もう駄目だよ」

と、彼は、泣くような声で、いった。

「そんなことはないさ。君は、ちょっと病気になってるだけだ。すぐ治るよ」

私は、自分が、兄貴になったような気分で、彼の肩を叩いた。箱根では、まだ、先生の息子さんだという意識が強く働いていたのだが、今は、ただの男同士という気持になれた。

私が、彼の隣りに腰を下すと、彼の体温が、伝ってきた。彼は、身体をもたせかけてきた。彼は、その姿勢で、眼を閉じている。気がつくと、彼は、泣いているのだ。

「助けてよ。僕を」

と、彼はいい、私の手をつかんだ。

その時、彼も私と同じ感情に支配されているのではないかと思った。

十津川は、また、一息ついて、眼をあげた。

彼は、二つの点で、この日記に、興味を感じていた。

一つは、刑事としての興味である。堀江正彦は、アメリカで、婦女暴行で逮捕され、心神喪失が認められて、入院し、精神科医の治療を受けていた。当然、刑事としては、二十年前の連続殺人事件とのつながりを考える。石崎も、箱根で起きた事件に、堀江正彦が関係しているのではないかという疑いを、日記の中で書き記している。

もう一つは、刑事の立場を離れた、人間としての興味だった。

石崎は、日記の中で、正彦に対する感情を告白している。愛情といっていいだろう。十津川には、それが、どんなものなのか、はっきりとはわからない。友情と、どこが違うのか、男女の愛情と全く同じものなのかが、よくわからないのだ。

石崎の感情と、同じものを、正彦も、持っていたのだろうか？

今、読んだ最後のところで、石崎は、正彦もまた、自分と同じ感情でいてくれたのではないかと、書いている。これから先を読まなければ正彦の気持の方はわからないが、もし、二人が、本当に愛し合っていたら、どうなるのだろうか？

堀江正彦が、連続殺人の犯人だったとしても、石崎は、かばって、本当のことは、書いてないのかも知れない。それとも、誰にも見せない積りで書いた日記なら、本当のことが、書いてあるだろうか？

その期待を持って、十津川は、また、日記のページを、繰っていった。

しばらくは、石崎の、正彦に対する気持だけが、

書きつづられている。
それは、まさに、恋愛感情そのものに、十津川には、思えた。
正彦が、ちょっと不機嫌だったといっては、悩み、正彦の周囲にいる女性に嫉妬するのだ。嫉妬についていえば、こんな具合である。

十月九日
看護婦のミス・ナンシーには、腹が立って仕方がない。アメリカ流なのかも知れないが、必要以上に、彼に、なれなれし過ぎるのだ。あんなことで、彼の病気が、治るのだろうか。彼だって、迷惑顔ではないか。

十月十日
今日も、ミス・ナンシーは、下手くそなジョークを口にして、彼を笑わそうとする。私が睨むと、彼女は、不機嫌になって、口の中で、私を罵倒していた。私にだって、そのくらいのスラングはわかるのだ。どう考えても、彼女は、看護婦として、不適格だと思う。特に、彼のように、心が病んでいる患者に対しては、不適格だ。これは、間違いない。病院も、医者もそれに気付かないのか。

石崎は、堀江正彦の周囲にいる女性に対してだけでなく、男性に対しても、嫉妬していたらしい。
例の、北欧系の若い医者に対して、正彦が、やたらに、笑顔を見せているといっては、いらだった表現を見せていた。
次のような文章もあった。

十月十四日
今日、彼と同じ大学の連中が、三人で、やって来たのにぶつかった。平気で、見舞いに来て、大声で喋っているのは、アメリカ的なのだろうが、三人の中の一人が、私は、気になった。他の二人の男女は、

明らかに、恋人同士で、私には、ただ、ほほ笑ましいだけだったが、三人目の青年は、私には、どう見ても、ある種の男に見えるのだ。

アメリカでは、自分が、そうであることを示すために、紫色のものを身につけると聞いたことがあるが、ジョニーというその男も、紫色のマフラーを首に巻きつけていた。いや、そんな外見的なことより、正彦さんに対する態度を見れば、明らかなのだ。

ジョニーは、私など無視して、堂々と、正彦さんにキスをしたりする。彼の手を握りしめたまま、話をする。私は、次第に、むかついてきた。あの看護婦よりも、その男の方が、むかついた。一瞬だが、殺してやりたいとさえ思った。

このジョニーという男は、そのあとも、しばしば、石崎の日記に登場した。十津川は、もちろん、この青年を見てはいないのだが、多分、ホモの男性なのだろう。

それに、堀江正彦は、四十代の今でも、なかなかの美男子だから、二十代の頃は、美青年だったに違いない。それも、東洋的な美青年なら、珍しくもあって、アメリカのホモの男から、よくもてたのではないのか。

前に、ある事件で知り合った青年のことを、十津川は、思い出していた。二十二歳の青年だった。色白の美青年だったが、日本に来ている外国人の男に声をかけられ、ホテルに誘われて、弱ったといっていた。時には、腕ずくで、車に乗せられたとも、十津川に、告白した。彼自身は、ホモの感情がなかったから、迷惑この上なかったのだろう。

二十年前の堀江正彦は、そんな美しさを持っていたのではないのか。

そして、彼自身にも、同性に美しさを感じる気持があったとすれば、アメリカで、ホモの仲間で、もてていたかも知れない。石崎にとっては、ライバルが多かったことになる。

問題は、堀江正彦の気持である。

彼も、ホモだったのだろうか？　石崎が、彼を愛したように、彼も、石崎を愛したのか？

それなら、なぜ、アメリカで、婦女暴行事件を起こしたのだろうか？

十津川が知りたいのは、そこだった。

十津川は、また、日記に戻った。

石崎が、堀江正彦に対して、胸をときめかし、時には、嫉妬したりしているのは、よくわかるのだが、肝心の正彦自身の気持は、なかなか、つかめなかった。

アメリカでの婦女暴行事件が、いったい、どんなものだったのか、なぜ、心神喪失が認められたのか、石崎も、それを知りたかったろう。思うのだが、日記を読んでいく限り、質問もしていないし、自分で、調べてみようともしていないように、見える。

彼の暗い面を見たくないという気持もあるのだろうが、十津川にとっては、読んでいて、まだるっこしくて仕方がない。

十津川は、少しずつ、飛ばして、読んでいくことにした。

石崎が、いかに、堀江正彦を愛していたかを、教えられても、事件の解決には、直接、結びついて来ないからである。

石崎は、十月二十五日に、帰国したと、日記には、書かれている。

十月二十五日

今日、帰国した。空港へ、堀江先生が、わざわざ迎えに来て下さったのは、正彦さんのことがあるからだろう。そのまま、先生のお邸に直行し、私は、正彦さんのことを、話した。病気が、全快に向っていること、医者の話によれば、完全に治る病気だということなどである。

だが、あのことは、話さなかった。たとえ、相手が、堀江先生でも、あのことは、打ち明けることが

出来ない。あくまでも、私と彼の間の秘密なのだ。また、それが、私と彼を結びつける強い絆のような気もしているからだ。私と彼の間に、たとえ、先生でも、入って来て欲しくない。

私は、もう一つ。先生に内緒にしたことがある。医者の言葉だ。医者が、彼の病気は全治するといったことは、先生に伝えたが、医者が、その理由として、「ミスター・ホリエには、もともと、女性をレイプする気はなかったと思われるからだ」といった言葉は、伝えなかった。

理由は二つある。医者の言葉が、まだ、はっきりと理解できないことが一つと、もう一つは、わからないなりに、それが、私と彼の関係に、どこかで結びついているような気がしているからだ。

堀江先生は、頭の切れる立派な方である。政治家というと、ひたすら押しの強い、非理知的な人間を考えるし、そうした政治家も多い。しかし、先生は違う。芸術に対する理解も深いし、そのことが、かえって、先生の弱点になっているくらいだ。私は、そんな先生を、信頼し、尊敬しているが、それでも、私と彼の関係は、先生に知られたくないし、話そうとも思わない。二人の関係は、誰にも秘密だ。それは、絶対に守っていくつもりで、私はいる。

石崎が、東京に帰ってからの毎日は、読んでいて、面白いものでは、なかった。

彼が、堀江正志の秘書としての毎日を送っているわけで、会った相手の名前や、用件などを、書きつけてあるだけだからである。事件に、それが絡んでいるのなら、十津川も、興味を持って読むのだが、今度の事件は、違う筈である。

もちろん、石崎は、アメリカで療養生活を送っている正彦のことを心配する言葉を、毎日のように、書きつけてはいるが、正彦が、どうしているかは、よくわからないのである。

十津川は、どんどん飛ばしていった。

二十年前に、東京で、連続殺人が起きた頃の日付のページを、探していった。

二冊目の中ほどから、第一の殺人事件が始まっているのだが、この頃、堀江正彦は、病気が治って、日本に帰っていた。

彼が、日本に帰った日、石崎は、空港に迎えに行ったと、書いている。

第一の殺人が起きる約一ケ月前だった。その日の日記は、次のように、書かれていた。

六月三十日

梅雨空の中から、彼を乗せた飛行機が舞いおりて来た時、私の胸は、喜びと、不安で、高鳴った。八ケ月ぶりに、彼に会えるのだ。だが、本当に、病気は、完治しているのだろうか？　もし、日本で再発したら、大変なことになる。

税関の手続きをすませて、出て来た彼は、陽焼けして、丈夫そうだった。日本に帰る途中、ハワイで一週間過ごして来たからだろう。私を見ると、白い歯を見せて、ニッと笑った。それを見て、私は、ほっとした。これなら、大丈夫だと思ったからだ。

私の車で、彼を、ご自宅まで送ったのだが、その間、彼は、私に心配かけてすまなかったといい、これからは、父の後を継げるようになりたいと、しきりに、繰り返した。

「僕は最近、政治の世界にも、興味を感じているんだ。どんどん、勉強もするし、父を見習って、実際の日本の政治のことも知りたいと、思っているんだ」と、彼は、熱心に、いい続けた。

きっと、堀江先生は、喜ばれるだろう。今までは、どちらかというと、彼は、父である先生の生き方に、反撥しているようなところが、あったからである。

「先生も、お喜びになりますよ」と、私は、いった。が、彼が、あまりにも熱心に、政治を勉強したいと繰り返すので、私は、次第に不安になってきた。

あまりにも、使命感に燃えると、それに振り廻さ

れてしまうからである。義務感に、押し潰されてしまうのだ。彼なら大丈夫だろうが、病気のことがある。

「のんびりやって下さい」と、私は、彼にいった。

六月三十日のこの記述のように、日本に帰った堀江正彦は、将来、父のあとを継いで、政治家になる決意をかためたらしい。

この時、突然、そうなったのではなく、前から、政治家への希望を持っていたのが、ここに来て、一層強くなったようである。

当然、石崎の日記にも、正彦のそうした動きが、克明に、書かれるようになってくる。石崎も、堀江代議士の秘書として、正彦の決意は、嬉しかったに違いないし、その気持が、日記の文章に、表われていた。

七月二日

堀江先生が、今日から三日間、山陰を廻って、時局講演をされる。秘書として、私と児玉さんが同行することになったが、正彦さんも、志願して、行動を共にすることになった。いよいよ、正彦さんは、政界への第一歩を、こうした形で、とることにしたのだろう。

アメリカの大学は、中途退学ということにするらしい。が、日本の政界では、学歴は、さほど武器にはならないし、アメリカに留学していて、英語が堪能だということは、これからの政治家にとって、プラスになることは、間違いない。

今日は、鳥取だった。

正彦さんは、ひたすら、動き廻っていた。他の人間が休んでいる時でも、彼は、働いていたと思う。

「僕は必ず、大臣になる。いや、目ざすのは総理大臣だ。そのためには、自分を鍛えなければいけない。他人と同じことをやっていたんでは、上に立つ人間にはなれないからね」

と、彼は、私に、いった。

先生は、それを人から聞いて、とても喜んでおられたが、私は、心配だ。彼が、少し気負い過ぎているからである。アメリカでのことが、彼を、必要以上に気負わせているのかも知れない。それだけに、なお、不安なのだ。

彼は、男らしくなりたいとも、しきりに、いっている。そのことも、私を不安にさせる。

七月三日

今日は、移動して米子で、昼と夜、二回の講演会が、あった。

私たちも夜おそく、疲れ切って、ホテルへ帰ったのだが、彼は、そのあと、日本の何人かの政治家について書かれた本に、読みふけっている。

少し異常だ。

石崎が、異常だと、日記に書きつけているくらいだから、正彦の行動は、かなり突きつめたものがあったに違いない。

ここに見えているのは、父の期待に、何とかして応えようとする子供という図式である。しかも、この子供は、婦女暴行事件を起こし、アメリカの精神病院で、治療を受けたことがある。それだけに、人一倍、励もうとするのだろうか。

そうした正彦の奮闘ぶりが、三日目も書きつけられている。

三日目の七月四日は、正彦が、とうとう疲れ切って、倒れ、救急車で運ばれたと、書いてあった。原因は、疲労である。それだけ、正彦が、緊張していたのだろう。

東京に帰って来てからも、正彦の努力は、続いていたようである。

そうした正彦の姿を、石崎は、時には、「立派」と書き、「頭が下がる」と、しながら、同時に、「痛々しい」と、書いたり、「心配だ」と、危ぶんだりして

いる。それは、恋人を見る眼のように、十津川には、思えた。

正彦の父親、堀江代議士は、息子のそうした態度を、喜んでいたようである。

石崎の日記によれば、堀江は、

「これなら、私の後を継いでくれそうだ」と、「嬉しそうに呟いた」り、誇らしげに、友人に、息子を、紹介したりしていたらしい。

石崎にとっては、そんな堀江代議士の喜びようが、また、不安でもあったらしく、七月七日には、日記に、次のように、記している。

七月七日

今日も、堀江先生は、パーティで、自慢げに、彼を、K大臣に紹介していた。多分、新聞は、微笑えましい親心と書くだろう。島根の後援会の人たちも、先生に、良い後継者が出来たといって、喜んでいて、彼への激励の手紙が、殺到するようになった。彼は、若くハンサムで、新しい政治家のイメージに、ぴったりだからだろう。

私だって、彼が、立派な政治家になってくれることが、嬉しくないことはない。そして、私が、彼の第一秘書として、一緒に働けることが、願いでもある。

だが、最近の彼を見ていると、無理をしているのが、よくわかるのだ。彼の神経は、政治家になるには、繊細すぎるような気がしてならない。優しく、女性的なのだ。それなのに、先生や、地元の期待に応えようと、無理をしている。全く、違った人間になろうとしている。このまま、続けていたら、いや、なお一層努力しようとしていたら、いつか、緊張の糸が切れてしまうのではないかと思う。それが、心配でならない。いつか、また――

そのあとに何を書こうとしたのか、十津川には想像がつく。

また、婦女暴行事件を起こすのではないかと、石崎は不安だったに違いないのである。

このあと、日記は、いよいよ、二十年前の連続殺人事件に、かかってくる。

その前に、気になる記述があった。たった一行、次のように書かれた文字だった。

事件が起きてしまった

これだけである。しかも、ここから、日付が、全部、消されていた。あとになって、日付を確認されるのを嫌がったのだろうか。

従って、日比谷公園で起きた第一の殺人事件についても、記述はあるのだが、日付は、消してある。日記の印刷された月日を、丁寧に、黒く、塗り潰していた。

○月○日

小雨の中を、彼が、車に乗って、出かけて行った。どこへ行くのかはわからないが、何をしに行くのか、想像はついた。だが、私には、それを制止することが出来ない。

私が、止めて、争うことになれば、彼は、秘密を知られたことで絶望し、自殺しかねないからだ。

そんな真似は、私には出来ない。彼を失うことは絶対に出来ないのだ。

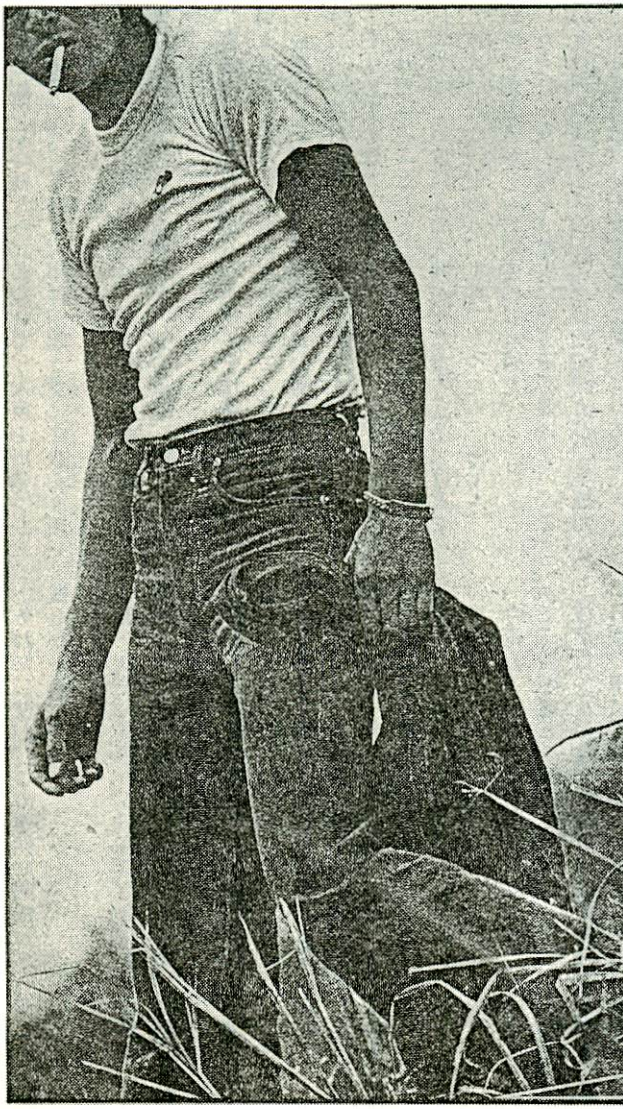
私は、私に出来ることをするしかなかった。派手な自分の車で、彼のあとを追っけ、事件の疑惑を、私の車に向けさせることだ。

だから、今夜も、赤いポルシェで、彼の車を尾行した。

彼が出かけたのは、H公園だった。彼は、車を降りて、小雨の中を、公園の暗がりに入って行った。

私も、ポルシェをとめ、彼のあとを追ったが、見失った。

私は、必死で、H公園の中を歩き廻った。彼が、



事件を起こしかけたら、かくれて、大声を出すつもりである。そうすれば、事件が起きずにすむかも知れないのだ。

だが、どうしても、彼は、見つからなかった。大通りに戻ると、いつの間にか、彼の車は、消えていた。

事件は、起きたのだろうか？　それを確認できないままに、私は、自分のポルシェで、帰宅した。

最終のテレビのニュースが、H公園の暗がりで、やはり、事件が起きたことを、伝えた。

一人の若い女が、死んだ。

それだけのことだと、私は、自分にいい聞かせた。日本で、一日に何人の人間が死ぬだろう？　百人や二百人ではないだろう。世界でだったら、何千人、いや、何万人が、一日の中に死ぬ筈だ。

たった一人の死を、重大に考える必要はない。この女は、ひょっとすると、今日死んだ方が、幸福だったかも知れないのだ。そうに決っている。

それに、彼が、この事件に関係しているという証拠もないのだ。

第一の殺人事件から、第二の事件までの間に、一週間あった筈である。しかし、その間、石崎の日記は、空白になっていた。

何も書くことがなかったとは、思われない。多分、書くことが、怖かったのだろう。書けば、正彦に対する疑惑が、深まってしまうからに違いない。

それでも、新宿西口の中央公園で起きた第二の事件のことは、きちんと、書いてあった。これも、月日を消してである。

○月○日

今夜も、彼が、車で出かけた。私も、赤いポルシェで、彼のあとを追っけた。

彼が行ったのは、新宿西口の中央公園だった。暗い公園の中に、若いカップルが、その暗さを楽しむ

ように、肩を寄せ合って、歩いている。

車から降りた彼は、ズボンのポケットに両手を突っ込み、肩をすぼめて、のろのろと、公園の中を歩いていた。先生の後継者として、颯爽と動き廻っていた姿は、そこにはない。まるで、人生の敗残者といった後姿だ。なぜ、そんな姿をして、公園の暗がりを、歩かなければならないのだろう。それを聞きたいと思うが、私には、怖くて、出来ない。

十分、二十分と、彼は、歩き廻っていた。

突然、酔っ払いが、私に絡んできた。それに、気を取られている隙に、彼の姿が、消えてしまった。

私は、必死になって、彼を探した。アベックが、私を睨んだりした。が、彼は、見つからなかった。

彼の車も、消えている。

私は、自分のポルシェに戻り、しばらくの間、運転席に、座っていた。深い疲労が、私を襲っていた。精神的な疲労感だ。何も起きてなければいいと思う。だが、多分——

やはり、中央公園で、第二の殺人事件が、起きてしまっていた。

テレビも、新聞も、前の事件との関係で、連続殺人事件、それも、若い女を狙った連続殺人と、騒ぎ始めた。

ただ、警察は、今のところ、東京都内の変質者を、洗っているようなので、一安心だ。

絶対に、彼に、警察の疑いを向けてはならない。彼を、守ってやらなければならないのだ。堀江先生に誓ったからではない。自分自身に誓ったからだ。

その中に、警察は、二度とも現場にいた私の赤いポルシェを、問題にするだろう。彼が疑われるくらいなら、私が、マークされる方がいい。

ここでも、石崎は、堀江正彦を、犯人とは、断定していない。だから、これだけの記述では、十津川も、正彦を、犯人と決めつけるわけには、いかなかった。

第三の殺人事件は、次のように、書かれてあった。

○月○日

今夜は、出かけないでいて欲しいと思った。いや、念じた。彼が、出かけることがなく、連続殺人事件が起きれば、私の疑いも、消えてくれるのだ。

先生が、彼に、何か大事な仕事をいいつけて、今日一日、拘束してくれればいいと願ったが、それも、駄目だった。たまの休みだから、ゆっくり休みなさいと、先生は、彼にも、私にも、いったのだ。

今日は、まだ陽がある中に、彼は、車で家を出た。私も、ポルシェで追った。前の二回の時より、早く家を出ているので、今日は、違うのではないかと、私は、淡い期待を持っていた。

彼の車は、最初、東京都内を、あてどなく走り廻っている感じだった。

最後に、彼は、京王多摩川の近くに車をとめた。釣りでも楽しむのならと思ったが、そんな甘い期待は、最初から、無駄だったのだ。

彼は、車から降りて、河原の方に、歩いて行く。

私も、車を止めたが、少し離れて止めたために、彼は、素早く、姿を消してしまった。

私は、あわてて、駆け出した。周囲が、暗くなっていた。

長く続く土手の上に、車が、とめてあるのが見えた。アベックが、車の中で、楽しんでいるのだろう。遠くで、悲鳴が聞こえたような気がして、私は、そちらに向って、駆けた。車が一台、とまっていた。

私は、車内をのぞいてみた。男が、血走った眼で、私を見て、何か叫んだ。助手席は、背もたれを倒してある。香水の匂いがした。

私は、一瞬にして、事態を理解した。この男は、女と、車の中で、よろしくやっていたのだ。そこへ、暴漢が現れ、男を殴りつけ、女を連れ去ったに違いない。

男は、私を、その犯人と間違えているのか、何か叫びながら、手を伸して、つかみかかって来た。

私は、男を殴りつけた。相手が、私のことを犯人と思っても構わない。それならそれで、彼が、疑われずに、すむだろう。

男は、簡単に、気を失った。私は、土手を走り廻り、河原を探した。が、彼は、見つからなかった。

私は、絶望を覚えた。

やはり、第三の事件が、起きていた。

あの河原で、女の死体が、見つかった。私が殴った男と、車の中で楽しんでいたところを、犯人に、連れ去られ、殺されたのだ。

テレビは、ニュースで騒ぎ、新聞は、またも若い女を狙った殺人が起きたと、書き立てている。

この事件の時にも、石崎は、正彦が、犯人とは、断定していない。恐らく、断定するに忍びなかったのだろう。

ただ、この日記を読んで、初めてわかったこともある。

二十年前、事件の時、殺された女と一緒にいた男は、犯人と思われる男に殴られたと証言して、当時の警察は、それを犯人と断定していたのだが、殴ったのは、石崎と、わかったことである。

石崎は、この事件の前に、自分の赤いポルシェを、白いポルシェに、買い替えているが、それについては、この日の記録の少し前に次のように、書いていた。

今日、新しいポルシェが来て、古いポルシェを引き取って行った。新しいポルシェは、色が白である。

警察は、明らかに、赤いポルシェの男を、犯人と見て、捜査している。私の所属しているポルシェ愛好グループJPCにも、警察の問い合せがあったからだ。その中に、必ず、私のところに、警察が、やってくるだろう。

だから、白いポルシェに買い替えたというのは違う。警察は、あわてて、警察をごまかすために、私がやったと思うだろうが、そう思われてもいい。

いや、そう思われることを予期して、私は、わざと、白いポルシェに買い替えたのだ。別に、きれいごとをいっているわけではない。警察が、私に疑いの眼を向けている限り、彼は、安全だからだ。

彼のためなら、どんなことでもしてやりたいし、彼のために、自分が、警察に疑われていることに、マゾヒズムに近い、甘美な気分を覚えるのだ。

石崎のこの予想どおり、当時、警察は、彼に、疑惑の眼を向け、犯人だから、あわてて、赤いポルシェを、白い新車と買い替えたと思い込んだのである。

あの時、警察は、石崎が、必死になって、堀江正彦を守ろうとしていることに、気付かなかったのだ。

このあと、日記は、最後の事件についての記述になっていく。石崎が、逮捕された事件である。この第四の事件の場合も、正確な月日は消されている。

○月○日

彼は、明らかに病気だ。心の病気だが、身体も、痛んでしまっているように見える。顔が、いつも、青白く、疲れ切っているのが、わかるのだが、彼は、逆に、無茶苦茶に、仕事をしている。まるで、意地になって、自分を虐めているみたいだ。

それで、疲れ切ってくれてしまえばいいのだが、違うらしい。神経が、逆に高ぶってしまって、眠れないのだろう。彼は、いよいよ焦ら立っているのだが、私には、どうすることもできない。

武器

○日記の続き

彼を外出させないために、いろいろな手段を、私は、考えてみた。車を故障させてしまうこと、下剤を飲ませて、身体を弱らせてしまうことなどである。

しかし、私は、何も出来なかった。怖かったのだ。彼が、それを知った時、私を憎むだろう。それが、怖かったのだ。

だから、今日も、彼が、車で出かけて行くのを、制止することが出来ず、ただ、レンタ・カーのセリカで、追うより仕方がなかった。

今夜は、代々木だった。神宮外苑の暗がりを、彼は、まるで、獲物を求めるハンターみたいに、ゆっくりと、車を走らせた。だが、恐らく、彼の眼は、ハンターのように輝いてはいなかったに違いない。暗く、沈んでいるに違いないのだ。

それなのに、なぜ、彼は、今日も、暗がりを彷徨していたのか。

事件が、また起きれば、警察の捜査は、一層、厳しくなるだろう。私が、防波堤になっていても、ひょっとして、彼に、疑いの眼が向くかも知れない。絶対に、そんなことがあっては、ならないのだ。彼は、常に、明るく、逞しい青年で、光り輝いていなければいけないからだ。

だから、今夜は、何とか、彼に気付かれずに、事件を防ぎたかった。そのためには、今夜は、彼を見失うまいと、思ったのだが。

駄目だった。彼が、車をとめ、こちらに向って歩いて来た時、私は、見つけられてはまずいと思い、あわてて、運転席で、身体を沈めてしまった。

身体を起こした時、彼の姿は、もう、神宮の林の中に、消えてしまっていた。

私は、あわてて、車から降り、彼の姿を探し廻った。

そして、女の悲鳴。私は、暗闇の中に飛び込んだ。草むらに、若い女の死体が、横たわっていた。

とうとう、第四の事件が、起きてしまったかと思った時、刑事が、駆けつけて、私は、逮捕された。

警察も、馬鹿ではない。今日も、警戒に当っていたのだろう。

私は、連行されたが、平気だった。いや、自分が、捕まったことに、満足だった。警察が、私に疑いの目を向けている限り、彼は、無事だからだ。

私が、堀江先生の秘書だというと、刑事たちは、びっくりしていた。そんなことは、どうでもいい。ただ、彼に、災いが及ばなければ、私はいいのだ。

予想どおり、私は、釈放された。が、刑事たちが、いぜんとして、私を、疑っていることは、間違いない。特に、ある警部が、私を犯人と確信しているようだった。ご苦労さんだと思う。

あなたは、間違っているのだ。

日記は、このあと、石崎の死の直前まで続いていた。

この頃、警察の眼は、主に、都内の変質者に向けられていた筈だが、小坂井警部と、彼の部下の佐々木刑事の二人だけが、石崎に、疑惑の眼を向けていたのである。

小坂井は、ポルシェの線から、石崎を疑い、彼のポルシェを追いかけ、神宮外苑での第四の事件の時、現行犯の形で、彼を、逮捕したのである。

小坂井や、佐々木の訊問は、峻烈だったと思うのだが、石崎の日記には、それに対する怒りの表現は、少なかった。

多分に、覚悟して行動していたからだろうし、自分が、堀江正彦の防波堤になっていることが、嬉しかったせいもあるだろう。

小坂井や佐々木は、上からの圧力によって、石崎

を、釈放した。

その点については、石崎は、こんな風に、書いていた。

釈放されて帰ったあと、秘書仲間が、お祝いのパーティを開いてくれた。その時、堀江先生が、警察に圧力をかけてくれたことを聞かされた。

「先生のご恩を忘れたらいかんぞ」と、Sさんが、何度もいった。私は、複雑な気持だった。先生は、本当に、私が、連続殺人事件の犯人だと思っているのだろうか？

そんな筈はなかった。先生は、正彦さんの病気のことを知っているからだ。知っていれば、私を疑うより、まず、彼を疑ったに違いないのだ。

「正彦さんは、どうしています？」と、私は、Sさんに聞いた。どうしても、彼のことが、気になったからだ。

「もう一度、アメリカで、勉強したいと、いわれているらしいよ。先生も、近日中に、また、正彦さんを、アメリカへ行かせるんじゃないかな」

と、Sさんは、いった。やはり、先生も、彼を疑い、アメリカへ逃がす気でいるのだ。私は、ほっとすると同時に、無性に寂しい気持にもなった。私は、一言でいいから、彼から、感謝の言葉をかけて欲しかったからだ。

堀江正彦は、このパーティの翌日、再び、アメリカへ出発している。考えてみると、二十年前のこの頃、警察は、全く、彼に対して、疑惑の眼を向けていなかったのである。

石崎は、空港へ、彼を送っているが、その時のことを、次のように、書きつけていた。

彼が、私の手をつかんで、「ありがとう」と、いった。

私は、その瞬間、感激で、身体が、ふるえた。彼

は、やはり、私が彼のために尽くしていることを、わかってくれていたのだ。
私は、これで、もう、彼のために、死んでもいいと、思った。

（死んでもいい）
と、いう言葉が、十津川の胸を打った。石崎は、本当に、そう思っていたに違いなかったからである。
（とすると、石崎は、最後には、堀江正彦の秘密を守るために、自ら、命を絶ったのだろうか？）
十津川は、そんな疑問を持ちながら、なおもページを繰っていった。
石崎は、警察が、自分を疑い、逮捕したことに抗議して、自殺したことになっている。
警察も、二十年前、彼が、抗議の自殺をしたと考え、それに対して、謝罪を、発表していた。
小坂井と、佐々木が、石崎の死を、どう考えていたかは、はっきりしない。が、推測することは、可能だ。
最初、二人は、石崎を、犯人と信じていたから、釈放されたものの、自責の念にかられて、自殺したのだと、考えていたと思われる。
しかし、その後、小坂井は、石崎は、シロだという考えに、変ってきている。誰かをかばっていると、思い始めたのだ。そうなった時、自責の念からの自殺とは、考えられないから、ひょっとして、石崎も、殺されたのではないかと、疑い始めたに、違いないのである。
それなら、事実は、どうなのだろうか？
十津川は、憤重に、日記を、読み進めていった。
果して、死を予感させるような言葉が、書かれているかどうか、それを、知りたかったからである。
石崎は、空港で、正彦と握手した時、死んでもいいと、書いているが、その後、日記に、「死」という言葉は、使われていない。
日記に出てくるのは、アメリカへ戻った正彦のこ

とを、心配する言葉だけである。

堀江代議士が、息子を、再び、アメリカの病院へ入れたかどうか、定かではない。が、周囲の眼から、隠すためにも、再度、入院させたであろうことは、想像がつくのだ。

石崎が死ぬ五日前の日記は、こんな文章だった。

アメリカから、彼の手紙が届いた。絵ハガキの簡単なものだったが、私は、ほっとすると同時に、嬉しくもあった。文面は、ひどくあっさりしたもので、元気にやっているから、安心して欲しい。また、一緒にテニスをしたいとしか書かれていなかった。

しかし、私は、その簡単な文章を、繰り返し読みながら、空港で別れる時、彼のいった「ありがとう」という言葉を思い出していた。その語調や、握手した時の感触をである。

あの時、彼は、私が、自分のために疑われていること、それに喜びを感じていることをわかってくれていたに違いないのだ。

そこに、自殺を予感させる言葉は、見当らなかった。

石崎は、釈放されたが、いぜんとして、小坂井警部と、佐々木刑事は、彼を疑っていた筈である。だが、だからといって、石崎が、抗議の自殺をするとは、十津川は、考えられなくなってきた。

なぜなら、石崎の日記を読むと、彼は、覚悟して、堀江正彦の防波堤になっている。わざと、目立つ赤いポルシェに乗って、現場に行き、警察の疑惑を、自分に向けさせようとさえしていたのである。

もし、そうだとすると、警察に逮捕されたのは、予定の行動だったとさえいえるのだ。

石崎は、その時、声高に抗議はしているが、それは、そうした方がいいからで、警察の逮捕に、本心で、腹を立てていたとは、思えないのだ。

赤いポルシェを、白いポルシェに、買い替えたこ

とも、日記には、「犯人なら、そうするに違いない」と、思ったからだと、書かれている。警察は、それを、犯人だから、犯行をくらますための行動と考えたのだが、本当は、警察の疑いを、より強く、自分に向けさせるためだったのだ。

こう考えると、釈放されたあと、小坂井と佐々木が、執拗に追いかけていたとしても、抗議の自殺をするのは、おかしいのである。抗議は、ジェスチュアに違いないのだから。

（誰かが、石崎を殺したのではなかったのか？）

と、十津川は、思わざるを得なくなってきた。

堀江正彦は、アメリカに戻っているし、正彦と、石崎の間には、「愛」があった。石崎に感謝はしても、自殺に見せかけて、殺したりはしないだろう。

と、すると、浮んで来るのは、二十年後、佐々木元刑事を殺した勢力である。直接、佐々木を殺したのは、チンピラだったが、それを指示した者がいた筈である。

その人間は、佐々木の娘季見子も襲い、小樽で、行商の女も殺している。

そこに感じられるのは、堀江代議士の名誉を守ろうとする狂的ともいえる意志である。そして、二十年後の今、その堀江が亡くなったのに、いぜんとして、その狂的な意志は、続いているように見える。

二十年前、その人物或いはグループは、石崎を危険な人間と考え、自殺に見せかけて、殺したに違いないと、十津川は、考えた。

石崎に、抗議の手紙を書かせるのは、楽だったと思う。石崎は、警察の疑いを、堀江正彦でなく、自分に向けさせようとしていたからである。君が、抗議の手紙を書けば、警察も困惑するだろうといわれれば、必ず、書いたと、思われるのだ。

今も生き続けているその力を、十津川は、今、叩き潰してやりたくなった。

当面の標的は、二世代議士の堀江正彦である。

もちろん、彼を標的にして、捜査を進めていけば、

彼を敵に廻すだけではすまないことは、よくわかっている。

前の堀江代議士の時代から、利害関係で結びついているいくつもの勢力があり、彼等は、二世の正彦にも、その利害を持続していこうとしている。そんな連中にとって、十津川の動きは、ひどく、目障りに映るだろう。

それに、堀江親子の名誉を守るために、殺人を犯した人間は、今度も、力で、十津川を押さえ込もうとするかも知れない。その人間にとって、堀江正彦が逮捕されることは、自分の死にもつながるから、猛然と、牙をむいてくるに決っている。

更に、十津川の働いている警視庁の内部にも、彼の行動を、快く思わずに、ブレーキをかけようとする人間が出て来ることを、覚悟しておかなければなるまい。

現役の政治家が、相手では、上司の三上刑事部長などは、必ず、逃げ腰になるに決っている。つまり、今度の事件では、十津川は、上司の庇護は、期待できないのだ。

そして、十津川が持っている武器は、石崎の日記だけである。

しかも、この日記には、堀江正彦が犯人と、断定されているわけではない。犯人ではないかという指摘だけである。

果して、それが、武器となり得るものなのかどうか、わからなかった。

十津川は、石崎の日記を借りて帰って、亀井にだけ、見せた。亀井と一緒に、戦わなければならないからである。

亀井は、二度、三度と、石崎の日記を、読み返した。

「カメさんの意見を、聞かせて欲しいんだよ。これで、堀江正彦の逮捕にまで持っていけると思うかどうかをね」

と、十津川は、いった。

「まさか、警部は、これ一つで、彼を逮捕できると、お考えになっているわけじゃないんでしょう？」
　亀井は、遠慮のないいい方をした。
「もちろん、これを、上の方に見せたって、堀江正彦の逮捕状など、出ないことは、わかっているよ。石崎は、正彦を犯人と断定はしていないし、これは、石崎の妄想の所産だといわれてしまうだろうからね。何といっても、相手は、政治家だし、しかも、大物政治家だった堀江正志の一人息子だからね」
「それだけ、わかっていらっしゃるなら、何とかなるかも知れないと思います。こちらの強みは、この日記を、持っていることと、相手が、その中身を、知らないことです」
　と、亀井は、いった。
「相手に、勝手に想像させるか？」
「そうです。まず、堀江正彦が、動揺するでしょう。それが、連鎖反応で、広がっていくのを見てみようじゃありませんか？」
　十津川は、議員会館に電話をかけ、堀江正彦に、会いたい旨を告げた。
　断わられたら、マスコミへの発表で、圧力をかけてもいいと考えていたのだが、意外に、すんなりと、会ってもいいという返事だった。
「堀江正彦が、自信を持っているので、会ってもいいといったのか、それとも、こちらの手の内を知りたいためなのか、どちらですかね？」
　と、亀井は、車で、十津川と一緒に、議員会館に向いながら、首をかしげていた。
「その両方だろうな。二十一世紀の政治家などと、持ち上げられて、自信満々だが、それでも、警察が動いていることには、敏感なのさ」
　と、十津川は、いった。
「彼の病気は、完全に、治っているんでしょうか？」
「私は、治っていると思っているよ」
　と、十津川は、いった。
「それは、選挙で、当選できたからですか？」

「それもあるが、父親の堀江正志が、亡くなったことがあると、私は、思っているんだ。正彦は、父親のようになりたいと、望んでいた。が、父親が、偉大すぎたんじゃないかな。正彦にとってという意味だよ。それが、絶えず、大きな圧力になって、のしかかっていたんじゃないか。それが取り除かれたんだからね」

「父親の圧力ですか？」

「これは、あくまでも、推理でしかないんだがね。正彦が、死んだ石崎と、ホモの感情で結ばれていたとする。石崎は、それを、大事にしたいと思っていたらしいが、正彦の方は、どうだったのかね。彼は、絶えず、父親のようになりたいと思っていたとすると、ホモというのは、許されざることだったろう。現在の日本で、ホモとわかって、政界に出られるだろうか？　少くとも、父親の正志の後は、継げないだろうね。正彦は、自分のホモの感情を、何とかして、治そうとしたんじゃないか。それも、強引にだよ」

「若い女を、襲うことによってですか？」

「ああ、レイプでも構わない。女を犯すことが出来れば、自分のホモが治るのではないか、そう思っていたんじゃないのかな。父親から寄せられる期待に、応えようとして、極端な行動に走ってしまったんじゃないのか。そう考えているんだがね」

と、十津川は、いった。

「襲われた女たちが、いずれも、殺されているところをみると、正彦の行動は、常に、失敗していたようですね？」

「いきなり襲われれば、女性が悲鳴をあげて、抵抗するのは、当然だよ。正彦は、一層、かっとして、どうしていいかわからなくなって、相手を殺してしまったんじゃないかね」

と、十津川は、いった。

もちろん、こうしたことは、全て、十津川の推理でしかない。正彦は、否定するだろうし、二十年た

った今、証明するのは、不可能に近い。
堀江正彦とは、議員会館内の彼の部屋で会った。
二十年前には、二十代だった彼も、今は、当然のことながら、四十代の中年である。石崎が、日記の中で、「死んでもいい」とまでいった若さや、美しさは、消えていた。痩身で、運動選手のように敏捷だったというが、今は、太って、貫禄もついている。
(今、石崎が、正彦を見たら、どう感じるだろうか？二十年前と同じように、彼に対して、身の震えるような「愛」を、感じることが出来るだろうか？)
と、十津川は、正彦を見ながら、考えた。
十津川には、同性愛の感情が、正しくは、理解できない。一組の男女の愛情のように、生涯変りない場合もあれば、年月がたって、さめてしまうものなのだろうか？
「何を見ていらっしゃるんですか？」
と、正彦が、微笑しながら、十津川を見た。
「実は、石崎さんのことを、考えていたんですよ」
と、十津川は、いった。
「石崎君？　二十年前に、亡くなったんですよ」
「堀江さんと、同じ年齢ぐらいだったんじゃありませんか？　とすると、石崎さんが、今生きていれば、堀江さんと、同じ四十代だと、思いましてね」
「なぜ、彼のことを、話題にされるのかわかりませんね。彼は、二十年前、警察に抗議して、自殺したんですよ。今になって、悪かったと、反省されているわけですか？」
正彦は、ちょっと、皮肉な眼つきになって、十津川を見、横にいる亀井を見た。
「いや、実は、二十年ぶりに、石崎さんの日記が、見つかりましてね」
と、十津川は、いい、じっと、正彦の顔を見つめた。
「日記？　そんなものを、彼はつけていたんですか？　それなら、僕も、見てみたいですね」
と、正彦は、落ち着いた声で、いった。が、眼は、

ちらちらと、十津川の様子を窺っている感じだった。
「二年間にわたる日記ですので、今、慎重に、眼を通しているところです」
「なぜ、石崎君の日記を、警察が調べるんですか？」
「石崎さんは、警察に抗議して自殺したことになっていますが、真相は、どうだったのか、それは、警察としても、知らなければならないと、思っているからですよ。幸い、見つかった日記には、二十年前の連続殺人事件のことも書いてあるので、真相を知る手掛りになると、期待しています」
語調は、穏やかだが、十津川の言葉は、明らかに挑戦だった。十津川自身も、その積りでいったのだし、正彦も、当然、そう受け取ったに違いない。
だが、正彦は、かえって、微笑を口元に浮べて、
「真相が、明らかになるのは、僕も、大いに歓迎しますよ」
と、いった。
「それを聞いて安心しました」
と、十津川は、いった。
「なぜですか？」
「二十年前の事件を、われわれが掘り返すのは、ひょっとして、お嫌いではないかと思いましてね」
「そんなことはありませんよ。僕は、アメリカで、いろいろなことを勉強しましたが、一番、心に残ったのは、事実を尊重するというアメリカ人の姿勢です。政界に入ってからも、この姿勢は、守って行こうと、考えているんです」
「ぜひ、そうして頂きたいですね」
と、十津川が、いうと、正彦は、肯いてから、
「ただし、事実の尊重は、警察の方にも、要望したいですね」
「わかっています。そのために、われわれは、動いているわけですから」
「しかし、十津川さん。二十年前、警察は、石崎君を、犯人だといって、逮捕しているんですよ。それが間違いで、釈放せざるを得なくなってからも、な

お、執拗に、刑事たちは、石崎君を追い回していた。これは、だれもが知っていることですよ。彼は、それに抗議して、自殺したんじゃなかったんですか？警察が、面子のために、それは違っていたんだ。彼は、勝手に自殺したのが真相だったと発表する気なら、困ったものだと思いますよ。事実は尊重しますが、押しつけられた事実は、真っ平です。それだけは、前もって、申し上げておきたい」

と、正彦は、いった。

「そんなことは、しませんよ」

と、十津川は、いったが、正彦の言葉は、彼の方からの宣戦布告だと、受け取った。

だが、正彦は、あくまでも、穏やかに、

「それを聞いて、安心しましたよ。僕は、日本の警察を信頼していますが、最近は、面子のために、無実の人間を、強引に、罪人にしてしまう例も、聞いていますからねえ。それだけは、気をつけて貰いたいですよ。そうなると、僕も、本気で、警察とケンカをせざるを得なくなりますからね」

と、いったあと、

「僕は、今度、院内の法務委員会に所属することになりましてね。国の根幹は、法律だと思い、自分から、希望したわけです。これで、そちらとも、いろいろと、関係が出てくると思うのでね。今後も、よろしくお願いしますよ」

と、つけ加えた。

議員会館を出ると、亀井が、眉をひそめて、

「ありゃあ、明らかに、脅迫ですよ」

と、十津川に、いった。

「法務委員会の件かい？」

十津川は、笑いながら、いった。

二人は、パトカーに、乗り込んだ。

「そうです。下手なことをすれば、圧力をかけるぞということでしょう。刑事訴訟法の改正について、審議しているところですから」

と、亀井は、いう。

「さっそく、うちの刑事部長あたりに、電話しているかも知れないな」

と、十津川は、冗談まじりに、いったのだが、帰ると、さっそく、三上部長に、呼ばれた。

「堀江代議士に、会いに行ったそうだね？」

と、三上に、いわれた。

思わず、十津川は、苦笑して、

「さっそく、堀江さんから、連絡がありましたか」

「君は、二十年前の石崎事件を、むし返す気でいるのかね？」

「現在、起きている事件の根は、二十年前の連続殺人事件にあります。その関連で、石崎の件も、もう一度、考えてみたいと、思っているんです」

と、十津川は、いった。

「石崎の件は、タブーなんだよ。警察が、追い詰めて、自殺させてしまったと、当時、マスコミに、叩かれたんだ」

「知っています」

「それを、もう一度、むし返すのかね？」

「ひょっとすると、自殺でなく、殺されたのかも知れないと、思うからです」

「それは、君の勝手な推理だろう？　何か証拠でもあるのかね？」

と、三上が、きく。

「石崎の日記が、見つかりました。今、それを、調べているところです」

「日記？　しかし、日記に、誰かに殺されそうだと、書いてあるわけでもないだろう？」

「それは、ありません」

「なら、石崎事件を、掘り返すのは、やめたまえ。藪蛇ということもあるんだ」

「堀江代議士が、何かいったんですか？」

と、十津川は、きいてみた。

「もし、石崎の名誉が傷つけられるようなことがあれば、徹底的に、戦うと、いっていたよ。前の事件で、また、マスコミに叩かれるのは、真っ平だから

ね」
「その点は、大丈夫です」
「石崎の日記のことでも、無理をしたんじゃあるまいね？」
と、三上が、心配そうに、きいた。
「それは、どんなことですか？」
「不正な手段で、手に入れたんじゃあるまいね、ということだよ」
「それはありません。持主の了解を得て入手しました」
と、十津川は、いった。
「日記は、もう、読み終ったのかね？」
と、三上が、きいた。
十津川は、用心深く、
「ざっと、眼を通しましたが、何分にも、主観的な表現が多いので、現在、亀井刑事と二人で、慎重に、検討しているところです」
と、いった。
「結論が出たら、まず、私に報告してくれなければ困るよ。勝手に、マスコミに発表したりするのは、厳禁だ。それは、しっかりと、考えておきたまえ」
「わかりました」
と、十津川は、いった。
彼が、部屋に戻ると、亀井が、笑いながら、
「早速、牽制球ですか？」
「部長のところに、堀江代議士の方から、文句が来たといっていたよ」
「われわれが帰るより先というわけですか？」
「そうらしい」
「それだけ、向うが、石崎の日記の内容を、気にしているということにもなりますね」
「部長は、なるべく、武器として、使って欲しくない口振りだったよ」
と、十津川は、いった。
「いつもの慎重ぶりですか？」
「二十年前、石崎が死んだ時、警察は、マスコミに、

叩かれたからね。無実の人間を、自殺に追い込んだということでね。われわれが、問題をぶり返して、藪蛇になるのを、怖がっているんだよ。部長としては、当然の心配だがね」

「しかし、折角の武器を、使うなといわれるのは、困りますね」

亀井は、心配そうに、いった。

十津川は、笑って、

「部長は、なるべく、波風は立てるなという主義だが、正しいことをやるのに、文句はいわないさ。それに、結果が良ければ、大丈夫だよ。私も、真相究明には、妥協は、しない積りだよ」

と、いった。

「それを聞いて、安心しましたが、これから、どうされますか？　石崎の日記には、堀江正彦を、連続殺人事件の犯人と断定するだけの証言は、書かれていません。これだけで、彼を逮捕することは、不可能でしょう？」

亀井が、きいた。

「そうだね。不可能だよ」

「マスコミに、発表しますか？　そうすれば、政治家の堀江には、大きな痛手になるとは、思いますが」

「それでは、低級な暴露雑誌のやり口と同じになってしまうよ」

と、十津川は、いった。

そんな手段は、取りたくなかった。二十年前の連続殺人事件の真相と、それが、どう、現在につながっているのか、それを、明らかにしたいのだ。

「じっくり考えてみよう」

動く

「カメさん、箱根へ行ってみよう」
と、十津川が、突然、いった。
「堀江正志の別荘で、二十年前に起きた事件のことですか？」
「そうだよ」
「あれも、正彦が犯人だと、お考えですね？」
と、亀井が、きいた。
「カメさんだって、そう思っているだろう？」
「思います。しかし、二十年も前のことですし、事故で片付けられている筈です。今から、掘り起こしても、正彦の犯行だという証拠が出てくるとは、思えませんが」
「わかっているよ」
と、十津川は、笑った。
「すると、正彦に対するデモンストレーションですか？」
亀井が、眼を大きくして、きいた。
「向うさんが動かないから、こっちが動いて、相手の反応を見てみたいんだよ」
と、十津川は、いう。
「向うさんが、動くでしょうか？」
「正彦は、今、ぴりぴりしている筈だよ。彼だけでなく、彼の周辺にいる人間もね。二十年前の事件は、すでに時効だが、彼の場合は、アメリカにいたからね。その間は、時効が中断されるから、正彦が、犯人と証明されれば、殺人罪で、逮捕できるんだよ」
「彼も、当然、それは、知っているでしょうね？」
「もちろんだよ。だから、表面上は、落ち着いて見せているが、内心は、どきどきの筈だ。正彦自身は、動かないだろうが、誰かが、必死で、こちらの動きを監視して、それを、報告していると、私は、思っ

ている」

と、十津川は、自信を持って、いった。

二人は、パトカーに乗って、箱根に行くことにした。覆面パトカーは使わず、わざと、目立つ、普通のパトカーを、使った。

ゆっくりと、走る。

バックミラーを見ていた亀井が、ニヤッとして、

「尾行がつきましたよ。白のブルーバードです」と、十津川に、いった。

十津川は、すぐ、無線で、西本刑事に連絡をとり、その車の持主を、調べて貰うことにした。

二人のパトカーが、東名高速に入って、三十分ほどして、西本から連絡がきた。

「持主の名前は、寺岡順一郎。三十七歳です」

「何をしている男だね？」

「現在、堀江正彦の秘書の一人です。前歴は、新聞記者ですが、そこを、問題を起こして、辞めています」

「やはり、正彦の取り巻きの一人か」

「腕力も強そうです。大学時代、ボクシングをやっていたそうですから」

と、西本が、教えてくれた。

十津川が、無線を切ると、亀井が、車を運転しながら、

「堀江正彦の秘書ですか？」

と、確認するように、きいた。

「そうらしい」

「どうしますか？　途中でとめて、なぜ、尾行するのか、問い詰めてみますか？」

「いや、黙って、尾行させておこう」

と、十津川は、いった。

箱根では、まず、御殿場署に、出向いた。二十年前、事件を扱ったところである。

当時とは、署長も代ってしまっていたが、平田という、五十歳の刑事が、事件のことを、よく覚えていてくれた。

「塚本さんの一人娘の事故死ということで、当時としては、大さわぎになりましたねえ」
と、平田は、二十年前を、振り返って、十津川に、いった。
「他殺と、事故死の両面から、捜査されたようですね？」
「その通りです。結局、他殺の証拠が見つからず、事故死ということで、落ち着いてしまいましたが」
「その捜査の過程で、代議士の堀江正彦さんの名前は、あがってきませんでしたか？」
と、十津川は、きいた。
「ああ、堀江さんの名前は、出ましたよ。当時、亡くなった塚本由美と交際があった男を、全部調べましたが、その中に、堀江代議士の息子さんの名前もありましたから」
「それで、容疑は、どうだったんですか？」
「確か、あの時、塚本由美が、しきりに、モーションをかけていた相手が、堀江正彦さんだったと思いますね。ただ、だからといって、殺すとは、考えられませんでしたのでね。交際期間も、まだ、半月くらいだったと思います。それで、相手を殺すことはないんじゃないかと、いうことになったわけです」
「他に、容疑の濃い人間は、いなかったんですか？」
「若い男女ですからね。容疑があるといえばあったし、ないといえばないということで、結局、事故死になってしまったわけです」
「堀江正彦さんに、その時、会われたんですか？」
と、亀井が、きいた。
「会いました。が、他の関係者と同じですよ。特別に、訊問したわけじゃありません」
「その時、父親の堀江代議士から、何か、いって来ませんでしたか？　うちの息子は、絶対に、何もやっていないといったことですが」
と、十津川が、きいた。
「うちの署長には、電話が入ったようですよ。露骨な圧力といったものではなくて、逆に、息子が、ご

迷惑をおかけするといった丁寧な電話だったらしいですがね」

と、平田は、いった。

（それが、圧力ではないのか）

と、十津川は、思ったが、黙って、立ち上り、窓の外に眼をやった。

警察署の横の道路が、見下せたが、そこに、尾行して来た車が、停っていた。

運転して来た男が、車の外に出て、煙草を吸っている。

亀井も、窓の傍へ来て、十津川と一緒に、見下した。

「寺岡本人でしょうか？」

と、亀井が、小声で、きいた。

「間違いなく、本人だよ。年齢も合っているし、何よりも、誰かに、似ていると思わないかね？」

十津川が、微笑しながら、きいた。

「似ているというと、石崎ですか？」

と、亀井は、じっと、見下していたが、

「なるほど、よく似ていますね」

と、感心したように、いった。

相手が、煙草を吸い終って、身体の位置を変えたので、十津川たちは、窓の傍を離れた。

「どういうことなんですかね？　堀江正彦も、石崎が、好きだったんでしょうか？」

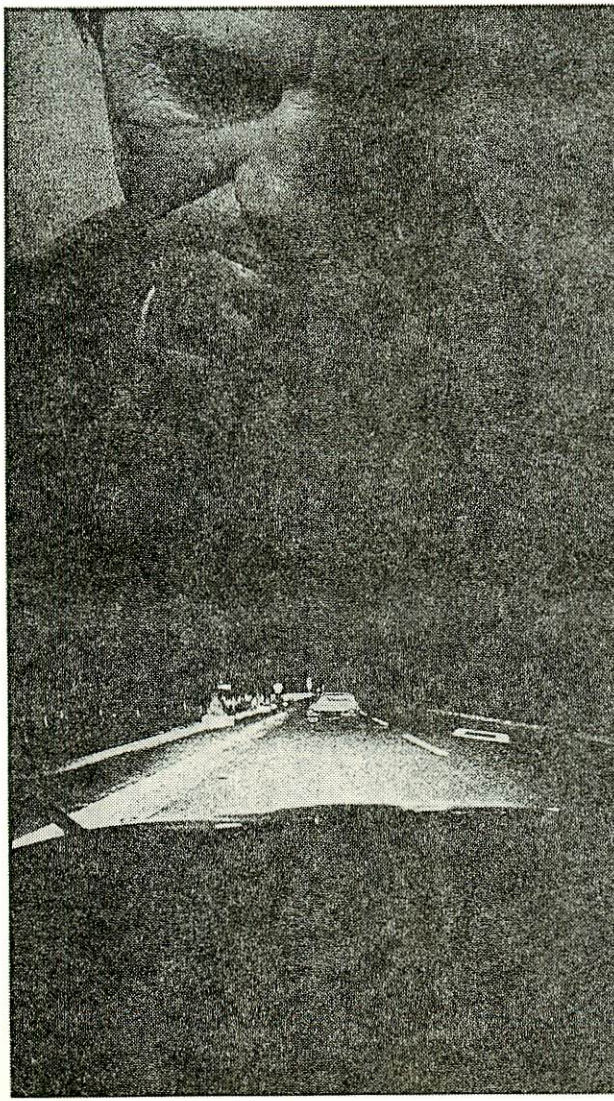
「だから、若い男と遊んでいるところを、写真週刊誌に、撮られて、あわてて、その雑誌の記事を差し止めたりしたんだ。吉岡雅史の顔も、石崎に、そっくりだったよ」

と、十津川は、いった。

「とすると、まだ、石崎に、未練があるということになりますね」

「正彦に、政界への野心がなかったら、父親コンプレックスがなかったら、石崎との間に、一つの純愛物語が、生れたかも知れなかったと思うね。だが、彼は、余りにも、野心が強過ぎたし、父親の期待に

応えたいと、思い過ぎたんだな」
「それで、殺人事件ですか」
と、亀井は、いった。
「それを証明するのは、難しいし、彼に、告白させるのは、なおさら、難しいだろうね」
「しかし、秘書に、石崎によく似た男を採用しているのは、彼の弱点になるんじゃありませんか？」
「かも知れないな」
と、十津川も、肯いた。亀井のいうように、そこから、崩れていくかも知れないが、甘い期待は、持つまいと、十津川は、自分に、いい聞かせていた。
とにかく、相手は、手強いし、二十年前の事件である。
二人は、警察署を出ると、今度は、N新聞の沼津支局に、廻ることにした。
例のブルーバードは、相変らず、尾行してくる。多分、十津川の動きを、全て、正彦に報告するつもりでいるのだろう。
N新聞沼津支局へ来たのも、その尾行を、意識してのことだった。
七、八人の支局だったが、二十年前の事件のことを知っている記者が、三人も、まだ、残っていた。
十津川と、亀井は、この三人のベテラン記者に、事件のことを、聞くことにした。
「まず、当時の現場の様子から、聞かせて下さい」
「今だから話せるということが、あるんですよ」
と、記者の一人が、思わせぶりに、いった。
十津川は、興味を感じて、
「どんなことですか？」
「あの時、すわ、堀江代議士のスキャンダルということで、支局が、色めき立ちましてね。何しろ、大臣経験者の大物政治家の一人息子が、殺人事件に関係しているんじゃないか。それも、若い女を、交通事故に見せかけて殺したらしいという話でしたからね」
「堀江さんの息子の堀江正彦さんのことですね？」



「そうですよ。アメリカ帰りの現代風の青年というんで、ニュースバリューもあると思いましたからね」
「今だからというと、二十年前は、何かブレーキが、かかったんですか？」
と、亀井が、きいた。
「そうです。当時のうちの社主が、堀江さんの属する派閥のリーダー、徳田さんを、総理にしようという会の音頭取りだったんですよ。それで、何となく、ブレーキが、かかってしまいましてね。今は、もう社主も代っていますから、大丈夫ですが」
「あの時、どこまで、調べられたんですか？」
と、十津川が、きいた。
「警察と同じく、必死になって、目撃者探しをやりましたよ。他殺、事故死のどちらともいえない事件だから、切り札は、目撃者だと思いましてね」
「それで、目撃者は、見つかったんですか？」
「見つかりました」
と、記者は、いってから、十津川が、「え？」という顔をすると、手を振って、
「転落する瞬間を見たという目撃者じゃありません。転落する一時間ほど前、現場近くにとまっている車を見たという人間を、見つけたんです」
「それは、間違いなく、転落した車なんですか？」
「まず、間違いありませんね。目撃者は、信頼のおける人物です」
「それで、車内にいた人物は、わかったんですか？」
「若い男と女が、乗っていたと、証言してくれましたよ。車内灯が暗かったので、二人の顔は、はっきりしませんが、女の方は、服装から見て、死んだ塚本由美だったと思いますね」
「男の方は？」
「わかりませんが、堀江正彦の可能性が大きいと思いましたね」
と、記者は、いった。
「しかし、顔は、はっきりしなかったんでしょう？」
「そうですが、目撃者が、車の傍を通り過ぎた時、

男が、英語で何かいったのが聞こえたというのです。日本人離れした鮮やかな英語で」

「英語で、何といったかは、わかっているんですか？」

亀井が、眼を光らせて、きいた。

「確か、君に全てを捧げるみたいなことらしかったですよ。それに、当時、アメリカで流行っていたスラングが入っていたそうです」

と、記者がいう。

「目撃者が、よく、そんな英語が、わかりましたね？」

十津川は、ちょっと妙な気がして、きいた。

記者は、微笑して、

「目撃者のサラリーマンですが、二年間、ニューヨーク支店で働いて、帰国したばかりだったんです。ですから、英語はペラペラだし、当時のアメリカのスラングも、よく知っていたわけです」

「なるほど、それで、了解しました。そんな人が聞いたのなら、日本人離れした英語だったんだろうと、思いますね」

十津川は、納得した。

「それで、被害者塚本由美と親しかった男たちの一人一人に、当ってみたんですよ。誰が、英語がうまいかと思いましてね」

記者は、得意気に、いった。

「誰か、わかりましたか？」

「彼女と、交際のあった五人の男に会いましてね。英語を喋って貰って、それを、ひそかに、録音したわけです。その中には、もちろん、堀江正彦も入っていました」

「結果は、どうだったんですか？」

「図ぬけて、堀江正彦が、上手かったですよ。他の四人は、いわゆる日本人の英語で、ぜんぜん違っていましたね」

「他の四人が、わざと下手な英語を喋っていたということは、なかったんですか？」

十津川は、慎重に、きいた。

「その点も、ぬかりなく、調べましたよ。彼等の仲間にも会って、確認しました。間違いなく、この四人は、英語は、下手だとわかりました」
「そのテープは、目撃者に、聞かせたんですか？」
と、亀井が、きいた。
「もちろん、確認のために、聞いて貰いましたよ。結果は、期待した通りでした。堀江正彦の英語に、よく似ているという証言を得ましたね」
「そのテープは、今も、お持ちですか？」
と、十津川が、きいた。
「それが、もうないんですよ。今もいったように、当時のうちの社の雰囲気が、今と全く違って、堀江代議士を守ろうというものでしたのでね。焼き捨ててしまいましたよ。今になってみると、惜しいことをしたと、思いますがねえ」
その記者は、本当に口惜しそうに、いった。
「目撃者のサラリーマンの名前は、覚えていらっしゃいますか？」
と、十津川がきくと、三人の記者は、顔を見合せて、
「何という名前だったっけなあ――」
「名前は、覚えていませんか？」
「確か、加藤さんという姓でしたね」
と、記者の一人が、いった。
「会社の名前は、どうです？」
これは、亀井が、きいた。
「有名な商事会社の社員でしたよ。そのニューヨーク支店で、二年間働いていたと、いっていましたから」
「箱根には、休暇で来ていたんですか？」
「そうでしょうね」
「その時、何歳だったんですか？」
「三十代でしたね。だから、現在は、五十代の筈です」
と、記者の一人が、いった。
ただ、これだけでは、問題の男を探すのは、難し

そうである。第一、加藤という名前の人間は、沢山いるだろう。

「このことは、警察に、話しましたか？」

と、十津川は、きいた。

記者は、首をすくめて、

「警察に知らせられるんなら、うちの新聞に、発表していますよ」

と、いった。

十津川と、亀井は、礼をいい、支局を出た。

すでに、周囲は、暗くなっている。パトカーに乗り込んで、走りだすと、相変らず、尾行して来る車がある。

「あの目撃者というのは、面白いですね」

亀井が、運転しながら、いった。

「地元の警察も知らなかったとすると、拾い物かも知れないな」

「問題は、二十年たった今、見つけ出せるかどうかですが」

「生きているかどうかも、わからないしね」

と、十津川は、いってから、

「極秘裏に見つけなければいけないね。下手をすると、新しい犠牲者を出しかねないからね」

「あの記者たちが、堀江側に、喋ってしまう恐れは、ありませんか？」

「だから、口止めしておいたんだよ」

と、十津川は、いった。

「しかし、われわれが、探し始めたら、自然に、相手にも、わかってしまうんじゃありませんか？」

亀井が、不安気に、きいた。

「だから、陽動作戦をとろう」

と、十津川が、いった。

「具体的に、どうしますか？」

「カメさんは、西本刑事と、二人で、全く別の人間を、探して欲しいんだ。架空の人間をだよ」

と、十津川は、ニコニコ笑いながら、いった。

「相手が、引っかかってくれるでしょうか？」

亀井が、きいた。
「それは、われわれが、いかにもっともらしく行動するかによるね。それに、しっかりした架空の人間を作れるかどうかにも、かかってくると思うね」
と、十津川は、楽しそうに、いった。
十津川は、東京に戻ると、さっそく、架空の人物の作成にかかった。
その人物は、いかにも、もっともらしい名前を持ち、職業をもっていなければならないだろう。
十津川は、亀井と二人で、この作業を始めた。
「尾行していた寺岡は、われわれが、二十年前の塚本由美の死を、調べているのを、知った筈だ。だから、われわれが、これから探す筈の人間は、あの事件に関係した人間でなければならない」
と、十津川は、いった。
「そうですね」
「やはり、目撃者にするかね？」
「二十年前のあの日、堀江正彦は、自分が、彼女の車の中に一緒にいるのを、誰かに目撃されたのを、知っているでしょうか？」
と、亀井が、きいた。
「加藤という目撃者は、車内灯で、中に、若い男女が乗っているのを見たと、いってるんだ。正彦の方からも、男は、見えただろうね。顔はわからなかったろうが」
「すると、やはり、われわれは、目撃者を探さないと、怪しまれますね」
「そうだ、しかし、加藤という人物を、われわれより先に見つけられては、困るんだ」
「どうしますか？」
「名前は、わからないことにしよう。当時三十代の男で、サラリーマンじゃない方がいいね。商事会社のサラリーマンと、気付かれると困るからだ」
「職業は、何にします？」
「そうだな」
と、十津川は、しばらく考えていたが、

「カメラマンは、どうだろう？　彼は、問題の車の写真を撮って、持っている可能性がある。事件のあった日のね」
「いいですね」
亀井は、ニッコリした。
「あの日、このカメラマンは、何しに箱根に来ていたか？」
「雑誌社に頼まれて、箱根の写真を撮りに行っていたというのは、どうですか？」
「納得は、できるね。その雑誌の名前も、決めておこうか」
「二十年前にあった雑誌ということになりますね」
「これは、調べて、実在の雑誌にしよう」
と、十津川は、いった。
「次は、何を決めます？」
「外見だ。身長一七三センチ。六十五キロ。これで、どうかな？」
「いいかも知れませんね。平均的な身長、体重ですから」
と、亀井は、いった。
国立国会図書館に電話をかけ、二十年前に出版されていた雑誌を、調べて貰った。
その結果、雑誌の名前は、F出版で出していた『現代の日本』にした。
『現代の日本』は、すでに、廃刊されている雑誌である。
日本の風景写真も、よくのせていたから、カメラマンに、箱根の風景写真を依頼しても、おかしくはない。
十津川は、作りあげた「目撃者」を、もう一度、黒板に、書き抜いてみた。
○目撃者
名前はわからないが、二十年前、三十代のカメラマンだった。
雑誌『現代の日本』に頼まれて、箱根の風景写真を撮りに来ていて、事件の日、塚本由美の車と、そ

れに乗っていた若い男女を目撃し、車の写真を撮った。

身長は、一七三センチ、体重は、六十五キロくらいである。

「この人物を、カメさんと、西本刑事で、探して貰うことになる」

と、十津川は、いった。

「西本刑事には、本当のことを、いっておきますか？」

「いや、西本は、感情が表に出る男だから、何も知らせずに、調べさせた方がいいと思うね。迫力が出るから、敵も、信じる筈だ」

と、十津川は、いった。

亀井は、黒板に書かれた文字を、メモ用紙に、写していたが、

「このメモを、西本刑事にも、持たせたいと思います」

「何かに、利用するのかね？」

「私と、西本刑事が、調べ始めれば、必ず、尾行がつくと思います。適当な頃を見はからって、このメモを落とします。向うさんが、拾ってくれれば、確実に、この架空のカメラマンを探すと、思いますね」

と、亀井は、いった。

「わざとらしくなく、出来るかね？」

「やってみます」

と、亀井は、肯いた。

西本刑事を呼んで、十津川は、黒板の文字を、メモさせた。

西本は、ボールペンを動かしながら、

「このカメラマンを見つけ出せれば、われわれの勝ちになるわけですか？」

と、きいた。

「恐らくね。だから、絶対に、見つけ出して貰いたいんだよ」

十津川は、励ますように、いった。どうも、嘘をつくのは、苦手である。

それでも、西本は、亀井と一緒に、架空の目撃者を見つけに、表へ飛び出して行った。

亀井と、西本は、今度は、覆面パトカーで、出かけた。

亀井からは、無線電話で、報告してきた。

――今、神田のF出版に向っています。ここで『現代の日本』のバックナンバーを、見せて貰うつもりです。

「尾行は、ついているかね？」

――同じベンツが、ついて来ています。ちょっと待って下さい。

「どうしたんだ？」

――今、ベンツが消えて、白のソアラと代りました。仲間が、運転しているんだと思いますね。ソアラのナンバーは、××××です。

「わかった。調べてみるが、カメさんの方は、大丈夫か？」

――大丈夫です。F出版に着きましたので、責任者に会って、二十年前の『現代の日本』を、見せて貰います。

「くれぐれも、用心してくれよ」

と、十津川は、いった。

（うまくこちらのエサに、飛びついてくれたらしい）

彼は、日下と、清水の二人の刑事を呼んだ。

この二人には、当時、大きな商事会社のサラリーマンだった加藤という男を、探すように、指示した。

「絶対に、内密に、見つけ出して欲しいんだよ。敵に気付かれたら、この加藤という男が、消されてしまう恐れがあるからだ」

と、十津川は、念を押しておいた。

日下と、清水は、別々に、出て行った。外で、一緒になるのだ。

一時間ほどして、亀井から、連絡が、入った。

――F出版で、『現代の日本』のバックナンバーを、借りました。二十年前の一年間の十二冊です。

「箱根の写真が、のっていたかね？」

「十二冊の中、二冊に、グラビアで、箱根が写してありますよ」
「それなら、敵が、引っ掛かってくれそうだな」
——そう思ったので、F出版の人には、誰かが聞きに来たら、全部、正直に話してくれていいと、いっておきました。
「それで、敵が引っ掛かるかな？」
まだ、十津川は、完全な自信は、持てないのである。自分が考えた案なのにだった。
——大丈夫と思います。
と、亀井は、いった。
F出版で、『現代の日本』のバックナンバーを手に入れた亀井と西本は、今度は、カメラマンたちに、話を聞くことにした。
四谷にあるスタジオに出かけた。ここには、有名なカメラマンの本橋と、若い弟子たちがいた。
「現在、五十何歳かになっているカメラマンを、探していますが」
と、亀井は、相手に、いった。
「二十年前、F出版の頼みで、箱根へ出かけた男なんですがね」
「二十年前ですか？」
相手のカメラマンは、あっけにとられたような表情になった。
毎日が勝負のカメラマンにとって、二十年という、大昔のように思えるのかも知れない。
「そうです。昭和四十年代です」
と、亀井は、いった。
「何があった時かなあ」
「現在、五十代のカメラマンの方なんですが」
亀井は、持って来たメモを、相手に見せた。
「今、五十代で、よく、山の写真を撮る人ねえ」と、相手は考えていたが、
「山脇さんかも知れないなあ」
と、いった。
何も知らない西本刑事が、勢い込んで、

「その人は、今、どこにいますか？」
「自分のスタジオを持ってやっていますよ。もう大家の一人ですからね」
「そのスタジオは、どこにありますか？」
「六本木ですが、山脇さんは、今、中国へ行ってるんじゃないかな」
と、いい、相手は、六本木のスタジオを、教えてくれた。
亀井と、西本は、車で、六本木に廻ることにした。
「この山脇というカメラマンが、われわれの探している人間だったら、事件は、急展開しますね」
西本は、覆面パトカーを運転しながら、張り切って、大声で喋る。
「そうだよ」
と、亀井は、肯いた。バック・ミラーを見ると、さっきの、白いソアラが、くっついて来ていた。
亀井は、手帳を出して、相手のナンバーを、確認した。
問題のスタジオは、六本木の雑居ビルの中にあった。
スタジオの中には、二人の若い男がいたが、その一人が、
「先生は、今、新聞の仕事で、西域の写真を撮りに行っています」
「いつ、帰国されますか？」
と、西本が、きく。彼は、やたらに、張り切っている。
「明後日、帰って来ます」
「山脇さんは、日本の山の写真も撮るんでしょう？」
「ええ、もちろん、沢山、撮っていますよ」
「それは、若い時からですか？」
「先生は、最初から、風景写真を撮っていましたからね」
「これを見て下さい」
と、亀井は、二十年前の『現代の日本』の箱根の写真を、見せた。

「これは、若い時の山脇さんの写真でしょうか？」
と、亀井は、きいてみた。

おとり

二人の若いカメラマンは、じっと、雑誌の写真を見ていたが、
「若い時の先生の写真かも知れないな」
「構図は、先生のものだよ」
と、交互に、いった。
「間違いありませんか」
西本が、念を押した。
「先生自身に、見て貰わないと、何ともいえませんが、多分、先生が、若い時に撮ったものだと思いますね。似たような写真を、見たことがありますから」
と、片方が、いった。
「山脇先生の顔写真があったら、お借り出来ませんか」

亀井が、頼み、写真を、借りることが出来た。
五十二歳だというが、髪を短かくしていて、精悍な感じのする男である。
「身長は、一七〇センチ台ですか？」
と、西本が、きいた。
「一七五、六センチでしょうね。あの年代の人としては、大きい方ですよ」
と、もう一人が、いった。
「明後日、帰国するのは、間違いありませんか？」
亀井が、きいた。
「昨日、国際電話で、先生が、いって来ましたから、間違いないですよ。何時に、成田に着くかは、わかりませんが」
「正確な時間がわかったら、電話して下さい」
と、亀井はいい、こちらの電話番号を、二人に教えた。
「先生が、逮捕されるようなことは、ないんでしょうね？」
と、片方が、心配そうに、いった。
亀井は、安心させるように、微笑して、
「それはありません。山脇さんが、若い時に撮られた写真のことで、お伺いしたいことがあるだけです」
と、いった。
亀井は、戻ると、十津川に、山脇の顔写真を見せた。
十津川は、じっと、その写真を見ていたが、
「これが、われわれの作った目撃者か」
「そうです。ぴったり一致したのが、この山脇というカメラマンです」
「しかし、連中が、本ものの目撃者と思い込んで、この男を、消そうとかかる怖れがあるんじゃないかね」
「大いにありますね」
「大丈夫か？」
「明後日まで、中国で、日本には、帰って来ません。帰国する正確な時間は、電話で、教えてくれること

になっています」
「この人物をおとりにして、連中を逮捕するか？」
「いいですね」
「しかし、それには、あくまでも、この男の安全が第一だがね」
「それは、何とかなると思いますが」
亀井は、楽観的ないい方をしたが、十津川は、逆に、心配になった。
最初は、架空の目撃者を、でっち上げ、彼等が、その人物を探している間に、本当の目撃者を見つけ出したいと、思ったのである。
そのためには、彼等が信用するだけの具体的な人物像を作り上げる必要があると思い、一人のカメラマン像を、持つことにした。
ところが、十津川と亀井の二人で考えた人物にぴったり一致する本物のカメラマンが見つかってしまったというわけである。
亀井は、それを、チャンスとして捕えて、そのカメラマンをおとりにして、彼等を逮捕しようじゃないかという。
それも、事件解決への一つの方法には違いないし、一番、手っ取り早い方法かも知れない。
しかし、果して、カメラマンの安全を確保できるだろうか？
山脇というカメラマンは、現在、中国に行っているが、彼等は、当然、帰国したあと、彼を狙うだろう。
山脇カメラマンが、二十年前の事件の目撃者らしいと思わせたのは、十津川たちなのだが、彼等が、それを頭から信じたとすれば、山脇は、危険なのだ。
十津川は、奇妙な思いに、捕えられていた。
架空の人物を作ろうとして、それに一致した実在の人物がいたことが、成功だったのかどうか、わからなくなってきたからである。
翌日、十津川は、二つのスタジオに、電話をしてみた。

案の定、亀井と、西本の二人が帰ったあと、写真雑誌の編集者と名乗る男が訪ねて来て、山脇カメラマンのことを、いろいろと、聞いて行ったという。

「ぜひ、仕事を頼みたいといって、山脇さんの住所や、帰国する日を、しつこく、聞いて行きましたよ」

と、四谷のスタジオではいい、六本木の山脇スタジオでは、

「先生の顔写真も、持って行きました。『モダン・フォト』という雑誌の編集者だといっていましたね」

と、いった。

「その名前の写真雑誌は、あるんですか？」

「ええ、あります。最近、出た雑誌です。しかし、念のために電話したら、うちでは、先生に仕事を頼む予定はないと、いっていました」

「その件は、内緒にしていて下さい」

と、十津川は、いった。

十津川と亀井の計画した目撃者作りは、成功したことになる。

「これで、嫌でも、山脇カメラマンを、守らざるを得なくなってしまったよ」

と、十津川は、複雑な表情で、亀井に、いった。

今更、山脇カメラマンは、おとりの目撃者だと、彼等に向って、宣言するわけにもいかない。

そんなことをすれば、かえって、逆に彼らは、山脇を、本命だと思い込んでしまうだろう。

「とにかく、二つの線で、行くより仕方がないね」

と、十津川は、いった。

「本物の目撃者を見つけ出すことと、山脇カメラマンを守ることの二つの線ですね」

「二つとも、難しいよ。本物の目撃者は、死んでしまっているかも知れないんだからね。山脇カメラマンのガードも、どこまで守り切れるか、自信が持てない。第一、刑事を張りつけるにしても、相手の山脇カメラマンに、どう説明したらいいのかね？　まさか、あんたを、勝手におとりにしたともいえんだろう」

十津川は、当惑した顔で、いった。
「山脇カメラマンには、何もいわなくていいと思いますよ」
「しかし、われわれが、聞き込みに行ったことは、弟子のカメラマンが、山脇に、話すと思うよ」
「そうですが、強いて、われわれが、事情を説明することもないでしょう。勝手に、ガードして、彼等を、逮捕してしまいましょう。要は、山脇カメラマンの安全が確保され、犯人を逮捕できればいいわけですから」
「そう上手くいけばいいがねえ」
と、十津川は、いった。
万一、山脇カメラマンが、殺されてしまったら、どうなるのか？　勝手に、おとりの獲物にでっちあげていたとわかったら、十津川が辞めるぐらいでは、すまなくなるだろう。
「あと二日間か」
と、十津川は、呟いた。
山脇が、帰国するまでに、あと二日間ある。その間に、二十年前の箱根の事件の目撃者が見つかれば、山脇を、目撃者に仕立てあげる必要はなくなる。
問題は、目撃者が、見つからなかった時である。
「二日間の間に、何とかして、本物の目撃者を見つけ出そうじゃないか」
と、十津川は、自分にいい聞かせる調子でいった。
しかし、難しいのは、聞き込みを、そちらにだけ、向けられないことだった。あくまでも、警察は、山脇カメラマンを、追っているように、見せかけなければならないからである。
山脇カメラマンを、殺されるのも困るが、本物の目撃者を、消されるのも、困るのだ。
十津川は、亀井と、西本には、あくまで、山脇カメラマンのことを調べさせておき、彼自身は、ひそかに、目撃者のサラリーマンを追った。
大手の商事会社を、一つ一つ、当っていった。
しかし、なかなか、それらしい男は、見つからな

い。

あっという間に、二日間が、過ぎてしまった。

十一月二日。

この日の一四時四五分に、上海から成田に着く中国民航機で、山脇カメラマンが、帰国することになった。

本物の目撃者探しは、一休みして、十津川は、山脇を守ることに、当面、全力をつくすことにした。

山脇の弟子二人が、成田へ迎えに行くという。

十津川は、西本たちに、堀江代議士や、彼の周辺の人間の動きを調べるようにいっておいて、彼自身は、亀井と、他に、二人の刑事を連れて、成田に向った。

到着ロビーに入ると、十津川は、素早く、周囲を見廻した。

見覚えのある顔はいなかったが、だからといって、安心はできなかった。相手は、金もあり、力もある。誰かを傭って、山脇を殺させようと、するかも知れないのだ。

中国民航の929便は、十二分ほど遅れて、到着した。

十津川は、降りて来る乗客の中に、山脇の顔を探しながら、奇妙な気分になっていた。

自分たちが、勝手に作りあげた証人である。もちろん、山脇の方は、何も知らないのだ。

その、何も知らない人間を、必死になって、守らなければならない。

山脇の姿が、見えた。

十津川は、亀井と二人だけで、山脇に、近づいた。

弟子たちに、荷物を渡している山脇に、十津川は、警察手帳を見せて、

「十津川といいますが、内密で、お話したいことがあります」

と、いった。

陽焼けした山脇は、眉を寄せて、

「僕は、警察にあれこれいわれるようなことは、や

っていない筈ですがね」
「それは、よくわかっています。とにかく、話を聞いて頂きたいのです」
と、十津川は、いい、自分の乗って来た覆面パトカーに、案内した。
「何のことかわからないが、六本木のスタジオへ行く途中で、聞きましょう」
と、山脇は、いった。
弟子たちの車が、先に走り出し、そのあとを、亀井の運転する覆面パトカーで、十津川と山脇が、追う格好になった。
少し走ったところで、十津川は、うしろを見たが、尾行している車は、見当らなかった。
そのことに、十津川は、軽い疑問を覚えながら、
「私たちは、今、二十年前に起きた殺人事件を、調べています」
と、山脇に、いった。
「二十年前？　とっくに、時効になっているんじゃありませんか？」
山脇が、また、眉を寄せた。
「普通なら時効ですが、犯人と思われる男が、外国へ逃亡していたので、その間、時効が、中断しているのです」
十津川がいうと、山脇は、更に、変な顔をして、
「犯人がわかっているのなら、すぐ、逮捕すれば、いいんじゃないですか」
と、いった。
「そうしたいんですが、証拠がありません」
「僕が、その証拠でも、持っているというんですか？」
「そうです」
「信じられませんねえ」
「山脇さんは、ずっと、風景写真を撮って来られたわけですね？」
「ええ」
「その風景写真の中に、犯人の車が写っている可能

性があるんです。事件は、二十年前、箱根で、起きています。二十年前、箱根周辺の写真を撮ったことは、ありませんか？」

「多分、あるでしょうね。あの辺の風景は、好きですから」

と、山脇は、いう。

「それなら、可能性はありますよ。あなたは、何も知らずに、景色を撮っておられたんだと思いますが、偶然、それに、犯人の車が、入ってしまったんです」

「そんなことが、あったかなあ」

山脇は、考え込んだ。

十津川は、どう話したらいいだろうかと、考えながら、

「偶然、車とか、列車が、入ってしまうことがあるんじゃありませんか？」

と、いった。

答が、ノーとわかっていて、相手に考え込ませるように持っていくのは、難しいし、内心、申しわけない感じがする。

「僕は、車を風景の中に入れる時は、意識して、取り入れますがねえ」

と、山脇は、いった。

「その意識して入れた車かも知れません」

「しかし、問題のあるような車を、写真に撮った覚えは、ありませんがねえ」

「普通のスポーツ・カーなんです。あとになってから、そこにあるのがおかしいということになったのですよ」

と、十津川は、いった。

その車の中に、死んだ塚本由美と、堀江正彦が乗っていたわけだが、そこまでいってしまうと、山脇は、絶対に、撮ってないと、主張することも、考えられた。実際に、山脇は、そんな写真は、撮っていない筈だからである。

「急に、いわれてもねえ」

と、山脇は、いった。

「ゆっくり思い出して下さればいいんです。犯人は、逃げないと思いますからね」
十津川は、微笑した。
車は、六本木に近づいた。十津川は、また背後に、眼をやった。相変らず、尾行されている気配はない。
(おかしいな)
と、十津川は、思い始めた。
山脇が、まだ、中国から帰らない前にも、十津川や、亀井は、執拗に、尾行されたのである。
当然、山脇が帰国する今日は、尾行も激しくなると、考えていたのだ。
「どう思うね?」
と、十津川は、すぐには、車から降りず、亀井に、きいた。
「山脇が、ニセの目撃者だと、わかってしまったんでしょうか?」
と、亀井は、いう。
「しかし、カメさん、われわれが、何かヘマをやったかな? 気付かれるような」
「それは、なかったと思います。西本刑事は、今でも、山脇を、本物の目撃者と、思い込んでいるくらいですから」
「それなのに、なぜ、尾行がつかなかったんだろう?」
「このスタジオは、知っていますから、空港から、ここまで、尾行する必要はないと、思ったのかも知れませんよ」
「だが、見廻したところ、誰かが、張り込んでいる気配はないがねえ。一刻も早く、山脇の口を封じたい筈なのにだよ」
十津川は、首をひねった。
急に、亀井が、顔色を変えて、
「ひょっとすると――」
「何だい?」
「彼等が、山脇を二十年前の目撃者と信じているとしますと、まず、その口封じをしたいだろうと思い

ます」
「そうだ」
「もう一つ、彼は、写真家です。二十年前の殺人を証明するような写真も、持っているんじゃないかと、考えるかも知れません。そうだとすると、このスタジオごと、爆破して、燃やしてしまおうとするんじゃないでしょうか？　山脇も、一緒にです」
「誰もいない間に、スタジオの中に、爆弾を仕掛けたか？」
十津川の顔色も、変っていた。
「そうです。山脇が、入るのを見はからって、爆発させるかも知れません」
「しまった！」
と、十津川は、叫び、パトカーから飛び出した。
山脇は、もう、弟子二人と、ビルの階段をのぼっている。
十津川と、亀井は、ビルに飛び込むと、階段を駆けあがって行った。
「山脇さん！　部屋に入っちゃ駄目だ！」
と、十津川は、怒鳴った。
山脇は、スタジオの前で、カギを取り出し、ドアを開けようとしていた。
「え？」
と、山脇が、振り向いた瞬間だった。
スタジオの内部で、閃光が走る。大音響と共に、猛烈な爆風が、襲いかかった。
十津川は、踊り場の床に伏せたと、いうより、叩きつけられたと、いった方が、いいだろう。
一瞬、頭の中が空白になり、耳が、聞こえなくなった。
背中に痛みが走った。何かが落下して来て、当たったのだろうが、その時は、痛みだけが、わかったといっていい。
何秒か、何分間かたって、十津川は、背中の痛みに、顔をしかめながら、立ち上った。
スタジオの分厚いガラスのドアは、粉々に砕けて

飛び散り、部屋の中からは、黒煙が、吹き出していた。

その奥に、赤い炎が、見える。

火炎が、起きているのだ。

亀井も、起き上った。

「火事だよ！　カメさん」

と、十津川は、怒鳴ったのだが、自分の声が、よく聞こえない。

亀井が、何かいって、階下へ駆けおりて行った。

多分、一一九番しに行ったのだろうと考え、吹き出してくる煙の中に、山脇たちを、探した。

「山脇さん！」

と、呼ぶと、煙の中から、一人、二人と、人影が、よろめきながら出て来た。

一一九番して戻って来た亀井と二人で、彼等を、抱えるようにして、階下へ、おりて行った。

黒煙は、窓からも、吹き出していて、それが、大通りを、蔽おうとしている。

野次馬が、集まって来ていた。やっと、サイレンを鳴らしながら、救急車が、駆けつけ、更に、消防車も、やって来た。

十津川と、亀井は、最初の救急車に、山脇たちを乗せた。

十津川が、少しずつ、落ち着きを取り戻して、気がつくと、自分は、左手から、血が流れているし、亀井は、額に、傷がついていた。

消防車が、放水を始めた。

それでも、炎が、猛烈な勢いで、窓から吹き出している。薬品が燃えるのか、強烈な異臭が、鼻につく。

（参ったな）

と、十津川が、呟いた時、二台目の救急車が、やって来た。

救急隊員が、降りて来て、十津川と、亀井は、強引に乗せられ、近くの病院に、連れて行かれた。

医者が診ると、十津川は、背中に、傷を負い、亀

井は、額と、手の甲に、負傷していることが、わかった。

「山脇さんたちは、大丈夫ですか？」

と、十津川は、包帯をしてくれている看護婦にきいた。

「三人とも、二週間ほどの怪我ですみそうですよ」

と、看護婦は、いった。

十津川は、ほっとしたが、また、忘れていた背中の痛みが、よみがえってきた。

弱ったのは、事件を知って、新聞記者たちが、押しかけて来たことだった。

彼等が、関心を持った理由も、わかり過ぎるほど、よく、十津川には、わかっていた。

有名な中国帰りのカメラマンが、スタジオごと、吹き飛ばされそうになった。それだけでも、事件なのに、捜査課の刑事が、その場に居合せたことが、記者たちの興味を引いたに違いないのである。

十津川は、取りあえず、山脇たちに、何も話さないでくれと、頼んでおいて、記者たちには、徹底して、おとぼけで、通すことにした。

「偶然、通りかかって、こんなことになり、自分でも、驚いていますよ」

と、十津川は、記者たちに、いった。

もちろん、そんな嘘を、相手が信用するとは思わなかったが、他に、説明のしようがないのだ。

まさか、山脇が、ニセの目撃者だともいえないし、二十年前の事件の目撃者だから、ガードしていたともいえなかった。亀井と二人だけの考えで、上の了承を得ずにやっていることだったからである。

「偶然というのは、信じられませんね」

「あのビルの中から、十津川さんと、亀井さんが、血だらけで出て来るのを見たという人もいるんですがねえ」

と、いった言葉が、記者たちの間から飛び出したが、十津川は、徹底して、偶然だと、とぼけた。

最後は、記者たちが、根負けした形で、帰って行

った。
「何とか、急場をしのぎましたね」
と、亀井が、疲れた顔で、いった。
「これからが、大変だよ。記者さんたちは、真相を知ろうとして、動き廻るだろうし、山脇カメラマンの殺しに失敗した連中が、このまま引き退るとも、思えないしね」
十津川は、思案顔で、いった。
「入院中を狙うでしょうか？」
「かも知れないから、カメさんは、しばらく、ここに入っていてくれ」
と、十津川は、いった。
それだけでは、不安なので、十津川は、若い西本と日下の二人に、外から、病院を見張るように、命令した。
二日、三日と、何の動きもなかったが、四日目に、亀井から、電話が入った。
「山脇が退院します」
「退院って、全治二週間だったんじゃないのか？」
驚いて、十津川が、きいた。
「回復が、意外に早かったこともありますが、前から、頼まれていた仕事があるので、それを、どうしても、やるというんです」
「引き止められないのかね？　入院してくれている方が、守り易いんだが」
「それが、本人の決意がかたくて、駄目なようです。今日中に、自宅マンションに帰り、明日から、仕事に入るそうです」
「明日から仕事？」
十津川は、驚くというより、呆れてしまった。
「そうです。中国へ行く前からの約束なので、どうしても、キャンセルは、出来ないというのです」
「身体は、大丈夫なのかね？」
「それが、もともと、頑丈に出来ているのかも知れませんね。全治二週間といわれていたのが、ほとんど、よくなっているそうです。無理をしなければ、

大丈夫だろうと、医者も、いっています」
「その仕事というのは、どんなものなんだ？」
「九州までの列車の旅です」
「列車？」
「一七時〇五分に、東京を出発する寝台特急『はやぶさ』に乗って、乗客の生態、夜の駅の様子、乗務員の活躍などを、写真に撮ってくる仕事だといっています」
「明日、その『はやぶさ』に、乗るわけかね？」
「弟子の二人も一緒に乗って、終点の西鹿児島まで、撮ってくるんだそうです。『列車』というタイトルで、写真集になるんだと、いっています。もちろん、車窓の風景も、ふんだんに、撮るといっています」
「東京から、西鹿児島までか」
「二十時間の旅です」
「狙う方にとったら、絶好のチャンスになるね」
「私も、それが心配ですが、逆に見れば、犯人を逮捕するチャンスでもあるわけです」
と、亀井は、いう。
確かに、そういえないこともないが、二十時間、動き廻る人間を、ガードするのは、大変な作業になるだろう。
「今日は、自宅マンションだな？」
「そうです。爆破されたスタジオから、歩いて七、八分のところにあるマンションです。今から、このマンションに張り込みます」
「カメさんは、大丈夫かね？」
「私は、かすり傷ですから」
と、亀井は、笑った。
「すぐ、交代をやるよ。カメさんと、明日のことで、打ち合せをしておきたいんだ」
と、十津川は、いった。
十津川は、すぐ若手刑事たちを、六本木にやり、亀井が、交代して、帰って来た。
十津川は、亀井と、コーヒーを飲みながら、明日、山脇が、「はやぶさ」に乗ってからの警備の打ち合せ

に、入った。
寝台特急「はやぶさ」は、十四両編成で、後部の八両が、熊本までである。
A個室寝台が一両、食堂車、ロビー・カー、それに、十一両の二段式B寝台である。
「仕事は、N出版のもので、山脇のために、個室の切符をとっていますが、弟子の二人は、B寝台の切符だそうです」
と、亀井が、いった。
「われわれは、どうするかな？」
もちろん、山脇は、また狙われるだろうから、守らなければならない。
問題は、どうやって、彼を守り、狙ってくる犯人を、逮捕するかということである。
「時間が、あり過ぎますね」
と、亀井が、いった。
それは、犯人にとって、いつでも、山脇を襲えるということだった。しかも、山脇は、逃げ場のない寝台特急の個室にいる。
「それに、列車の停車駅も多いよ」
と、十津川は、いった。
始発の東京駅と、終点の西鹿児島、熊本しか停車しないのなら、こんな守り易いことはないのだが、実際の「はやぶさ」は、東京、西鹿児島を入れて、二十八の駅に停車する。
つまり、そのどこからでも乗って来られるし、どこでも降りて、逃げられるのだ。
もう一つ、相手が、力と金を持っていることも、考えなければならないと、十津川は、思った。
それは、金と力で、どんな人間でも傭えるということである。今まで、こちらがマークしている人間が、山脇を襲うとは、限らないのだ。
「相手は、六本木のスタジオに、爆薬を仕掛けました。列車の中で、山脇を狙うにしても、銃やナイフを使うとは限りません」
と、亀井は、いった。

「また、爆薬を使うと、思うかね？」
「使う可能性もあります。列車の中だけを見張っていると、途中の鉄橋に爆薬を仕掛けて、列車もろとも、山脇を殺そうとするかも知れません」
亀井は、脅かすように、いった。
「そこまでやるかな？　そんなことをすれば、何十人、何百人という人が死んでしまうよ」
と、十津川は、いった。
「そうですね。堀江が、政治家ということを考えれば、ある程度の自制心が働くかも知れませんね。しかし、山脇の入る個室ぐらい、爆薬で、吹き飛ばそうと考えると思いますね。それは、覚悟しておいた方がいいと思います」
と、亀井は、いった。
「そうだろうね」
と、十津川も、肯いた。
とにかく、山脇を守るためには、同じ列車にならざるを得ない。
「犯人たちは、明日、山脇が、『はやぶさ』に乗るのを、もう、知っているだろうね？」
「前々から決っていた仕事だそうですから、当然、知っていると思った方がいいと思いますね」
「山脇が入る個室のナンバーまで、知っているだろうか？」
「切符は、N出版が、手配したそうですから、そちらから聞き出していれば、知っているでしょうし、知らなくても、『はやぶさ』に乗れば、いやでも、山脇が何号室か、わかってしまいます」

ブルートレイン

十津川と亀井は、ともかく、当日の寝台特急「はやぶさ」に、乗ることにした。相手の出方を考えて、対応を図るだけの時間の余裕はなかったからである。

他に、西本刑事たち五人、全部で、七人である。それ以上に、人を増やすことは、いたずらに、混乱を増すだけだろう。

山脇は、弟子二人、それにN出版の編集者の四人で、発車の十五分前に、東京駅のホームに着いた。

彼等の乗ったタクシーを、西本と日下の二人の覆面パトカーで、東京駅まで護衛したのだが、途中で、何事も起きない。尾行された様子もなかった。

相手は、山脇が、「はやぶさ」に乗るとわかっているから、別に、尾行する必要もなかったのだろう。

ということは、相手が、ブルートレイン「はやぶさ」の中で、山脇を殺す気でいることを、示しているように、十津川には、思える。

残して来た刑事たちには、堀江代議士、彼の秘書、正志会の幹部、それに、N組の動きを監視して、何か動きがあれば、すぐ、連絡するように、指示しておいた。

「はやぶさ」には、電話はついていないが、乗務員室には、無線電話がついている。JRに頼めば、連絡してくれるだろうし、新幹線で追いかけてくることも出来るのだ。また、「はやぶさ」の停車する駅に電話しておいて、駅員に、連絡を頼んでもいい。連絡の方法はいくらでもある筈なのだ。

十津川と、亀井の二人は、山脇たちよりも先に、東京駅に来ていた。

一七時〇五分に出発する「はやぶさ」は、すでに、10番線に入っていた。

車掌長に聞くと、十四室あるA個室寝台は、全て、売り切れているとのことだった。

山脇は、A個室の切符を持っているが、二人の弟子と、出版社の編集者は、B寝台である。

A個室は、全部で、十四室だから、あとの十三室の乗客は、どこの誰かわからないことになる。その中に、山脇を狙っている人間がいる可能性もある。

山脇は、A個室寝台のある13号車に、乗り込んだ。

部屋は、中央の7号室である。

デッキに一番近いところが、乗務員室で、その傍が、14号室である。反対側に向って、13、12、11号室になる。

14号室なら守り易いが、真ん中の7号室となると、見張るのが、大変だなと、十津川は思った。

十津川のそんな心配をよそに、山脇は、部屋に荷物を置くと、愛用のカメラを一台だけ持って、ホームに、飛び出して来た。

停車している「はやぶさ」や、ホームにいる乗客の姿を、精力的に、撮り始めた。

「呑気なものですな」

と、亀井が、眉を寄せて、いった。

十津川と、亀井の二人も、ホームに降りて、列車に乗り込む乗客を見ていた。特に、個室寝台のある13号車に、乗る乗客をである。

13号車に乗る車掌長には、不審な乗客がいたら知らせてくれと頼んである。

相手が、どう出てくるか、見当がつかないが、こちらは、地味に対応せざるを得ない。

一番、狙い易いのは、13号車の個室からだと考えて、山脇以外の乗客を、調べてみたかったのである。

発車まで、まだ八分あった。

切符は、全部売り切れているということだから、山脇以外に、十三人の乗客が、乗ってくる筈である。

その中に、山脇を殺す目的を持った人間がいる可能性が、あった。

警察に顔を知られている人間を、送り込んでくる

ことは、まず、ないだろう。堀江の秘書の顔写真は、全部集めて、刑事たちに覚えさせてあるし、N組の幹部の顔もである。

仕掛けてくるとすれば、十津川たちの知らない人間に違いなかった。

東京から、終点の西鹿児島まで、二十時間あるといっても、山脇の狙われる時刻が、いつと決っているわけではない。

守る十津川たちにしてみれば、一刻も早く、マークする人間を、限定しておきたいのである。

13号車の個室に、一人、二人と、乗客が、入り始めている。

乗り込むとすぐ、通路側の窓に、カーテンを閉めてしまう客もいれば、ドアを開けたまま、ベッドに寝転ぶ客もいる。

十津川は、一人ずつ、手帳に、その乗客の特徴をメモしていった。

○4号室　男、背広を着てサラリーマン風、三十五、六歳。黒いスーツケース一つ。

○9号室　男、高校生か。ビデオカメラを持っているので、夜行列車での旅を撮影する気かも知れない。

○14号室　女、一歳半くらいの幼児と一緒。実家に帰る母親か。年齢三十歳前後。

○1号室　男、五十歳くらい。中小企業の社長風。サムソナイトのトランク。すぐ、カーテンを閉めてしまった。

○3号室　女、二十二、三歳。若い男（三十五、六歳）と一緒である。男の方が、個室がとれなかったらしい。しばらくは、狭い個室に、二人でいる気のようだ。

乗客が、いっこうに現われない個室もあるが、これは、始発の東京駅からではなく、途中の駅から、乗って来るのだろう。

ベルが鳴った。

十津川と、亀井も、「はやぶさ」に乗り込んだ。
ベルが鳴り止むと、十四両編成の寝台特急「はやぶさ」は、ゆっくりと、ホームを離れた。
何かが、これから始まるのだ。
ブルートレイン「はやぶさ」の停車駅を、十津川は、書き出してみた。

横浜	一七時二七分	発
富士	一八時五五分	〃
静岡	一九時二二分	〃
名古屋	二一時三〇分	〃
岐阜	二一時五〇分	〃
京都	二三時一九分	〃
大阪	二三時五二分	〃
三ノ宮	〇時一六分	〃

三ノ宮の次は、岩国で、岩国は、四時四二分である。
この間、乗客の乗り降りはない。
「犯人も、逃げようがないから、この間は、山脇を、襲わないかも知れないな」
と、十津川は、亀井に、いった。
犯人だって、逃げることを考えているだろう。常識的に考えれば、山脇を殺しておいて、次の停車駅で、降りて逃げるという方法をとるだろう。とすれば、〇時一六分から、四時四二分まで、停車しないこの区間では、犯人は、山脇を殺すことはしないだろう。走っている列車では、逃げ場がないからだ。
車内で、山脇を殺すとすれば、列車が、三ノ宮に着く前か、岩国を出たあとということになるのではないか。
明日の午前四時四二分に、岩国を出たあとは、小郡、小野田、下関、門司、小倉、博多と、小刻みに停車していくから、殺しておいて、次の駅で降りて逃げるチャンスは、多い筈だった。
「われわれが、休めるとすれば、やはり、三ノ宮——岩国間かも知れませんね」

と、亀井も、いった。
もちろん、相手は、こちらが、そう考えることを予期して、裏をかくかも知れない。鉄橋爆破のような、思い切った手段に出るかも知れない。
鉄橋を、爆破して、列車もろとも、山脇を殺そうと考えているとしたら、むしろ、乗客の寝ている真夜中が、危い。三ノ宮——岩国間の方が、危険ということである。
つまり、いつでも危険ということなのだ。
横浜、富士と、停車していく中に、あいていたA個室が、ふさがっていく。
静岡で、十四の個室は、全部、乗客が、入った。
肝心の山脇は、危険など知らぬ顔で、自由に、列車内を歩き廻り、写真を撮り、食堂車で、食事をしている。
十津川と、亀井が、山脇の動きにつれて、場所を変えた。
静岡を出ると、山脇は、9号車のロビー・カーに、移動した。
ロビー・カーは、ソファや、椅子を、ゆったりと、配置してあり、くつろぐには、最高だった。
山脇は、自動販売機で缶ビールを買い、二人の弟子と、ソファで、飲んでいる。
十津川と、亀井も、ロビー・カーで、煙草に火をつけた。
山脇の弟子の一人が、缶ビールを二本持って来て、
「先生が、これをお飲み下さいと、いっています。少しは、リラックスした方が、いいのではないかと」
と、いう。
十津川は、笑って、断った。
車窓に眼をやると、すでに、外は、暗くなっている。
車掌長が、ロビー・カーに入って来て、一枚のメモを、十津川に、渡した。
「東京の警視庁から、警部さんへの伝言です」
と、車掌長が、いう。

十津川は、礼をいい、そのメモを受け取った。

〈堀江代議士と、秘書のグループに、これといった動きは見られない。新宿のN組は、捜査四課と協力して監視しているが、幹部の動きはなく、事務所も、静かである。すでに、何らかの指令が出ているためか、今回は、行動を起こさないのか、不明である〉

メモには、そう書いてあった。

十津川は、亀井にも、それを見せた。

「すでに、指令が出ていると見た方がいいと思いますね」

と、亀井が、いった。

動きがなくても、電話で、いくらでも、指示は、出来る。亀井の言葉を正解と見て、覚悟をしておいた方が、いいだろう。

列車が、轟音を立てて、鉄橋を渡った。

これで、いくつ鉄橋を渡ったか知れないが、十津川は、その度に、反射的に、身体をかたくした。ひょっとして、相手が、どこかの鉄橋に、爆薬を仕掛けているかも知れなかったからである。

列車は、名古屋に着いた。ここは、二分停車である。

二一時三〇分。他のホームには、まだ、通勤客らしい姿が見える。

山脇は、早速、ホームに飛び降りて、名古屋駅の夜景を、撮っている。十津川たちも、彼を守るために、ホームに降りた。

すぐ、また、ロビー・カーに戻る。

「やれ、やれ、忙しい人ですねえ」

と、亀井は、額に浮んだ汗を拭いた。

「銃で狙われたら、それこそ、簡単に、殺られてしまうな」

十津川も、ぶぜんとした顔で、いった。こんな守りにくい人間は、いない。ちょっと眼を離すと、カメラを持って、車内を歩き廻るからである。

また、山脇が、急に立ち上って、ロビー・カーを出て行く。

B寝台の客を、撮りに行くという。十津川たちも、その後に続いた。

B寝台は、グループの客が多い。若い女性だけの四、五人グループもいれば、家族連れで、九州へ行くという乗客もいた。

たいてい、まだ眠っていなくて、お喋りをしたり、缶ビールを飲んだり、トランプを楽しんでいたりする。

夜行列車では、恰好の題材ということなのか、山脇は、しきりに、彼等に、カメラを向けていく。

若い女性のグループは、きゃあ、きゃあいいながら、Vサインをしたりして、カメラにおさまっていたが、男だけの四人グループは、山脇が、執拗にカメラを向けるのに、腹を立てたのか、その中の一人が、突然、殴りかかってきた。

二十七、八の男で、もう、かなり酔っているようだった。

缶ビールを飲んでいる姿がいいというわけか、山脇が、その男だけ、狙い続けた揚句だった。

山脇は、「ごめん、ごめん」と、謝ったが、酔った相手は、赤い顔で、今度は、体当りしてくる。

山脇は、不意を打たれた感じで、通路に、尻もちをついた。

十津川は、あわてて、二人の間に、割って入った。

「なんだ？　てめえは」

と、男が、十津川にも、殴りかかってきた。他の三人は、ニヤニヤ笑いながら、見ているだけである。

「やめなさい」

十津川は、男を叱りつけておいて、山脇を抱き起こし、ロビー・カーに、連れて行った。

「無茶は、困りますよ」

と、十津川は、眉をひそめて、山脇に、いった。

山脇は、平気な顔で、

「あのくらいのことは、しょっ中ですよ。あんなの



を怖がっていたら、いい写真は、撮れません」
と、いった。
「それは、わかりますが、普通の時じゃないんです。あなたの命を狙っている人間が、この列車に乗っている可能性があります。あの男たちが、もし、それだったら、命は、ありませんでしたよ」
亀井が、怖い顔で、いった。
「それなんだが、僕のスタジオを爆破した連中が、僕を殺そうとしているわけですか？」
「そうです」
「しかし、僕は、二十年前のことなんか覚えていないんですよ。それなのに、なぜ、殺そうとするんですかね？」
十津川は、山脇にきかれて、当惑した。山脇は、ニセの目撃者なのだ。どうしても、申しわけないという気持がある。
「とにかく、用心して下さい」
と、十津川は、いった。
十津川は、個室寝台の客のことを、改めて、手帳に、書きつけた。
東京駅で乗った五人については、特徴を書いてあるが、その後、途中駅で乗って来た客のことである。
しかし、全員は、書き止めなかった。例えば、横浜から乗って来た2号室の乗客は、七十歳代の老婆である。車掌の話では、熊本までの切符を持っているということだから、ひとりで、故郷へ帰るのだろう。どう考えても、彼女が、山脇を襲うとは、考えられなかった。
十津川は、老婆と山脇を除いた乗客を、書き抜いていった。
○6号室　男、三十歳前後、サラリーマン風。肩幅が広く、運動神経は、ありそうである。山脇氏の隣りなので、注意。
○8号室　女、二十七、八歳。珍しく、和服姿で、一見ホステス風、6号室と同じく、7号室の隣りだ

から、注意すること。
○11号室　男、四十二、三歳。ゴルフセットを持参。小企業の社長風。ゴルフのクラブも凶器になり得る。
○10号室　男、吉川ミナト。TVタレント。犯人とは思われないが、一応、注意。傷害事件を起こしたことあり。
○5号室　男、五十歳前後。一見、大会社の重役に見える。車掌長の話では、部屋の中で英字新聞を読んでいたという。
○13号室　男、二十一、二歳。多分、大学生だろう。一八二、三センチと背が高い。横浜で乗って来たが、カメラで、車内の風景を、撮っている。要注意。
○12号室　男、六十五、六歳。小柄で、風采は上らないが、目つきが鋭いのが、気になる。ステッキを、持っている。

怪しいと思えば、みんな怪しく思えてくるのだ。ステッキも、ゴルフのクラブも、凶器だと思えば、凶器である。

京都を出たところで、今日最後の車内放送があって、滅灯された。

山脇は、まだ、自分の個室には戻らず、ロビー・カーに居すわって、窓の外を流れる夜景を、カメラに、おさめていた。

二三時四九分、大阪着。

すでに、深夜なのに、ホームに待っていて、「はやぶさ」の写真を撮っている子供たちがいた。

山脇は、早速、ホームに飛び降りて、その子供たちの姿を、撮りまくり始めた。

いやでも、十津川や、亀井も、ホームに降りて、山脇を、守らなければならなかった。

三分停車で、二三時五二分、「はやぶさ」は、大阪駅を、発車した。

「間もなく、午前〇時ですね」

と、亀井が自分の腕時計を見ながら、十津川に、いった。

「乗客も、おおかた、眠ってしまったみたいだね」
「山脇を車内で殺すのなら、一番いい時間じゃありませんか？」
確かに、乗客の大半が、眠ってしまっていれば、犯人は、誰にも見られず、通路を歩いて、山脇の個室に行けるだろう。
十津川は、西本刑事たちに、注意するように、いった。
山脇は、やっと、自分の個室に入ってくれた。
二人の弟子は、B寝台に移ったが、山脇のことが心配だといって、起きていた。
十津川と、亀井は、個室寝台の13号車の通路にいた。
十四の個室は、全て、ドアを閉めていて、通路にいるのは、十津川と亀井だけである。
（このまま、何も起きずに、過ぎていくのだろうか？）
しかし、それでは、また、困るのだ。もともと、山脇は、ダミーだからである。何も起きなければ、ダミーは、ダミーのままで、意味を、持たずに終ってしまう。
二十分足らずで、三ノ宮に着いた。
ここを出れば、次は、午前四時四二分の岩国まで、列車は、停車しない。いや、乗務員、機関士の交代のための運転停車はあるが、乗客の乗り降りはない。
「おかしいね」
と、十津川は、亀井に、小声で、いった。
「そうですね。ここまでに、山脇が、狙われると、思ったんですが」
と、亀井も、いう。
三ノ宮駅が、後方に、流れ去った。
このあと、山脇を襲ったら、列車から外へ逃げるのは、不可能である。窓を割ったり、非常コックを引いて列車を止め、ドアを強引に開ければ、列車から出られないことはないが、大変なことは、大変なのだ。そんなことをするより、三ノ宮までの間に襲

えば、次に停車した駅で、逃げられる。
だから、三ノ宮までに、山脇は、狙われるだろうと、考えていたのである。
「夜が明けてからかな？」
と、十津川は、いった。
四時四二分に、岩国を出たあとは、また、ひんぱんに、停車するようになるからである。
「そうかも知れませんが」
亀井は、何となく、落ち着かないという顔だった。
だが、午前一時、二時になっても、車内は、ひっそりと、静かだった。
13号車の十四の個室も、静かで、起きてくる客もない。みな、眠ってしまっているのだろうか。
「何も、起きませんね」
と、亀井が、いう。
「交代で、少し休むことにしようか」
と、十津川が、いった時だった。
突然、列車が、がくんと、スピードを落とした。
駅ではないところである。スピードは、どんどん落ち、ついに、停車してしまった。
十津川は、乗務員室に駆けて行き、車掌長に向って、
「何かあったんですか？」
と、大声で、きいた。
「信号で停車したんですが、何があったのか、今、問い合せています」
と、車掌長も、緊張した顔で、いい、無線電話で、連絡を取った。
亀井のところに戻ると、急な停車を、不審に思ったのか、一人、二人と、起き出した乗客が、ドアを開けて、通路に出て来た。
通路側の窓には、ブラインドが下されているのだが、それをあげて、外を見ている。
車掌長が、青い顔で、やって来ると、十津川の傍へ来て、小声で、
「この先の鉄橋に、爆発物を仕掛けたという電話が

JR西日本の本社に入ったそうなんです。万一を考えて、保線係が、今、問題の鉄橋を、チェックしているそうです」
と、いった。
「今、どの辺ですか？」
と、十津川は、窓の外を見ながら、きいた。
「新倉敷の手前です」
「大きな鉄橋ですか？」
「高梁川という川にかかる高梁川橋梁で、かなり長いものです」
「すると、点検には、時間が、かかりますね」
「そう思いますが――」
車掌長は、当惑した顔で、いった。
「例の奴等の仕業でしょうか？」
と、亀井が、きく。
「と思うんだが、目的は、何だろう？」
「列車を停めての嫌がらせですかね？」
「それとも、停車させて、外から、襲う気なのか」
十津川は、内ポケットに手をやり、拳銃があるのを確認した。
亀井は、窓の外に眼をやって、
「襲って来るような気配は、ありませんね」
と、いった。
7号室の山脇も、カメラを持って、通路に出て来た。
「どうしたんですか？」
と、十津川に、きく。
「何でもありませんよ」
「しかし、駅でもないところに、停っているじゃありませんか？」
山脇は、窓ガラスに、顔を押しつけるようにして、外を見つめていう。
他の乗客も、どんどん起きて来て、騒ぎ始めた。
若い女性客が、十津川のところにやって来て、
「この列車に、爆弾が仕掛けられているって本当なんですか？」

「誰が、そんなことをいったんですか？」
「すぐ、逃げないと、爆発するって！」
と、女は、大声をあげた。その声を聞いて、他の客も、騒ぎ始めた。
山脇は、そんな乗客たちに向っても、カメラを向けた。
四、五人の乗客が、騒ぎながら、どっと、乗降口に向って、殺到して来た。
たちまち、山脇の身体が、彼等に、包み込まれてしまった。
「しまった！」
と、十津川は、舌打ちして、彼等の中に、飛び込んで行った。
その眼に、きらりと光るものが見えた。刃物だった。
「わあっ」
と、山脇が、悲鳴をあげた。
ナイフを持った乗客の一人が、混乱にまぎれて、山脇に、切りつけたのだ。
三十歳くらいの男だった。
十津川は、その男に向って、体当りした。相手が通路にはじき飛ばされた。
もう一人の男が、ポケットから、ナイフを取り出した。
亀井が、今度は、その男に向って、躍りかかった。
女性客が、悲鳴をあげた。
山脇は、刺された左腕を押さえて、通路に、しゃがみ込んでしまっている。
亀井が、飛びついた相手は、通路を、逃げ出した。
「止まれ！　止まらないと、射つぞ！」
と、亀井が、拳銃を構えて、叫んだ。
男が、振り向いて、ナイフを、投げる。亀井は、構わずに、拳銃の引金をひいた。
乾いた発射音が、ひびいて、男が、通路に、横転した。
そのまま、呻き声をあげている。

亀井は、近寄って、その男に、手錠をかけた。
十津川の方も、山脇を刺した男を、取りおさえていた。
「皆さん。大丈夫ですから、落ち着いて下さい！」
十津川は、警察手帳を見せて、通路にいる乗客たちに向って、大声で、話しかけた。
「爆発は、ないんですか？」
と、女性が、まだ、青ざめた顔できいた。8号室の乗客だった。
「そんなものは、ありません」
と、十津川は、いった。
少しずつ、車内の騒ぎが、静かになっていった。
十津川は、山脇を、抱き起こした。
「大丈夫ですか？」
「かすり傷ですよ」
と、山脇は、青い顔で、いった。
亀井が射った男の方は、右肩から血を流している。
「車内に、医者がいるかどうか。聞いてくれませんか」
と、十津川は、車掌長に頼んだ。
「わかりました」
と、車掌長が、いった。
車掌長が、アナウンスしてくれて、乗っていた医者が、13号車に、飛んで来てくれた。
五十歳くらいの内科医だった。
乗務員室に常備している傷薬や、包帯を使って、犯人の一人と、山脇の応急手当をしてくれた。
その間も、二人の犯人は、押し黙ったままで、十津川や、亀井が、何を聞いても、黙秘し続けている。
山脇は、包帯を巻いて貰いながらも、片手で、カメラを持ち、通路の光景を撮ろうとしている。
十津川は、苦笑しながら、
「部屋に入って、少し休んで下さい」
と、山脇に、いった。
犯人の二人は、6号室のサラリーマン風の男と、13号室の若い、背の高い男である。

十津川と、亀井は、二人を、山脇の7号室から離れた13号室に押し込んだ。

西本刑事たちも、駆けつけたので、彼等に、犯人二人の訊問を委せることにした。

高梁川橋梁の点検も終って、「はやぶさ」は、ゆっくりと、動き出した。

「これで、すんだんでしょうか？」

亀井は、通路に立って、十津川を見た。

「わからないね。彼等のやり方としては、ずいぶん単純な気がするんだが」

と、十津川は、首をかしげていた。

山脇を殺すために、二人の男を、乗客として、13号車にもぐり込ませ、一方、途中の鉄橋に、爆薬を仕掛けたと電話して、列車をとめる。

乗客が、騒ぎ出せば、カメラマンの山脇は、職業意識として、個室から飛び出してくるだろう。そこを狙って、殺す。荒っぽいが、確実だと考えたのだろうが、単純すぎる。普通なら、二段、三段の用意が出来ている筈である。

しかし、一瞬の混乱のあとは、列車の中は、ひっそりと、静まり返っている。

「はやぶさ」は、次の新倉敷駅で、臨時停車した。

無線電話で連絡がしてあったので、駅には、岡山県警倉敷署の刑事たちが、待ち構えていた。

二人の犯人は、彼等に引き渡され、西本刑事が、事情説明のために、倉敷署に同行することになった。

「とにかく、その二人の身元を確認してくれ、問題は、誰の指示で、山脇を殺そうとしたかだ」

と、十津川は、西本に、いっておいた。

新倉敷には、五分間停車して、「はやぶさ」は、また、発車した。合計、四十五分のおくれである。

そのおくれを取り返そうとするように、列車は、スピードをあげて、走り続けていた。

騒ぎのあった個室寝台の13号車は、ひっそりと、静かになっていた。

通路にいるのは、十津川と、亀井だけになった。

「これで終りですかね？」
と、亀井が、また、いった。

第二撃

岩国着　五時二〇分
まだ、三十八分のおくれである。夜は、すでに、明けている。
次の小郡までは、一時間以上停車しない。
「何も起きませんね」
と、亀井が、いくらか、疲れの見える顔で、十津川に、いった。
十津川は、何か別のことを考えていたらしく、
「え？」
と、きき返した。
「いや、何も起きそうもないと、いったんですが」
「ああ、そのことか」
「何か、心配事でも？」

「8号室の女性が、なかなか、戻って来ないので、どうしたのかと、思ってね」
「終点の熊本までの切符を持っている筈ですよ。車掌長が、そういっていました」
「それは、知っているんだがね。何となく、気になるんだよ。まさか、岩国で降りてしまったんじゃないだろうが」
「それは、ないと思います」
と、亀井が、いった。
「なぜだい？」
「私も見ていましたが、ハンドバッグも、スーツケースも、持っていませんでした。乗って来た時、彼女は、白いスーツケースと、ヴィトンのハンドバッグを、持っていました。それを置きっ放しにして、降りてしまうことは、ないと思いますよ」
「しかし、もう、三十分近く、戻って来ないがね」
「ロビー・カーにでも行っているんじゃないかと思いますが」
と、亀井が、いった。
「すぐ、見て来てくれ」
十津川は、真剣な表情で、いった。不安を隠さなかった。
亀井は、あわてて、9号車に、飛んで行った。
戻って来ると、息を弾ませながら、
「ロビー・カーにもいません。トイレに行っているにしては――」
「長過ぎるよ！」
と、十津川は、叱りつけるように、大声を出した。
亀井の顔色も、変っていた。考えられることは、一つしかなかったからである。
二人は、山脇のいる7号室のドアを、叩いた。
ドアが開いて、山脇が、顔を出した。眠っていたのか、眼をしばたたいていた。
「何ですか？」
と、聞くのを、十津川と、亀井が、両脇から抱えるようにして、7号室から、引きずり出した。

「何をするんだ？」
と、山脇が、怒鳴る。
「逃げるんです！」
それでも、山脇は、まだ、事態が呑み込めない様子で、
「カメラが、部屋に置いてあるんだ！」
と、叫んでいる。
十津川は、山脇を、亀井に委せておいて、8号室のドアを開けた。消えた女の部屋である。
寝台は、きちんと、整頓されている。
隣りの7号室側の壁のところに、押しつける恰好で、白いスーツケースが置かれ、重石みたいな感じで、その上に、ハンドバッグが、のせてあった。
一瞬、十津川の顔に、迷いの表情が、浮んだ。
あれは、恐らく、時限装置つきの爆薬だろう。だが、何時にセットしてあるのかわからない。十分後に、爆発するのかも知れないし、五秒後かも知れないのだ。
それでも、十津川は、反射的に、部屋に飛び込むと、スーツケースと、ハンドバッグを持って、通路に飛び出した。
窓から、投げようとしても、どの窓も、固定式で、開けられない。
十津川は、同じ13号車の乗務員室に、突進した。そこの窓が開くことを、思い出したからである。
「すぐ、出てくれ！」
と、十津川は、車掌長に向って、怒鳴り、あっけにとられている相手の腕をつかんで、乗務員室の外に、放り出した。
「何をするんです！」
車掌長が、甲高い声をあげた。
「時限爆弾だ！」
と、十津川は、怒鳴り、ぴしゃりと、ドアを閉めた。
スーツケースを置いて、窓を開けた。
すぐ、投げようとしたが、人家が、点々と続いて

いて、投げられない。
十津川の額に、脂汗が浮んだ。
（おれも、ここで死ぬのか）
と、思った時、急に、眼の前の景色が変った。
鉄橋に、差しかかったのだ。
十津川は、窓から、思い切り、スーツケースと、ハンドバッグを投げた。
その間にも、列車は、走り続ける。爆発を見届ける暇は、なかった。
「はやぶさ」が、轟音を立てて、鉄橋を渡った時、後方で、爆発音が、聞こえた。恐らく、大きな水柱が上ったに違いないが、それは、十津川には、見えない。
十津川は、力が抜けて、狭い乗務員室で、座り込んでしまった。
ドアが、激しくノックされて、
「警部さん、大丈夫ですか？」
と、車掌長が、叫んでいるのが聞こえた。きっと、叫び続けていたのだろう。十津川に、聞こえなかっただけなのだ。
十津川は、ゆっくりと、立ち上ると、ドアを開けた。
車掌長と亀井が、こっちを見ていた。
「大丈夫ですか？」
と、亀井が、きいた。
「列車は、何ともなかったかね？」
「今のところ、何ともないようです。時限爆弾です？」
「そうらしいが、川に投げ捨てたんで、どうなったか、わからないんだ」
と、十津川は、いってから、車掌長に向って、
「結果がどうなったか、調べて貰えませんか？　鉄橋の上から、投げ捨てましたが、下に、舟でもいたら、大変ですから」
「わかりました。問い合せてみます」
と、車掌長は、いった。

十津川は、通路に出ると、山脇が、ロビー・カーにいるというので、そちらに、歩いて行った。
山脇は、十津川を見ると、
「いったい、どうなってるんですか？」
と、きいた。
「もう終りました」
「さっきのごたごたは、爆発物か何かだったんですか？」
「隣りの8号室の女が、部屋に、時限爆弾が入ったスーツケースを、置いていったんです。もし、爆発していれば、あなたのいる7号室の壁に大きな穴があいて、あなたは、吹き飛ばされていたと思いますね」
「その爆弾は、どうなったんですか？」
「川に投げ捨てました」
「それで、もう終りというわけですか？」
「そうです。もう終りだと思います」
と、十津川は、いった。
「大変な一日でしたね」
山脇は、溜息をついた。
「腕は、大丈夫ですか？」
「このくらいの傷は、どうということは、ありませんよ。もっと、大きな怪我をしながら、撮影をしたこともありますよ」
と、山脇は、いった。
時限爆弾のことは、すぐ、わかった。水中で、爆発した時、五十メートルほど上流に、地元の人間がいて、大さわぎになったが、死傷者は、出ていないということだった。
「魚が、だいぶ、死んだようですよ」
と、車掌長が、笑顔で、いった。
十津川が、もう終ったと考えた通り、事件は、起きずに、列車は、博多、久留米と、停車して行く。
「とにかく、山脇カメラマンが、負傷しただけですんで、よかったですね」
亀井が、ほっとした顔で、十津川に、いった。

その時、四、五人の男が、ロビー・カーに入って来た。

その中の一人が、山脇の傍へ来ると、

「昨夜は、すいませんでした。殴りかかったりして」

と、頭を下げた。山脇が、微笑して、

「ああ、あの時の」

「仲直りに、握手してくれませんか」

青年が、手を差し出した。

十津川も、それを見て、あの時の若者たちだなと、思った。

B寝台の客を、山脇が、撮っていて、なぜ写すんだと怒って、殴りかかって来た青年である。

(とにかく、仲直りはいいもんだ)

と、十津川も、微笑した。

二人は、握手した。

「僕たちは、次で降ります」

と、青年は、笑顔でいい、仲間の男たちと、ロビー・カーを出て行った。

「われわれも、そろそろ、降りる準備をしましょうか」

十津川が、山脇に、声をかけた時だった。

突然、山脇の身体が、ぐらりとゆれ、「うっ」と、呻き声をあげた。

十津川の顔色が、変った。

「山脇さん!」

と、抱き起こした。

その間に、列車は、スピードを落としていく。大牟田が、近づいたのだ。

山脇の身体が、小きざみにふるえ、強く噛んだ唇から、血が吹き出していた。

「カメさん。今の男だ!」

と、十津川は、振り向いて、怒鳴った。

亀井が、日下刑事たちを促して、ロビー・カーを飛び出して行った。

窓の外に、大牟田駅のホームが、見えた。

列車が停る。

車掌長が、青い顔で、入って来て、
「どうしたら、いいですか？」
と、きいた。
「とにかく、おろして、救急車を、呼んで下さい」
と、十津川は、いった。
扉が開くと、十津川と、車掌長は、駅員にも、手伝って貰って、けいれんを続けている山脇を、ホームに、担ぎおろした。
ホームの先端では、亀井刑事たちが、逃げる男たちを、追いかけていた。
五人の男たちは、ホームから、線路に、飛び降りて、走る。
亀井たちも、続いて、線路に飛び降りた。
亀井は、山脇と握手した男だけを、狙った。相手が、枕木につまずいて、転倒した。
「この野郎！」
と、叫びながら、亀井は、倒れている相手に、飛びついた。
相手が、猛然と、はねのけようとする。
亀井は、背後から、男を、殴りつけた。
一撃、二撃、三撃目で、やっと大人しくなった。
救急車が、駆けつけた時も、山脇の身体は、十津川の腕の中で、ふるえ続けていた。
すぐ、救急車の中に運び入れ、酸素吸入が行われた。
十津川は、亀井に、断って、救急車に乗り込んだ。
サイレンを鳴らして、走り出す。
山脇ののどが、ぜいぜい鳴っていた。顔はすでに、土気色だった。
（あいつが、犯人だ）
と、十津川は、改めて思った。
握手した時、恐らく、毒を塗った針を、掌にかくしておいて、それで、刺したのだろう。
それを、見抜けなかったことに、十津川は、自分自身に、腹を立てていた。
最初の狙撃と、次の時限爆弾を、何とか防ぐこと

が出来て、ほっとした。その隙き間を狙われてしまったのだ。

（助かってくれよ）

と、思う。

山脇が死んでしまったら、いくら、事件が解決できても、警察の汚点になることは、間違いないのだ。

十津川たちが、山脇というニセの目撃者を作りあげなければ、狙われることもなかったからである。

これは、明らかに、行き過ぎだったと、十津川は、思う。

病院に着くと、山脇は、すぐ、手術室に、運ばれた。

十津川は、その結果を、じっと、待つより仕方がない。

十津川は、待合室から、大牟田署に、電話をかけてみた。亀井たちは、そちらへ行っているに違いないと、思ったからである。

十津川の予想どおり、亀井たちは、犯人を連れて、大牟田署に移動していた。

「どうですか？」

と、亀井の方から、先に、きいた。

「わからんよ。助かってくれないと、困るんだがね」

と、十津川は、溜息まじりに、いってから、

「五人の男たちの身元は、わかったかね？」

「いや、まだ、何もわかっていません。が、中の一人は、気が弱そうで、こちらへ連行したら、青い顔をしています。この男が、突破口になるんじゃないかと、期待しています」

と、亀井は、いった。

「身元を証明するようなものは、持っていないのか？」

「今、こちらの刑事が、五人の所持品を、調べています」

「私は、しばらく、この病院にいるから、何かわかったら、電話してくれ」

と、十津川は、いった。

手術は、二十分、三十分たっても、終らなかった。
十津川は、自分を落ち着かせようと、煙草に火をつけ、待合室の中を、歩き廻り、禁煙と書かれてあるのを見て、あわてて、もみ消したりした。
更に、一時間ほどして、亀井が、病院に、顔を出した。
待合室には、外来の患者も多くなっていたので、十津川は、亀井を、連れて、病院の外に出た。
「どんな様子ですか？」
と、亀井が、きく。
「まだ、わからん。犯人の方は、どうだ？」
「こっちは、上手くいきそうです。電話でもいいましたが、犯人は、頑強に黙秘していますが、他の四人が、喋り始めています。今、県警の刑事が、調書を取っているところです」
「誰に頼まれたか、喋りそうかね？」
「喋ると思いますね。特に、一人が、びくついていますから、大丈夫と、思います。一人が喋れば、あとの連中も、自分だけが、悪者になりたくないから、口が、軽くなると見ています」
と、亀井は、いった。
看護婦が、来て、十津川を、呼んだ。
「どうなんですか？」
と、十津川が、きくと、中年の看護婦は、
「私には、わかりませんので、先生に、お聞きになって下さい」
と、だけ、いった。
そのいい方に、十津川は、不安になった。
亀井も連れて、手術室に行くと、廊下に、医者が、出ていた。
いかにも疲れたという顔で、
「出来るだけのことは、やりましたよ」
と、十津川に向って、いった。
「それで、助かるんですか？」
十津川は、医者の顔を、睨みすえるようにして、きいた。

「今の状態では、何ともいえませんね。わかるのは、あと、何時間か、たってからでしょう。身体の抵抗力が強ければ、助かりますが、弱ければ、駄目です」

「そんな無責任な！」

と、十津川が、思わず叫ぶと、医者は、顔をしかめて、

「青酸液を、注射されたようなものなんですよ。簡単に、回復はしませんよ」

と、強い調子で、いった。

「わかっていますが、どうしても、助けたいんです。お願いします」

十津川は、眼の前の医者に向って、深々と、頭を下げた。

待合室に戻ったが、不安は、深くなるばかりだった。

「とにかく、大牟田署に行きませんか。そろそろ、彼等が、自供しているかも知れませんから」

と、亀井が、励ますように、いった。

十津川は、山脇の容態に何か異変があったら、すぐ知らせてくれるように頼んでから、亀井と、病院を出た。

タクシーで、大牟田署へ着くと、日下刑事が、待っていて、興奮した口調で、

「犯人の一人が、堀江代議士の名前を、口にしましたよ」

十津川と、亀井は、その男に、取調室で会った。

五人の中の一人で、二十五、六歳に見える。眉が太く、一見すると、豪胆な感じがするのだが、青い顔で、声が、ふるえた。

「殺人なんて、知らなかったんだ」

と、男は、いった。

「まず、君の名前から、聞かせてくれ」

十津川は、わざと、最初から、やり直させた。事は重大なのだ。現役の政治家に迫らなければならない。それには、慎重の上にも、慎重を期す必要があった。

男は、「もう他の刑事に話したよ」と、文句をいいながらも、「松浦明」と、名乗った。
「他の四人とは、どんな関係なんだ？　何の仲間だ？」
と、亀井が、強い調子で、きいた。
「新宿歌舞伎町で、おれは、スナックで働いているんだ。他の四人は、荒井をのぞいて、おれの仲間だよ」
「仲間？」
「みんな、ボーイや、バーテンをやってる」
「なるほどね。荒井というのは、山脇カメラマンと、握手した奴だな？」
「そうだよ。まさか、それが、人殺しとは、知らなかったんだ」
「荒井とは、どんな関係なんだね？」
と、十津川が、きいた。
「おれたち四人のところへ、突然やって来て、金儲けがあるが、手伝わないかと、誘ったんだよ。名前は、知らなかったが、前に、N組の事務所で、二、三度、見たことのある男だった。それで、敬遠したんだが、一緒に、九州まで旅行するだけで、一人三十万ずつくれるといったんで、承知したんだ」
と、松浦は、いった。
「それだけの関係なのかね？」
「ああ、それだけだ。こんなことになると知っていたら、一緒に、くっついて来やしないよ」
「堀江代議士の名前を、いったそうじゃないか？」
「それは、おれじゃない。列車の中で、荒井が、自慢そうに、いったんだ。堀江代議士をよく知ってる。将来は、堀江代議士の秘書になるんだって、いったんだよ。政治の世界と関係が出来なきゃあ、金儲けは出来ないとも、いってたんだ」
と、松浦は、いった。
「その他には、荒井は、何かいわなかったのかね？」
十津川が、きいた。
「青木が、堀江代議士と知り合いなんて信じられな

いといったんだ。青木というのは、仲間の一人だよ。そうしたら、荒井は、N組は、政治団体の看板も持っていて、堀江には、恩を売ってるんだ。だから、堀江は、おれたちN組には、頭が、あがらないんだと、得意そうにいっていたよ」

「恩を売っているか」

と、十津川は、呟いた。

次に、十津川と、亀井は、荒井に、会った。

松浦が、荒井といっているだけで、これが、本名かどうかはわからない。指紋の照合を急いでいるから、その中に、正確な身元が、わかるのではないか。

荒井は、いぜんとして、黙秘を、続けている。

「黙ったまま、刑務所へ行く気なのかね？」

と、亀井が、荒井を、見すえるようにして、いった。

それでも、荒井は、貝のように、口を閉ざしている。

取調室のドアが開いて、県警の刑事が、メモを差し出した。

それには、荒井の指紋の照合の結果が、書いてあった。

名前は、荒井ではなく、生田功一、二十六歳。傷害の前科が三つあって、四年間、刑務所に入っていたことがある。現在、N組の構成員だが、同時に、政治結社N会の運動員でもあるらしい。

十津川と、亀井が、そのメモを、黙って見ていると、生田は、急に、不安気な表情になった。

「まずいねえ」

と、亀井は、脅かすように、生田に、いった。

「何がだ？」

やっと、生田が、声を出した。

「傷害の前科が三つもあったんじゃ、今度は、死刑は、まぬがれないからだよ。まあ、そのくらいの覚悟は出来ているんだろうがね」

「おれには、いい弁護士がついているんだ」

「N会の会長が、そういったのか？　それとも堀江

代議士の取り巻きが、いったのかね？」
と、十津川が、きいた。
「立派な弁護士だよ」
「だが、山脇カメラマンが死んだら、君の死刑は、確実だ。動機が、動機だからね」
「動機？」
「そうだ。堀江代議士は、自分の殺人を、隠すために、君に、山脇カメラマンを殺させようとした。こんな汚い動機では、情状酌量の余地は、全くないからな」
「ちょっと待ってくれ。おれは、あのカメラマンが、人のプライバシーをあばくような写真を撮って、金儲けをしていると聞いたから、正義の鉄槌を下しただけなんだ。あのカメラマンに狙われて泣いている連中も、喜ぶと聞いたんだ」
「山脇さんは、風景写真を、専門に撮ってるんだよ」
「写真雑誌に、写真を売ってる奴じゃないのか？」
「ぜんぜん違うよ。山の写真を撮ってるんだ。君は、騙されたのさ。騙されたまま、死刑になりたいのかね？」
「――――」
「堀江代議士に、頼まれて、山脇カメラマンを殺そうとしたと、証言するかね？」
「直接、おれに命令したのは、会長だよ」
と、生田は、いった。
「N会の寺本会長かね？」
「そうだ。会長が、おれに頼むと、いったんだ。第一撃と、第二撃が用意されている。多分、それで、始末できるだろうが、もし、失敗した時は、おれが、最後に、殺ることになっていたんだ」
少しばかり、自慢げに、生田は、いった。
「青酸を塗った針を、掌にかくして、握手する方法は、君が考えたのかね？」
「おれの兄貴分が、使った手さ。相手が有名人ほど、使い易いんだ。ファンだから、握手してくれといえるからね」

「列車の中で、ケンカをしたのも、計算でやったのかね？」
と、十津川は、きいてみた。
生田は、笑って、
「臨機応変というやつだよ。あいつが、カメラを向けて来たんで、ここで、きっかけを作っておこうと考えたんだ。あとで、仲直りだといって、握手できるからね」
「わかった。とにかく、法廷で、全てを話すと約束すれば、君が、事情を知らずに、命令に従っただけだということにしてやる」
と、十津川は、いった。
生田は、まだ、疑わしげに、
「本当に、約束を守って貰えるのかね？」
「それは、そちらの出方次第だよ。今、山脇カメラマンは、生死の境をさ迷っている。死んでしまってからでは、どんな取引きにも応じられないが、今なら、応じられる。こちらの狙いは、君じゃなくて、君に、命令した人間だからだ」
「オーケイ」
と、生田は、肯いて、
「法廷でも、全部、話すさ」
「寺本から命令されたこと、その寺本が、堀江代議士とつながっていることもだね？」
「会長の自慢は、政界につながりがあるってことだった。前の堀江代議士や、今の息子に、ずいぶん、恩を売って来たって、いってたね。今度も、それだったと思うよ。それが、失敗したんだから、うちの会長も、もう終りだろうね」
「恩を売ったという、その内容を、寺本は、君に話したかね？」
「いや、話してくれなかった。しかし、想像はついたよ」
「どんな風に？」
と、亀井が、きいた。
「N組の北原が、元刑事を殺して、自首したことが

あった。勢い込んでさ。奴を知ってるが、殺しなんか出来る人間じゃない。あれは、うちの会長がやらせたことで、きっと、あれも、堀江代議士に、恩を売ったんだろう。もっとも、北原は、理由も教えられずに、元刑事を殺したんだろうがね」
「他には？」
と、十津川が、きいた。
「他にねえ」
と、生田は、考えていたが、
「堀江代議士の秘書が、N会へ来たことがあったよ。あれは、寺本会長に、金を持って来たんだと思うね」
「それは、いつだね？」
「北原が、元刑事を殺したあとだ。多分、前金が払われていて、おれが、見たのは、成功報酬みたいなものだったと思うね」
「その秘書の名前は、覚えているかね？」
「いや、顔は、覚えてるよ」
と、生田は、いった。
十津川は、すぐ、似顔絵を、作ることにした。
生田の記憶をもとに作られた似顔絵は、四十二、三歳の男の顔だった。
十津川は、それを、警視庁にファックスで送り、堀江代議士の秘書の中にいるかどうかを、調べて貰った。
二時間ほどして、本多一課長から、電話が、入った。
「似顔絵の男は、奥田義郎という四十三歳の秘書だよ。秘書といっても、堀江の後援会で働いていて、私設秘書になったというところだ。例の石崎と同じで、主として、ダーティな面を取り仕切っているようだね」
「それなら、よくわかります」
「ところで、三上部長が、心配しているよ。大丈夫なのかとね」
本多が、いった。
「大丈夫です。今度は、堀江代議士に、有無は、い

わせませんよ」

と、十津川はいい、電話を切った。

しかし、十津川の顔は、暗いものだった。

堀江を追いつめることが出来ても、もし、山脇が死ねば、警察を辞めるつもりだったからである。死ななくてもいい人を、殺してしまったことになるからだ。

生田の自供が、新聞にのると、あとは、雪崩現象が、起きた。

「はやぶさ」の車内で、山脇を襲撃した二人の男も、沈黙を破って、喋り始めた。

時限爆弾を仕掛けて逃げた女も、その中に、逮捕されるだろう。車掌長や、十津川たちの記憶をもとに、女の似顔絵が作られ、公表されたからである。

十津川と、亀井は、新幹線で、東京に戻った。

戻ったその日に、N会の寺本が、自殺した。

政治団体の会長になり、日本の政治をただすと、日頃、口にしただけに、日本刀で、切腹するという派手な死に方だった。

十津川と、亀井は、疲れた体に鞭打って、現場であるN会のビルに、急行した。

ビルの最上階にある会長室だった。

部屋の隅には、大きな瀬戸の皿があり、その上で、書類を、焼いた跡があった。

「死ぬ前に、堀江に連絡したかな」

と、十津川は、呟いた。

十津川は、亀井と一緒に、議員会館に、堀江を訪ねた。

十津川は、堀江一人に会いたかったのだが、堀江正志の時代からだという秘書が二人も、傍についての会見ということになった。一人は、弁護士の資格を持つ工藤という男で、手強そうに見えた。

「N会の会長の寺本さんが、自殺したことは、ご存知ですか？」

と、十津川は、いきなり、きいた。

堀江が、返事をするより前に、工藤が、

「先生は、知りませんよ。N会などというのは」

「しかし、こちらの秘書の一人、奥田さんが、よく、N会に顔を出しているということですがね。これは、確認されていますよ」

亀井が、強い声で、いった。が、工藤は、平気な顔で、

「それは、奥田が勝手に、行ったんでしょう。きっと、彼の友人が、N会にいるんじゃありませんかね。そうしたプライバシーまで、どうこういえませんから」

「堀江さんは、前から、N会に、援助金を出していたんじゃないんですか？　お父さんの時からです」

と、十津川は、きいた。

「それについても、知らないと、申し上げるよりありませんね」

と、工藤が、いう。

「私は、堀江さん本人に、お伺いしているんですがね」

「僕も、知りませんよ」

と、やっと、堀江が、いった。

「寝台特急『はやぶさ』の車中で、一人のカメラマ

ンが狙われました。襲った連中は、逮捕して調べていますが、全員が、堀江さんの名前を、口にしているんですがね。あなたの名誉を守るために、カメラマンを殺そうとしたというんです」

「そんなバカげた話には、コメントの仕様がありませんね」

と、工藤が、いった。

「本当に、関係ありませんか？」

「ありませんよ。とんでもない、いいがかりだ」

「堀江さん自身にも、心当りは、ありませんか？」

十津川は、まっすぐに、堀江を見つめた。

堀江は、ふと、目をそらせて、

「ありません」

と、低い声で、いった。

その時、若い秘書が入って来て、工藤に、耳打ちした。

工藤の顔色が、変るのが見えた。血の気が、引いてしまっている。

「とにかく、今日は、帰って頂けませんか」

と、工藤は、青い顔で、十津川たちに、いった。

「そういわれても、まだ、お聞きしたいことがあるんですがね」

「明日、必ず、もう一度、お会いします。約束しますから、今日は、帰って下さい」

と、工藤は、頭を下げた。

仕方なく、十津川と、亀井は、腰を上げた。

議員会館を出て、パトカーに戻った。

「工藤という秘書が、やたらに、あわてていましたね。いったい、何があったんでしょうか？」

と、亀井が、きいた。

「堀江を守ろうと考えている男が、狼狽しているんだから、堀江のことだろうがね」

「しかし、堀江の弱味を握っていると思われるN会の寺本は、自殺してしまいましたし、『はやぶさ』の車内で逮捕した連中は、寺本の指示で動いていて、直接、堀江から、命令されてはいません。彼等が、

新しく、どんな自供をしても、堀江は、知らないことだといって、押し通せるんじゃありませんか」
と、いって、亀井は、首をかしげた。
「その通りだがねえ」
十津川は、肯いた。
亀井は、パトカーを、スタートさせた。
十津川は、しばらくの間、黙って、考え込んでいたが、
「一つだけ、考えられることがあるよ」
と、いった。
「どんなことですか？」
「寺本のことさ」
「しかし、彼は、遺書も残さずに、自殺してしまいましたよ」
と、亀井が、いう。
「遺書は、あったのかも知れないよ」
「と、いいますと？」
「彼は、国を憂える志士を、気取っていた。だからこそ、切腹という派手な死に方をしている。そんな男が、何の遺書も書かずに、死ぬこと自体が、おかしいんだよ」
と、十津川は、いった。
「そういわれれば、そうですが」
「寺本は、必死で、堀江を守ろうとしたし、正彦の父親の堀江正志に、私淑していた。寺本にとって、今の堀江ジュニアの性格や、生き方は、腹立たしかったに違いない。彼を守るために殺人を重ねなければならなかったんだからね」
「わかりました。寺本が、死に際して、堀江への手紙を書いている可能性がありますね」
「それも、ただの手紙じゃない。もっと、怖い手紙だったのかも知れないよ。それを、寺本は、友人に託したんじゃないかな。もし、堀江が、代議士を辞職しなければ、その手紙を、友人の手で公表すると、いったようなだ」
「それで、工藤が、真っ青になったんですね？」

亀井の声が、大きくなった。

「私は、そう考えたんだ。合っているかどうかは、今後の堀江の動きで、わかるんじゃないかね」

と、十津川は、いった。

十津川の予感が当っていたことは、翌日になってわかった。

突然、堀江正彦が、代議士を辞め、アメリカへ行くことになったからである。

その送別パーティが、開かれた。

十津川は、堀江の逮捕令状を取りたかったが、それも、間に合いそうもなかった。こうした事件では、上の方が、やたらに、慎重になるからである。

パーティは、ホテルの大広間を借り切って、盛大に行われた。

十時頃に、亀井と二人、招待されていなかったが、出かけて行った。

受付をやっていたのは、正志会の若い男たちで、明らかに、緊張していた。

十津川と亀井が、会場に入ろうとすると、彼等は、前に立ちはだかるようにして、

「招待状のない方は、お帰り願いたい」

と、切り口上で、いった。

「帰ってもいいが、その代り、堀江さんに対する逮捕状を持って来る。それでもいいのかね？」

十津川が、脅した。

青年たちは、あわてて、奥に消え、誰かの指示を受けていたようだったが、戻って来ると、

「どうぞ入って下さい。但し、中で、騒がれるのは困ります」

と、いった。

広間には、政財界の人たち五百人以上が集まっていたが、どの顔にも、戸惑いの色が見られた。あちこちで、人々が、かたまって、ひそひそと、話を交わしている。

最初に、堀江が、あいさつに立った。日頃のご厚情に感謝しますと、いってから、

「政界に入り、つくづく、自分の不勉強を感じました。この際、いったん政界から出て、国際人としての勉強をしたいと、決意致しました。後援会の皆様には、本当に申しわけなく思っておりますが、幸い、正志会には、工藤君という人材がおります。私よりも、才能のある人です。次の選挙では、ぜひ、工藤君を、当選させて頂きたいと思います」

と、続け、自分の秘書だった男を、全員に紹介した。

面子を保つための一つの儀式に見えた。警察に追われて、アメリカに逃げ出すのだという形だけは、絶対に、とりたくないのだろう。

十津川と、亀井が、苦笑しながら見守っていると、五十五、六歳の、小太りの男が近づいて来て、

「十津川さんですね？」

と、声をかけてきた。

十津川が、肯くと、男は、「下村です」と名乗り、

「ぜひ、お話したいことがあります。こちらに来て頂きたい」

「何の用ですか？」

「とにかく、こちらへ」

と、下村は、十津川たちを、控室へ連れて行った。

「私は、少しは、政界で知られている男です。その私が、約束しますが、堀江は、絶対に、二度と、帰国させません」

と、下村は、いった。

下村は、眼を光らせている。その顔に、十津川は、見覚えがあった。政治家のパーティで、時々、見る顔である。

下村という名前にも、記憶があった。何とかいう政治団体のリーダーだった。恐らく、自殺した寺本も、この下村のようになりたかったのだろう。

「寺本さんが、あなたに、何かいい残したんですか？」

と、十津川は、きいた。

下村は、微笑して、

「寺本君は、憂国の士です。私に、後事を託して、自害した。その遺書を、私は受け取っています。その中に、これ以上、堀江正彦を、政界に置くのは、日本のためにならぬ、下村さんの力で、引退させて欲しいと書いてありました。ただし、堀江一人を辞めさせはしない。自分は、彼を盛り立てて来た責任を取って死ぬというのです。立派な男です。私は、そのことを、堀江に伝えました。彼も、さすがに、堀江正志の息子です。こちらの意のあるところをわかってくれて、辞職しました。アメリカに行き、二度と、帰国することはないでしょう」

「向うで、病院に入れるわけですか？」

と、十津川は、きいた。

「それは、私の知らんことです」

「なぜ、二度と帰国しないと、わかるんですか？」

「この下村が、約束します。それで、十分でしょう」

と、下村はいい、

「それで、あなたに頼むのだが、今回の事件は、これで、全て終了したことにして頂きたい。あなたのところの三上刑事部長は、すでに、了解してくれている」

と、つけ加えた。

「私には、何ともいえませんね」

十津川は、眉をひそめて、いった。

「だが、もう、事件は終ったんだ。あなたも、そう思った方がいい」

下村は、押しつけるようにいい、十津川たちを残して、部屋を出て行った。

「下村という人は、いろいろと、力のある人間のようですね」

と、亀井が、いうと、十津川は、舌打ちして、

「私は、ああいう人間を見ると、虫酸が走るんだよ。自分一人で、日本を背負ったような気でいるんだ」

「しかし、あの男の一言で、堀江が、政界から引退して、アメリカへ行ってしまうことに、なったわけでしょう？」

「脅迫さ」
「脅迫？」
「寺本は、遺書を残していたんだ。その遺書を、下村が、持っていて、堀江や、堀江のまわりの人間を、脅したんだと思うね。引退しないと、その遺書を、公にするぞといってね。それで、堀江より、彼のまわりの人間たちが震えあがってしまったのさ」
「それで、堀江自身の意志というより、まわりの人間が、堀江に詰腹を切らせたということになります・か？」
と、亀井が、いった。
「みんな、自分が、可愛いんだよ。正志会の連中は、堀江正志を持ち上げて、利益を得ていた。それが、台無しになることが、怖いんだ。だから、堀江ジュニアを、体よく、アメリカに追い払い、その秘書を、担ぎあげて、今までの利益を守ろうと懸命なんだ」
「寺本の遺書をぜひ、みたいですね」
と、亀井が、いった。
「それに、堀江正彦の犯罪が、書いてあれば、私も、欲しいよ」
と、十津川は、いった。
二人が、会場を出ようとした時、丁度入って来た佐々木季見子と、ぶつかった。
「やあ」
と、十津川が、声をかけると、季見子は、真剣な眼で、彼を見て、
「父が殺された原因は、堀江という代議士のせいなんでしょう？」
「もう代議士じゃありませんよ。辞めて、アメリカへ行くことになりました」
と、十津川は、いった。
「危くなったので、逃げるわけですわね」
「そうもいえますね」
「警察は、逮捕できないんですか？」
季見子が、とがめるように、いった。
「残念ながら、今は、逮捕できません。証拠があり

ませんのでね」
「じゃあ、見逃すんですか？」
「今日は、です。しかし、私は、絶対に、諦めませんよ」
と、十津川は、いった。
「でも、今は、さっさと、アメリカに行ってしまうんでしょう？」
「そうです」
「それなら、私は、堀江さんに、花束を渡して来ますわ」
季見子は、うしろ手にかくしていた小さな花束を見せて、十津川たちの横をすり抜けて、パーティ会場に、入って行った。
一瞬の空白のあと、十津川は、
「しまった！」
と、叫び、亀井と二人、季見子のあとを、追いかけた。
パーティは、まだ続いていたが、奇妙なことに、主賓の筈の堀江の傍に、誰も、寄っていかないのだ。
堀江が、まずい立場になっていることに、全員が、気付いているのだろう。
ぽつんと、椅子に腰を下している堀江の傍に、季見子が、近寄って、花束を差し出した。
「ありがとう」
と、堀江が、ニッコリしたときだった。
季見子は、いきなり、小さなナイフを、右手に持って、堀江に、切りつけた。
十津川と、亀井が、駆けつけて、
「やめなさい！」
と、叫んだ。
堀江が、椅子から転げ落ちて、右手をおさえている。
その右手から、血が流れ出していた。
正志会の面々が、あわてて、堀江の身体を抱きかかえて、パーティ会場から、出て行った。
季見子は、ナイフを持ったまま、荒い息を吐いて

いる。
十津川が、彼女の手から、ナイフをもぎ取り、自分のポケットにかくした。
やっと、気がついた記者たちが、駆け寄って来て、
「何があったんですか？」
「堀江さんに、何があったんです？」
と、質問を浴びせてきた。
亀井が、季見子を自分の背後に隠すようにしながら、
「何もありませんよ」
「堀江さんは、どこですか？　その女の人は、誰なんです？」
「堀江さんは、気分が悪くなって、控室に引っ込みましたよ」
と、十津川は、記者たちに向っていった。
「気分が悪くなるのも無理はないね」
記者の一人がいうと、それで、納得したみたいに、彼等は、その場を離れて行った。
十津川と、亀井は、季見子を、廊下に、連れ出した。
「気がすみましたか？」
と、十津川が、きくと、季見子は、大きく、息を吐いて、
「ああでもしないと、父が可哀そうで」
「その気持は、わかりますよ」
「私は、逮捕されるんでしょう？　それは、覚悟しています」
と、季見子が、いう。
十津川は、亀井と、顔を見合せてから、
「それは、わかりませんよ。あなたが、ナイフで切ったといっても、当の堀江が、そんなことはないと、否定するかも知れませんからね」
と、季見子に、いった。
十津川の予想は、当った。堀江も、正志会の人間たちも、送別パーティでは、何もなかったと、主張したからである。

刺されたといって、事件になり、堀江自身のことを、あれこれ、調べられるのが、嫌だったからであろう。

「やっぱり、想像した通りでしたよ」

と、十津川は、季見子に、電話で、伝えた。

「私は、罪にならないんですか？」

「君を逮捕しても、検事は、起訴しないよ。被害者が、いないんですからね。それに、私も、亀井刑事も、君を、逮捕したくない」

「堀江正彦の傷は、どうなんですか？」

「幸か不幸か、たいしたことは、なかったようですよ。病院にも行ってないし、明日、予定どおり、アメリカへ行くことになっていますからね」

と、十津川は、いった。堀江の出発は、明日の午後だった。

堀江が、乗るのは、一六時二五分成田発、ロス行の日航機だった。

十津川と、亀井は、成田空港へ出かけた。

驚いたことに、見送りの人間の姿が、どこにもない。正志会の面々も、今日は、来ていなかった。昨日の送別会に出席したことで、義理は果たしたということなのだろう。

堀江と同行するのは、若い秘書一人と、医者が一人だけだった。恐らく、向うに着いたら、前に入院した大学病院に、また入るのだろう。

出発ロビーで、十津川と亀井は、堀江に、声をかけた。

堀江は、生気がなかった。自分が権力の座から追われ、強引に、アメリカに追い払われて行くことを、実感しているからだろう。

堀江は、泣き笑いの表情で、十津川を見た。

「私を打ち負かして、さぞかし、楽しいだろうね？」

「まだ、まだですよ」

と、十津川は、いった。

「まだ――？」

「証拠が揃ったら、アメリカへでも、何処へでも、

あなたを、逮捕しに行きますよ」
十津川が、いうと、一瞬、堀江は、怯えた眼になった。
「まだ、私を、追い詰める気なのかね？」
「あなたは、何人もの女性を殺してるんだ。それを隠すために、元刑事も、殺されている。彼等に代って、絶対に、あなたを、逮捕して見せる。それは、約束しておきますよ。どこへ逃げても、捕えて、法廷に引き出して見せる」
十津川は、語気を強めて、いった。
若い秘書が、あわてて、
「そろそろ、行きましょう」
と、堀江を促して、搭乗ゲートに向って、歩き出した。
「堀江の奴、怯えていましたね」
亀井が、十津川の横に立って、堀江を見送りながら、いった。
「もっと、怯えさせてやりたいね」
と、十津川は、いった。
堀江たちを乗せたボーイング747が、轟音を残して、飛び立って行った。
十津川と、亀井は、しばらく、ジェット機が消えて行った空を見ていたが、
「帰ろうか」
と、十津川が、いった。
二人は、パトカーに戻った。
「これから、どうされますか？　上の方は、これで、もう事件は解決したと、考えたがるでしょうが」
と、亀井が、きいた。
十津川は即座に、
「そうだね。さいわい山脇さんも一命をとりとめたことだし、とりあえず、下村に、会いに行こうじゃないか。彼が持っているに違いない寺本の遺書を、取りあげるんだ。下村を、脅してでもね」
「行きましょう」
と、亀井も、応じた。

この作品は「産経新聞」（夕刊）に昭和62年7月7日から昭和63年7月16日まで「傷痕の時」のタイトルで連載された。

日本音楽著作権協会（出）許諾第8857081-801号

十津川警部の挑戦(下)
昭和六十三年 十月二十日　初版発行
昭和六十三年十一月二十日　4版発行

著者　西村京太郎
発行者　増田義和
発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〒一〇四
〇三(五六二)二〇五一(編集)
TEL　〇三(五三五)四四四一(販売)
振替東京一―三三六
支局　大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六(三一二)一五七三
印刷　大日本印刷　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN4-408-50113-1
©K. Nishimura　1988
Printed in Japan

JOY NOVELS

急行奥只見殺人事件
西村京太郎

早春の奥只見で連続変死体。加えて秘境・大内宿では刺殺体…。十津川警部と地元警察の意見対立。

特急北アルプス殺人事件
西村京太郎

雪深い飛騨高山で殺人事件発生。アリバイを崩そうと犯人に肉迫する十津川警部の前にまた死体が。

神話列車殺人事件
西村京太郎

出雲、筑紫、高千穂と三大神話の地を結んで特急列車が走る。抗いがたい憎悪と愛と殺意を秘めて。

七人の証人
西村京太郎

誘拐された十津川警部が目を覚ますと、そこは絶海の孤島。七人の男女が過去の証言に生死を賭す。

殺しの双曲線
西村京太郎

雪山の奥で展開する六つの惨劇は、はたして双生児の兄弟が立てた報復計画か。迫真の書下し長編。

イレブン殺人事件
西村京太郎

ホテル荒し、エリート商社マン、若手公務員……うかつにも、予期せぬ死のトラップにつかまった。

EF63形機関車の証言
西村京太郎

駅ホームでのスナップ写真のアリバイが崩せない十津川警部は、列車の現場でついに……。

急行もがみ殺人事件
西村京太郎

東北の温泉地を結ぶ連続殺人事件！　巧妙な列車トリック。冷徹な犯人を十津川警部たちが追う！

定価各680円（昭和63年10月現在）